

---

# 満洲の記憶

第6号

---

追憶片々——満洲引揚者のインタビュー記録 ..... 回想：古海建一  
編集・解題：大野絢也、佐藤仁史、井田光祝

延吉からの引揚げ体験——終戦から日本に帰国まで  
..... 執筆：東郷量子  
編集：朴敬玉

遊牧の雑草 ..... 執筆：甲賀綏一、甲賀あや  
解題：甲賀真広  
編集：甲賀真広、森巧、梅村卓、大野太幹

ある少女の満洲生活——細谷和子氏史料紹介 ..... 大石茜

寄贈資料目録 / 活動記録 / おしらせ

---

「満洲の記憶」研究会

2020年3月

# 追憶片々

## ——満洲引揚者のインタビュー記録——

語り手：古海建一

編集・解題：大野絢也、佐藤仁史、井田光祝

### 解題

本稿は、満洲帝国総務庁次官古海忠之のご子息であり、株式会社東京銀行常務、ユアサ商事代表取締役会長、社団法人国際善隣協会会長などを歴任した古海建一氏に対して行った3度にわたるインタビューの記録である。古海忠之の事跡については、片倉衷・古海忠之『挫折した理想国——満洲国興亡の真相』（現代ブック社、1967年）、古海忠之『忘れ得ぬ満洲国』（経済往来社、1978年）、古海忠之・城野宏『獄中の人間学——対談』（竹井出版、1982年）などの本人による回想録や、氏の死後に刊行された古海忠之回想録刊行会編『回想古海忠之』（古海忠之回想録刊行会、1984年）など親族や交友関係のあった人々の回想録によって、広く知られるところである。

古海建一氏は、1933年に満洲国新京市にて古海忠之の長男として生まれた。1946年、日本への引揚後、麻布学園中学校、麻布学園高等学校を経て、東京大学

法学部に入学した。1956年、東京大学法学部公法学科卒業後、同年4月に株式会社東京銀行に入行した。同社においては、企画室長、為替資金部長、取締役大阪支店長、常務取締役を歴任した。1988年、ユアサ産業株式会社取締役副社長に就任して以降、同社代表取締役社長、ユアサ商事株式会社代表取締役副会長、代表取締役会長を歴任し、1998年に同職を退任した。引揚者団体との関係では、1991年に社団法人国際善隣協会監事に就任して以来、理事、理事長、会長を歴任し、2013年以降は同会の顧問を務めている。なお、外国為替論の専門家でもあり、1986年度と87年度には京都大学経済学部非常勤講師として外国為替論を講じ、著書に『外国為替入門』（日本経済新聞社、1990年）がある。

筆者と古海氏との交流は、2013年に「満洲の記憶」研究会の活動の一環として関連史料や関係者（特に大同学院）の足跡

を調査していた際に国際善隣協会理事長として応対していただいたことがきっかけで始まった。古海氏のご自宅が研究会の主要な活動の場としている一橋大学と同じく国立市にあることから、折に触れて自宅に伺い様々なご教示を賜っている。古海氏の満洲経験や父の思い出については、「満洲落日（私の終戦体験）」（1948年初稿、2006年最終稿）、「1956年中国渡航記——或る家族の記録」（『東北アジア近現代史研究会会報』15号、2003年所収）、「父の思い出」（前掲『回想古海忠之』）などの手稿類や既発表のエッセイをまとめた『追憶片々』（私家版、2011年）に詳しい。当該書に幼少期に体験した満洲国での生活や満洲からの引揚げについて、当該書に相当詳しく記録されているが、当事者から直接当時の雰囲気などについて伺いたいという動機から、筆者らは古海氏にインタビューを申し出、快諾を得た。若い世代にとって特に得がたい機会であると考えた佐藤は、一橋大学において担当する2019年度「社会史史料講読（アジア）B」の15名の受講生、大学院ゼミナールに所属する2名の博士課程学生とともにお話を伺った。限られた授業時間で伺えなかった質問については、「満洲の記憶」研究会の有志や受講生の有志と共にご自宅に伺い、2度にわたり貴重な話を伺った。インタビューの聞き手、場所、記録整理担当者については、以下の「インタビュー実施状況」を参照されたい。なお、以下のインタビュー記録

は、録音ファイルから文字起こしをした後、古海氏による修正を経て掲載許可を得たものである。文中の表記や表現は基本的に発言時の内容に基づいているが、一部は古海氏の意向により大幅に加筆してあることを断っておきたい。

さて、3回にわたるインタビューにおいて特に印象に残った3点について記しておきたい。第1は、満洲体験の立場性の問題である。夙に指摘されているように、満洲の記憶のあり方は、日本人に限定してもいかなる経緯・立場で満洲に居住していたのか、都市住民（関東州と満洲国）と満洲移民、様々な職業、性別などの属性、引揚げ後の日本社会での適応状況などによって彼らの体験や記憶のあり方は相当異なることに贅言を要しない。しかしながら、植民地統治機構の最中核の地位にあった古海忠之の如き人々については観念的な歴史評価が先行するあまり、その記憶の内実や記憶を取り巻く環境については十分な注意が払われていないばかりか、そうした人々が満洲を語る事が望まれず、またそうした雰囲気を察知して当事者も語ることを憚っていた状況が戦後長らく続いた。かような状況は古海建一氏の語りにも多大な影響を与えたであろう。それが破られるようになったのは、「戦後日本」が終焉したと人々がみなすようになった1990年代以降のことであったと思われる。以上の状況を考えると、満洲国中枢の関係者が当時の状況や心情を自由に語っている点におい

て、本インタビューの意義を認められよう。

第2は、撫順戦犯管理所に収容された父古海忠之へ面会するため、1956年に訪中した古海建一氏の経験である。1950年代における中国の日本人戦犯管理や面会者に対する姿勢・対応がいかなるものであったのかがビビッドに語られている。特に、中国側が古海氏ら面会者に対して瀋陽軍事裁判の録音を聞かせ、徹底的に日本軍国主義への反省を促した姿勢は、当時の中国共産党の日本人に対する扱いとして興味深い。また、戦後間もなく日中国交も無い時期において、戦犯として扱われた父親に面会するため訪中した古海氏が、改めて戦争や中国に対してどのような感情を抱いたのかについても、インタビューからうかがい知れる。

第3に、関係者のみが知りうる事実として興味深かったのが、国防婦人会をめぐる父母の夫婦げんかの下りである。父古海忠之が母古海伸に国防婦人会役員に

就任することを依頼したのに対して、母が断固として拒否し、古海氏が目撃した「唯一」の夫婦喧嘩へと発展してしまった点は戦時下の政策に対する公と私という立場の違いを明確に示している。あくまでも高級官僚としての立場から役員就任を依頼した父に対して、「嫌いなことに責任を持つのは嫌だ」と頑なに拒否した母の立場性は明らかである。その背景には、彼女が「文明開化の人間」であり、満洲国においても「みんな人間平等という信念でいつも接していた」ことがあったという古海氏は評価している。余談であるが、数年間にわたる交流の中で、このような気質が古海氏にも受け継がれているように感じられた。

最後に、3回にわたるインタビューを快諾し、ご自宅に伺うときにはいつも歓待して下さった古海建一氏にはこの場を借りて改めて謝意を伝えたい。また、我々の訪問を優しく見守っていただいた奥方にも御礼を申し上げたい。

## インタビュー実施状況

第1回 2019年6月25日 10時45分～12時45分

語り手：古海建一氏（国際善隣協会顧問）

聞き手：2019年度社会史史料講読（アジア）B受講生（李相眞、山本岳、青木俊輔、佐々木豪、宮川純樹、朝倉希実加、井田光祝、鹿島もも、東郷由佳、中尾柊也、松井沙妃、真次晃央、三浦夏美、吉田裕弥、NGUYEN ANH DUONG）、森巧、辛孟軻、佐藤仁史

場所：一橋大学第2講義棟307教室

記録整理：李相眞、青木俊輔、朝倉希実加、井田光祝、鹿島もも、松井沙妃、真次晃央、三浦夏美、NGUYEN ANH DUONG

第2回 2019年7月20日 16時～17時20分

語り手：古海建一氏

聞き手：「満洲の記憶」研究会（大野絢也、菅野智博、甲賀真広、佐藤仁史）

場所：古海建一氏宅

記録整理：大野絢也、菅野智博、甲賀真広、佐藤仁史

第3回 2019年7月27日 16時～17時40分

語り手：古海建一氏

聞き手：井田光祝、大野絢也、佐藤仁史

場所：古海建一氏宅

記録整理：井田光祝、大野絢也、佐藤仁史

## インタビュー記録

### (1) 満洲の概況

古海：こんにちは、古海です。僕、近くに住んでおまして、さきほど歩いてきました。今日は佐藤先生のご厚意でこういう機会を設けていただきまして、昔の満洲のことについてお話しすることになりました。皆さんが読んでいる『八木日記』がカバーしているのは戦争中くらいからですか。主に戦後ですか。

佐藤：そうですね。1945年の8月頭から1946年の10月までです。

古海：まさに、終戦後の1年間ですね。

佐藤：そうですね。八木聞一は多くの人  
の引揚げを見送っているのです。日記

は引揚げを見送ったところで終わっています。

古海：私は満洲で生まれました。ちょっと日本に帰ってきた時期もありましたけれど、基本的にはずっと満洲にいて、終戦を迎えた時が小学校6年生でした。昭和20年、1945年の8月9日にいきなりソ連の爆撃がありまして、それからすぐ戦車隊が入ってきて満洲は大騒ぎになったわけですけども、その時6年生で、学校が直ちにもう閉鎖・閉校になりました。それで、1年ちょっと満洲の新京、今の長春ですね。それから安東、今の丹東という国境の街、その辺で1年間うろろし

ていまして、翌年の9月に日本に帰つてきました。先に、この地図の説明を簡単にしましょう。



地図1 満洲国の全体図

佐藤：お願いします。

古海：満洲の地図、これは満洲時代の地図で、今の地図ではありません。この中で、大きな丸がしてあるのが長春です。上の左の方に興安北省や興安東省があります。省は日本でいう県ですね。それが下に続いていますね。興安南省、興安西省……これはみんなモンゴル人の世界です。ですから、満洲といっても、下の方はちょっと欠けますけど、左半分は蒙古の人たちが住んでいた土地でした。満洲族、漢民族、朝鮮族、日本人が、残りのところ、大体右側に住んでいたのですね。

最後の国勢調査を 1940 年にやっていますけれども、その時の人口が 4320 万人とあってます。ただ非常に難しいのはですね、その国勢調査の手法がどうだったということや、満洲というのは非常に出稼ぎの人が多いところだったのですね。大体寒いですから、農業の場合にはもう 10 月になると、そろそろ凍ってしまうようなところですから。逆に春から夏にかけては無茶苦茶に忙しい、労働力が要る。それで山東省から渤海湾を超えて出稼ぎの人たちが大勢来たわけです。

そういう季節移動の人が非常に多いのでね。この 4300 万というのも果たしてどこまで正確なのか。私が小学校に行っていたころは、戦争中ですから満洲国の国歌を歌ってしまっ

れには「人民三千万」としていたのですね。ともかく、1932 年に満洲国ができた時は 3000 万人、それが 8 年で 4300 万人になったということです。1 つは、1940 年にはもう工業化がかなり進んでいますから、出稼ぎの人ばかりではなくて、定着の人も確かに増えていたと思います。それは主として漢民族の人たちですね。それから日本人は少ない。先の 4300 万の中で日本人は 2 パーセントです。朝鮮の人が 3 パーセントですから、当時のカテゴリーでの「日本人」は 5 パーセントです。この左半分の広いところにいたモンゴル人が大雑把に言って全体の 3 パーセントです。91 パーセントがいわゆる中国の人で、そのうち満洲って言いながら満洲族は全体の 6 パーセントぐらいしかなくて、もう当時すでに圧倒的に漢民族の世界です。清朝のころは、満洲族が逆に中国全部を押さえて北京が首府でしたけども、清朝の人たちは満洲族ですね。当時は漢民族や何か満洲に入ってくるのを非常に嫌ってしまっ

て、封禁の地とか言って、長城のこっちは入れなかったですね。それが 1940 年ごろにもなると圧倒的に漢民族の人口になっていました。今はもっとそうですね。今では 1 億人超していますが、増えたのはやっぱり漢民族です。



写真1 葫蘆島での植樹事業（2013年）

引揚げと関連してよく名前が出るのが葫蘆島です。満洲には3つの大きな港がありました。旅順、営口、それから葫蘆島ですね。この地図みていただくと、一番下の尖ったところが遼東半島で、尖ったところの一番尖ったのが旅順です。その横に大連。旅順が軍港で、大連が商業港でした。それから営口は遼東半島の付け根のところ。営口は、引揚げの時には共産軍が押さえていたものですから、この港は使えませんでした。葫蘆島からは1年ちょっとの間に105万人もが民族の大移動で帰ってきたわけですけど。葫蘆島の下の方に渤海と書いてありますね。渤海湾。大連のところの右側が黄海で、左側が渤海。この渤海湾の付け根のところには錦州、錦西というような街があって、錦州は大きな街です。葫蘆島は現在、中国軍の海軍の潜水艦の基地になっていますが、大連に対抗して張学良が開いた港なのです。

大連、旅順のところからずっと上の

大きな丸が長春ですね。その真ん中ぐらいに瀋陽（旧奉天）があります。この瀋陽からずっと右下に安東省というのがあって、そっちに鉄道が来ていて、国境のところに安東という街があります。今丹東と言います。これがよくテレビに出てくる中朝国境で、北朝鮮の金主席は飛行機が嫌いで汽車で中国に行くので、ここが映されます。あの鉄橋は昔満鉄が作ったもので、今は新しいのも1つできています。私は、ソ連が攻めてきたときに両親と別れて、安東へ逃げ込みました。逃げ込んだというよりも、逃げたらここへ来てしまったのです。それから奉天、長春、そこから上には哈爾濱があります。これは大きな街ですね。これはもともとロシア人が開いた街で、今でもやっぱり街のつくりはロシア風といったところが残っています。

日露戦争後にロシアから鉄道の営業権を譲り受けた。その満鉄の路線というのが大連から長春までで、満洲国時代はこれを連京線とっていました。奉天から国境の街安東までが安奉線。この2つが満鉄のそもそもの始まりなんですね。それから、長春からずっと右のほうに鉄道線路が出ています。ちょっと上に上がって、それから右へずっと行きますと、北朝鮮との国境に、この地図には書いてない図們という街があります。羅津とか清津とかいうような街の近くです。長春からこ

ここに至る京図線も幹線の1つでした。この沿線は昔から今でも朝鮮族の人たちが住んでいる地域ですね。北朝鮮と中国との間で、この土地が本当はどっちのものなのかという議論があるようです。この京図線と連京線、それと満洲・朝鮮の国境で三角形になりますね。

この三角形は関東軍が最後まで守りたいと欲していたところなんです。その上のほうはずっとソ連と満洲の国境、これは8000キロメートルあります。関東軍も戦争の途中でもうボロボロになっていました。ソ連との戦争はなかったわけですが、南方の戦線などにどんどん関東軍が引き抜かれたものですから、もうとても8000キロメートルの国境線は守れない。それで、ずっと撤退して、連京線と京図線と朝鮮国境との三角形を守る。下のほうに通化という街がありますが、ここを司令部にして、ここで守るということを終戦の年の5月ごろ決めたのかな。しかし、国境地帯にいる開拓団の人たちには知らさないで撤収してしまったのですね。ですから、終戦の前、ソ連が入ってきて開拓団がえらい目にあったというのは、気がついたら関東軍が全然いなくなったからだ、開拓団の人と話をすると今でも恨み節が出てきます。終戦の1年ぐらい前からソ連が攻めてくるんじゃないかということは、噂にはよく出ていました。それ

で開拓団も下がり、関東軍も下がったということになると、ソ連軍を呼び込むようなもんだから、関東軍だけ極秘で下がったんだっていうのですけれども、これはあまり理由にならない。しかも悪いことに、関東軍の兵隊の数が足りなくなってしまうと、6月に最後の根こそぎ招集という大動員をかけたのです。それで、開拓団からも4、5万人応召しています。ですから、開拓団全体で27万人ぐらいたんですけど、そのうち4、5万人は最後の最後に働き手が招集でとられたという状態でした。要するに老人と女子供だけになってしまって、見まわしても関東軍は下がっておらず、そこで戦車が来て轢かれた。

実は終戦直前になると参謀本部から電報が来て、三角形も放棄して朝鮮国境を何とか守れということになりました。終戦直前の話ですから、結果的には何もなかったわけですが、そういうことで開拓団の人はたいへん苦しんで、そしてずいぶん亡くなりました。生き延びた人も、南へ東へと逃げてきて、新京や奉天はそういう避難民で溢れました。八木聞一さんの日記にもあると思いますけど、終戦になったらすぐに、関東軍の総司令官、参謀長といった人々は、当然ソ連が来たら拘束されるだろうと。それから満洲国も、総理大臣がいて、総務長官や各省の大臣がいましたが、これも拘束

されるであろうと。政府も関東軍もいきなり消滅して、そこに130万人も民間人が残ってしまう。それをどうするかということで急遽話し合っ、高碓〔達之助〕さんに是非頼むということで、簡単にいうと各地に生まれるであろう日本人会の総会が作られました。これも色々名前変わりましたが、最後のころは全体の日本人会は確か東北日僑善後連絡処といったのでしょうか……。

## (2) 満洲国時代について

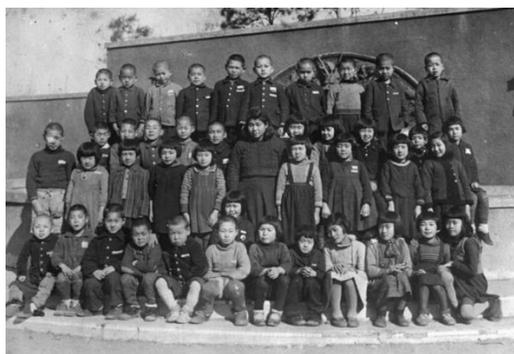


写真 2

新京白菊在満国民学校でのクラス写真  
(1942年)

佐藤：以下では、先にお送りした質問リストに即して、私たちの方から質問して、それにお答えいただく形で古海さんの満洲国とは何かという問題にお答えいただければと思います。

古海：では1番目から行きますか。

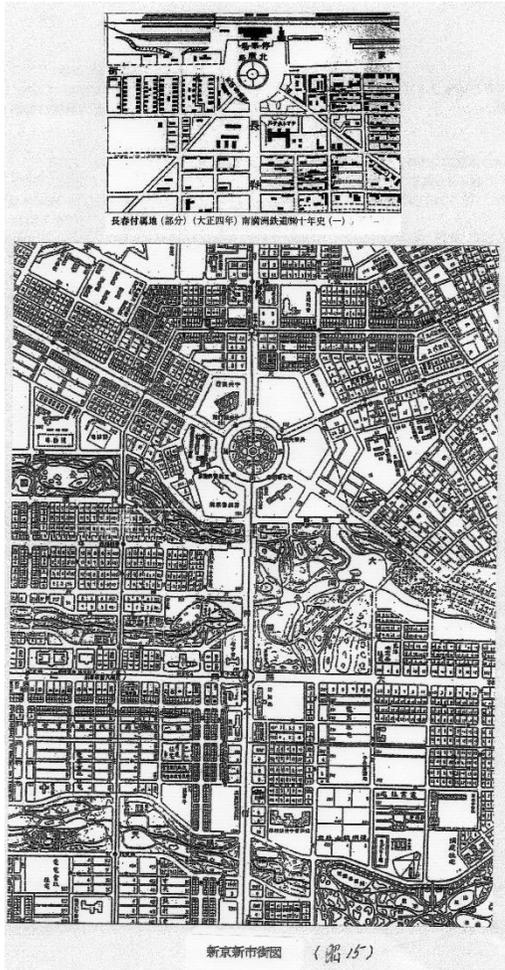
佐藤：古海さんの追憶の本を整理して、簡単な年表みたいなのを作ったんで

すね。最初が満洲国、それから終戦。それから新京の引揚げというふうに分けました。ですので私たちの中では時系列順に話をするのが自然であろうと考えております。それでまず小学校時代についてうかがいます。新京の白菊小学校の方にお通いになっていらしたとのことですが、当時、日本人以外の学生は上下にいらっしゃいましたか。

古海：基本的にはいませんでした。写真(【写真2】)をお渡ししたのですが、真ん中が白菊の3年生の時の写真です。これは全部日本人です。ただし、4年生の時に別のクラスに中国の人、朝鮮の人が数人いました。学年中に学年全体で10人もいなかったかもしれません。ですから基本的にはいなかった。

それでいた人はですね、例えば中国の人なんですけど、仕事の関係ですと日本に住んで、それが満洲にやってきたとかかなり日本との接点が今まで多かった人、かつ日本語が話せる人。満洲の小学校は基本的には、住居地別かつ民族別の小学校です。ですから中国系の方は中国人の小学校に行っていました。朝鮮系の方は朝鮮人の小学校に行っていました。さっき言った通りに90%強は中国人が占めた国ですから、五族協和といっても圧倒的に人数が違います。中国語の授業は週3回くらいあったかな。中国語の勉強

はありましたけど、基本的には中国人はいませんでした。



地図2 新京新市街図

佐藤：ありがとうございました。私が大連からの引揚者に話を聞いた時には、大連二中のそのかたのクラスで一番成績が良かったのは中国人学生であるというお話をうかがったことがありました。大連は関東州時代からの歴史が長い分、そういう人もいたのかも

しれません。

古海：僕は北朝鮮の人を子どものころに知っていたけれども、頭良かったですよ。

宮川：白菊小学校とはどのような学校だったのですか。

古海：当時の新京には小学校が12、3校ありました。入学は地域別でした。地域によって商業地域と住宅地域がありました。私が住んでいたのは住宅地域。いならば新京がずっと広がって、国がディベロッパーとなって土地造成して、それを買って、家建ててという住宅地域でした。周りは勤め人ばかりみたいところでした。ですからうちみたいな政府役人もいましたし、特殊会社に勤めていた人もいました。関東軍の将校の子どもとかもですね。ですから白菊はレベルが揃ってたみたいで比較的教えやすかったようです。それが特徴の1つになっていたということは一般的に言われてました。

この地図ではですね、日本人が作った長春の街で1915年に作ってるんですね、大正年間。ここに満鉄の長春の駅がありまして、その周りに附属地というのを持ってました。そこは満鉄が行政権を持っていたんですね。満鉄というのは鉄道会社ですけども、街を作って、病院を経営したり、小学校作ったり、いろんなことをやっていました。それで当然街も作った。長春というのは元々中国人が10万人くらい

住んでた街で、いうならば小都市ですね。そもそも長春を首府にしたのは、瀋陽は昔の清朝とか張作霖とか色々なしがらみがあって、発達はしているけれども昔のしがらみが強すぎる。それから哈爾濱は北過ぎるし、ロシア人の街だと。それで真ん中の新京は、地理的に真ん中だし、平らだし、それからこれから街を作っていくのに土地が安いと。その3つの理由でここを選んで作りました。

それで、満鉄が大正年間に作った街ですけども。その南側の大きなところ、ここを昭和8年以降、満洲国になってから作ったわけですね。ですからこの間に30年くらい時間が経っていたわけですが、満鉄が作ったシティプランに完全に継ぎ足す格好で南側を作ったのですね。南北に走るのが大体60メートルある道路です。すごく広いです。それからこの広場の端から端までは道路を入れて300メートルあります。誰が作ったかと言うと、後藤新平の指令で作ったのですね。皆さん、これはどこかの地図に似ていると思いませんか。そう、国立の街なんです。国立ができたのは昭和2年、長春の街は大正4年なんかにはできていますね。長春の拡張は昭和8年です。

俗説では長春は国立の町作りを参考にしたと言われています。『国立市史』という市の歴史がありますけど、国立の出来があまりによかったから、

そのあと昭和8年に新京を作ったときに、真似をして満洲国のキャピタルを作ったとありますが、間違っています。もうそのときは満鉄の附属地ができていた。後の新京の街はそこから発展させただけなのです。



写真3 国立の大学通り（1956年）

李：私は韓国からきた留学生です。満洲国において朝鮮人や漢人とはどのような関係を持ったか気になりました。そして、彼らに対する認識や差別に対しての話をうかがいたと思います。

古海：正直に言って、僕はよくわかりません。基本的にはあまり接触の機会がなかったです。というのは、さっき言ったように、満洲の発展が早かったものですから、住宅がどんどんできていて。割合似たような職業や人種で固まっていました。だから日本人が新しく日本から転勤してきて、朝鮮の人の住んでいる地域の真ん中に住もうというのはあまりなかった。そういう意味で接触の機会もあまりなかったのですね。それから、もう1つは、朝鮮

の人の場合には日本語達者の人が多かったのですけれども、圧倒的に多い中国の人は今まで満洲でやってたわけだから、日本語なんて分かりませんでした。それで彼の小学校で日本語を教えだして、我々の小学校では中国語を習い込んだんだけど、そんなすぐには話せるわけでもないし。国語やって、数学やって、その他教科をやっていて、なかなか中国語には手が回らなかった。結局は言葉の壁です。私はそれを非常に感じました。接触はどこでしたかという、例えば朝鮮の人が果物やなにかを売る店をやっていると、そこに買いに行く。そうすると朝鮮の人の場合には日本語で通じる確率が高いけども、そうでない場合には、身振り手真似で物を買いましたね。それから、馬車に乗ったら御者は中国人だったとか、その程度の接触でしたね。1つ聞いた話では、朝鮮の人はある意味では苦勞したと思うのですね。というのは、圧倒的に中国人に対して少数民族でした。また当時は日本の一部になっていましたから、そういう意味で俺は日本人だという人もいたし、俺は朝鮮人だという人もいた。中国人はその辺の関係がよくわからないものだから、混乱してトラブルが起きたという話は聞いたことがあります。ただ、私の身の回りには全くそういうのは起きていません。

ですから、人種であいつは何人だか

ら、モンゴル人だからというようなことは、教育上もなかったと思います。そういう教育を受けた覚えは全くない。ただ職業はおのずから得意なところで分かれていたと思いますね。それからロシア人もいました。

ズオン：少し補足として伺いたいことがあります。そうしますと、お住まいというのは、中国人、日本人、朝鮮人、モンゴル人がそれぞれ分かれていたのですか。

古海：そうですね。私が住んでいたのは、さっきの地図であの細かいマッチ箱みたいな住宅街でした。みんな広さは同じ土地でね。満洲の場合には国が地主で、いうなら中国人から買い集めたんですね。ですから、国が地主でディベロッパーでもあった。それから規制かけるのも国なんですね。

ここでまた少し脱線させていただきたいんですけど。満洲は石原莞爾がどうしたとか、皇帝がどうか語られますが、若い人たちには是非別の面からも満洲を見てもらいたいという願いがあります。特に新京です。日本の建築史学者で越沢明という人がいます。ちくま学芸文庫に『満洲国の首都計画』って本があります。いかに苦勞してこの街を作ったかが書かれています。満洲はある意味じゃ1つのショーウインドーだったのですね。殊に新京。日本が出てって何をするかをみんなが見ているとこで立派な街を作ろ

うというので、色々な人が考えて考えて作った。だから、当時日本でなかったものも沢山盛り込まれているのですね。例えば、当時日本は建築基準法なんてなくて、もう作り放題みたいなところもあったけど、満洲は建築基準法を設けて、住居区域、商業区域、教育区域の線引きをやって、高さ制限などをやった。新京は東洋ではじめて上水道と下水道を分けて、しかも下水道も雨水と汚水とを分けた。分流式っていうんです。ですから、僕たち日本に帰ってきた時、汲み取り式のトイレをみて、なんて日本は不潔なんだろうと思った。引揚者だから金がなくてボロボロで帰ってきたんだけど、えらいところにかえてきたっていう気がしたところもありました。

ズオン：そうしますと、各民族がそれぞれ暮らしていたので、居住地別のアイデンティティとか、エリアのイメージとかも多分あったと思います。例えば、ここは中国人が多いからあまり行かない方がいいとかは言われたりしましたか。

古海：ありますね。満洲国って13年間しかなかったんですけど、私がまだ幼稚園か小学校1年のころ……僕は幼稚園が実は日本だったんだけど、5、6歳ぐらいまでのところでは大体夜外出ではいけない。人さらいが来るよとかね、そんな話がありました。それから、中国や朝鮮の人がどうだこうだ

というのは、私は記憶にないんですけど、中国人は昔の城内に百年も住んでたっていう人たちがいるんですね。そこは行くのは避けてましたね。避けてたっていうのは怖いからっていうよりも、むしろ話を通じなくて帰ってこられなくなるからでしたね。要するに日本語を話す人が少ない地域には行かない方が安全だという気分だったと思います。

戦争がだんだん深くなっていくと、悪い意味で規制が厳しくなりました。警察がいるとか、憲兵が増えるとか、それに従って今度は逆に犯罪が減っていくわけですよ。ですから、私が小学校高学年になったころはどこへ行ったら危ないとか、そんな意識は全くなくて、ずいぶん遠くまで、霞網で小鳥を捕まえに行ったりとか、遠くまで行って帰ってくると真っ暗になっていたりとか、そういうことがしょっちゅうありました。

李：満洲国において名義的な皇帝として溥儀がいたと思うんですけど、日本人は彼のことをどのように認識していましたか。

古海：公式の答えを1つ言えば、知りませんと。小学校6年生ですから、皇帝だろうがなんだろうがよくわからないわけです。ただ、そのあといろんな人の話、これは日本に帰ってきてからとか、うちの父親に聞いたとか、色々な本で読んだとかですけれど、満洲当

時から、彼が非常に人気のあった皇帝だったとは思えない。嫌がられたほどでなかったにせよ、要するにみな彼に対して距離をとっていたのではないかと思います。清朝の廢帝が満洲に来たこと自体が私は大失敗だったと思います。あの人が人間的に問題のあると言われたしたのは戦後の東京裁判からですか。すべて俺は悪くない、みんな悪いのは日本人だとか、悪いのはあいつとかという転嫁があまりに過ぎていると感じました。



写真4 幼少時の父との記念写真  
(1937年)

これに関して、1つ父親から聞いた話があります。満洲国に建国神廟を作ったのですが、それは何かといたら、日本はその時代は天照大神ですからね。それを満洲に持ってきて祀るって話になった。関東軍が嫉けたらしいけ

ど、推進者は皇帝溥儀だったのです。皇帝が日本に来て、日本の天皇に頼んで、天皇は断つたらしい。一旦は断つたのですけれど、結局はできてしまった。皇帝は日本に来て、みんなが天皇を天皇天皇と崇めているのを見て、随分満洲と違ふと。自分もその権威付けにしたい。それで、自分のところにも建国神廟を祀らせろという経緯だったそうです。

満洲国政府ははじめこの話が出たとき棚上げしてしまいました。というのは、満洲では宗教は全く自由にやっていたから。キリスト教もいれば、ラマ教もいる。各民族の宗教はもう充分揃っている、と。それで政府は改めて強く反対したけど、これは皇帝の強い意向だということで、また関東軍も賛成している、ということで結局押し切られてしまった、といます。

とにかく、各民族それぞれ、祭神を祀っているのに天照大神をもって来て、これが一番えらいのだから、皆拝めというのは乱暴だし、五族協和どころではありません。皇帝が推進するなど本来考えられないことです。

一方でね、総理大臣張景恵、この人は評判よかったし、知る人は口を揃えて大物だったと言います。

吉田：満洲の食生活についておうかがいしたいです。敗戦前と敗戦後の食の違いはありましたか。

古海：食生活は、日本と同じで……でも

やはり中国料理系にどうしてもなっていました。戦前・戦中・戦後で変わったってことは特になくて、その意味では戦争中の日本に比べて、物資は豊かだったと思います。食糧品が配給だったかどうか……消費組合で主食の割り当てがあったのかもしれませんが、私は覚えていません。

佐藤：日本にお帰りになって食糧事情があまりにも酷いことに驚いたということはありませんか。

古海：ええ、そうですね。父の実家である京都に帰ってきて、ばあさんが1人で心配してて、僕たちがいきなり玄関に立ったら、帰ってきたのかって腰が抜けて、それで歓迎してくれたんですけど、1週間いてあとでわかったのですが、大事にとっておいたお米を我々が1週間で全部食べてしまった。悪い事をしました。それで、京都よりも東京の母の実家に行かないと生活できないことがわかって東京に来ました。帰ってきて食糧事情がわるいことが分かったのです。ただ、日本に帰ったらそんな感じというのは満洲にいたときから聞いてましたしね、ですから逆に言うと満洲でもドツタンボタン逃げ回ったりドブにはまったりなんてやっていたから、危険な感じがなくなるという大プラスがあったから、そりゃそのくらいしょうがないよと思っていました。

### (3) ソ連軍侵攻～安東疎開

井田：ソ連が侵攻してきたという事実は、小学生という立場において、どれほどの危機感を覚えるものでしたか。

古海：私はね、ソ連軍が侵攻してきた時に子供だけは逃げろというので、病気がちで体の弱かった叔母と2人で逃げました。2人で逃げたというのは、当時大混乱だったんですけど、要するに隣組で逃げたっていうのではないし、父が役人やってたけど役所の団体で逃げたってわけでもない。まったく個人ベースで逃げたのです。その時は安東という朝鮮との国境の街まで行って、そこで終戦の詔勅を聞き、思いがけず母と再会し、豆腐の行商をやり、半年後に新京（長春）に戻ったわけですが、この間ずっと緊張の連続だったと思います。

それで戻った長春では別の恐ろしい経験をしました。それは内戦、毛沢東と蔣介石ですね。新京では2度あって、1回は共産軍のほうに逃げて軽く済んだのですが、その前に共産軍が入ってきた時の市街戦は丸4日あったのかな。その際の撃ち合いがひどくてね。数軒先の家は2階家で、最後追い詰められた国府側の兵隊が2階に逃げ込んで、2階と下とで手りゅう弾の投げ合いをやったのです。それで2階の人はみんな死んでしまった。そんなことがありました。まあレンガの家ですから、小銃弾は一応壁に当たれば

跳ね返したけど、終わってから出たら弾痕だらけだったですね。畳全部上げて窓を隠して、布団を全部出して積み上げた中に居て、気をまぎらわすためにトランプなんかしてたんですけどね。トイレには這って行ったのを覚えています。

不思議なことに、その1週間弱の大騒ぎの中でも電気は消えなかったんですよ。それから、終戦から引揚げまでどういうわけか電気はずっとついていました。それからガスはときどきとまったけど、電気はずっとついて、水道は常に出てました。引揚げまでの1年間は満洲国政府も会社もなくなっていましたから、ガス代、水道代、電気代なんて全然払わなかった。そういう会社に勤めてた人だって月給貰えないはずだけど、まじめで責任感の強い人がいて管理していたのでしょうか。それを日本人がやっていたのか、それか中国人や朝鮮人が協力しながらやってたのか分かりません。よくインフラを維持してくれたな。誰がやっていたのかが謎なんです。日本に帰ってきてすぐだったら、やっていた、なんて人の話を聞けたのだろうけれど、今もう全部死んでしまいましたからね。

佐々木：中国戦線や太平洋戦線についての情報は、満洲においてもいわゆる大本営発表のように都合のよい内容であったのでしょうか。

古海：満洲でももちろん都合のいいことばかりで、よく大本営発表を聞いていました。それからもう1つ、子供ながらに覚えていたのはその他のニュースで、どうせ検閲後でしょうけど、「リスボン発同盟」というのがよく流れてきたことです。同盟通信が海外に出ていて、リスボンに特派員がいたのでしょうか。

佐藤：先ほどおっしゃっていたことと重複するのですが、戦況が緊迫する前の満洲での生活に何か不便を感じられましたか。ガソリンなどの配給以外に、食事の配給などに関する経験はなかったですか。

古海：お金を出せば買えたっていう感じ……。もともと生活に必要なものしか買わない生活でしたがね。

佐藤：日本国内みたいに、鉄の物を出せとかそういうのもなかったのですか。

古海：それもなかったと思います。ただ、戦況が深まるにつれて、小学校は国民学校になって、それから、小学生だったけどもゲートル巻いたりしていました。その意味では、楽しさが減ったっていうか、空気として殺風景になってきたというのはありました。

そういうことで1つ思い出すのは、まったくプライベートな話なのですが、うちの母は文明開化の人間でしてね。大正リベラリズムの人間で、戦争の時代の空気にはまったく合いませんでした。



写真5 古海建一氏の母（1871年）

佐藤：モダンガールという感じでしょうか。

古海：そうですね。学校は神戸女学院っていうところなのですけど。関西人の気質で、非常に素晴らしい人間でした。さっき、どなたかの質問にありました人種差別があるかについてですが、うちの母はみんな人間平等という信念で、それはそれで立派だったと思うのです。

それから、満洲国には協和会という組織があったのですけれど、国防婦人会っていうのができたのですね。愛国婦人会という名前だったのが国防婦人会になったのかな。父の仕事の関

係でうちの母も何かの役員にさせられそうになってね。母は、絶対に嫌だと言って。うちの両親は私が子供のころから大変仲がいい夫婦だったので。それが、1回だけですけれど大喧嘩やっているのを見たのがそれでね……。

佐藤：国防婦人会ですか……。

古海：母は絶対にならない。親父は頼むからなってくれって。母はそういうのは嫌いだったのですね。役員は関東軍のおえら方の夫人とか……。嫌いな仕事の推進者にはなりたくなかったのでしょう。だけど、隣組について話は別です。若い人たちは今、便利な世の中になって、安全な世の中に住んでいるけど、何が起きるかわからないということも考えてほしい。何か起きた時にやっぱり1番大事なものは近所の人とか、そういう助け合いですよ。あの大地震が起きたところではそういうことよく聞くし、まあ、日本人は助け合いをやる方だとは思いますが。整然として行列は組むし、いざというときの日本人はいいなって思っているのです。とにかく、我が家も市街戦で少し壊れたのですけど、その後、接收されましたね。放り出されて、どこ行ったらいいかって困っていたら、隣組の人たちの1軒が、本当に狭い家でしたけど無理して空けてくれて、そこに住まわせてもらいました。だから、隣組と一緒に引揚げて帰ってこられたので

すけど、本当に狭かったですよ。向こうには本当に気の毒で……。

佐藤：話が少し戻りますが、お母様がその色々な民族の人に分け隔てなく平等にしないといけないとお考えになったのは、神戸女学院時代の教育の影響だったのですか。

古海：教育だったと思います。

佐藤：ミッション系の学校だったのですか。

古海：プロテスタントですね。

佐藤：お母様もクリスチャンだったのですか。

古海：そうですね。

佐藤：そういう事情があったのですね。そうすると、お父様も古海さんご自身もクリスチャンですか。

古海：いや、父は違います。母もなんかよくわからないけど、クリスチャンなのだけど般若心経なんかやったり。まあ、宗教的なのですよ。

山本：満洲国で愛国心を育てる教育がそもそもあったのか、それがどのように子供に機能したのかっていうことをお伺いしたいです。また、それが玉音放送を聞いたときに結局どんなことを感じさせることになったのかも教えてください。

古海：愛国心っていうのは、まず、あの当時は教科書を読むと自然に愛国教育になっているわけですね。満洲では実は日本の教科書を使っていました。それと、満洲のいろんなこと、それこ

そ五族協和だとかなんとか含めて『満洲事情』という教科書があって、それから中国語の教科書がありました。この『満洲事情』と中国語の教科書だけが追加で、あとはみんな日本と同じ教科書だったのです。ですから、その意味でも自然とそう〔愛国的に〕なった。



写真6 5年生時の集合写真（1943年）

それから、先生方も戦況が厳しくなるとちょっときつくなってきたところではありました。ただね、それでも日本よりはまだよかったというか甘かったような気がします。たとえば、さっきの集合写真の1年後の、次の4年生の時からは先生が3人になりましたね。担任の先生と、女子師範を出た女性の先生、つまりアシスタント2人がいました。先生のOJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング、現任訓練）なのでしょうね。実地訓練のために来たのだらうと思います。

その女性の先生はみんな優しく、みんな好きでしたし、そういう人たち

が、[まわりが]ピリピリしている中でのゆとり的な存在になっていましたね。こう心休まってというようなタイプの先生がいてくれたのは非常に良かったと思います。だから、あの日本並みに〔愛国教育は〕あったけど、少し日本よりはやわらかいところもあったのかもしれない。

佐藤：玉音放送についてはどのようにお感じになりましたか。

古海：玉音放送はね、私は逃げ込んだ安東で聞いたのです。安東駅に着いて、どっかで野宿したのかな。1晩野宿して、2晩目は日本人が集まる大きな旅館に収容されて、そこの大広間で聞いたものだから、わからなかった。声が割れて雑音で分からない。しかも、難しい言葉でね。しかも言いにくいことを言わなきゃいけないものだから、持って回った言い方でね。正直言って何もわからなかったです。後ろの方で聞いていて、そうしたら前にいた大人がみんな泣き出したりしたので、まずこれはえらいことが起きたんだろうなと思いました。その後ももちろん敗けたことを知ったのですが、実はそれよりもショックを受けたのは、玉音放送で集まった時に、誰かが、新京にソ連の戦車が入って市街戦やって、日本人はほとんど死んだと言ったのです。日本人は20万人ぐらい居た訳だから、20万人も死ぬ訳無いんだけど、そんなニュースがまことしやかに出てきた。そ

れで、私は孤児になってしまったと思いましてね、それの方がもう酷いショックだったです。

それから1週間ぐらいして、ぼったり母親に会ったのです。私が逃げた後、8月14日かな。いよいよソ連の戦車も来たというので、父親はもちろん仕事で残ってる訳ですけど、女は逃げるというので、母親は汽車に乗ったら、その汽車がたまたま安東へ来たのです。安東から突き抜けて朝鮮に入って行った汽車もあったのですが、なんかの事情で安東に止まって降ろされたのです。安東に行ったら連絡場所は誰々、京城（今のソウル）だったら誰々というようなことは、父親に言われて決まっていたものですから、私もそこにレポートしてましたし母親もそこへ着いた。母親が安東に来たら、息子さんが来て居るぞというので、母もびっくりして、やってきたのですね。

井田：ソ連軍が侵攻してきた事実は、当時小学生だった古海さんにとって、どれくらいの危機感を覚えるものだったのかを伺いたいです。

古海：危機感があったといえば、まあ小学校6年生なりにあった訳ですけど。ソ連がまず爆撃に来たので、その時は防空壕に入りました。満洲でも防空壕ちゃんと掘っていたのです。新京では全く空襲は無かったのですが、南の方の鞍山という製鉄所の街があって、その街は、2、3回やられたんです

ね。それはソ連にじゃなくて、アメリカのB29、中国の四川省から飛んできたやつが、満洲爆撃に来て、3回ぐらい、かなり被害が出たのですね。8月9日の時は明け方でしたから、父親も一緒に防空壕に入ったのですが、またアメリカが来たんだろうと。今度は爆撃機が新京に来たんだろうなんて言っていました。その後に役所の当直の人から連絡が入って、ソ連が攻めてきたと。父親は慌てて役所へ行って、それからはまあ大騒ぎですね。大人は怖かったというかショックが大きかったと思うんですけど、子どもは、ソ連怖いという理屈はもちろんわかっていたのですが、まあ条件反射的に関東軍がいるから大丈夫だろうとまず思いますよね。そして、身に迫った危険が目の前に出てくるまではね、なかなかピンときませんからね。親は、もう大変だったと思います。それで翌日になって、いよいよ攻めてきたというのが分かって……。

佐藤：8月10日ですか。

古海：8月10日ですね。小学校で夏休み中も朝集まって体操をやってまして、それに行ったら、もうその場で、「学校閉鎖します」と。ですから、怖さというのは、その後に、人の死ぬのを見たり、殴られてるのを見たりしたときですね。僕も安東に居たときに、天秤棒をかついで豆腐売ってましたらね。何回か、2度かな、いじめに遭いまし

てね。どの国の人とは言わないけれども、売り上げ全部取られて、殴られて、がちゃがちゃとかき混ぜられて、豆腐みんな毀されたことが2度ほどありました。大人は随分やられていましたね。

八路軍と言っていた共産軍は、最終的には全国統一して、1949年に国を作った訳ですけども、それまでは私たちは八路軍と言っていましたね。戦犯裁判で死刑を1人も出さなかったと言うのは事実だけど、終戦後のどさくさの中では、特に地方では人民裁判というのが横行しました。あれは裁判とはいうけれど、ただ縛って連れてきて、段の上に乗せて、「こいつはあれやった、こんなことやった、あんなことやった」と一方的に言われて、さあどうするかといったら、みんな周りの連中が「殺せ殺せ」と言うに決まって、「そんなら殺そう」というのでドンとやる。それで死んだ人が多かったのです。安東でも、私たちもお世話になった後藤さんという市長さんは結局それで殺されてしまった。もう思い出したくない酷い話がいっぱいあります。そんなの見てると、子どももとっても怖く感じましたが、一般的には大人の方が、恐怖を感じていたことでしょう。子どもは子どもで、結構近所の子と一緒に遊んだりしていましたから、明るかった面もあります。

東郷：敗戦前普通に満洲で暮らしている

時と、敗戦して略奪を受けたりした後で、中国人に対する感情は変わりましたか。引揚後に、中国人留学生を引き受けたりしていらっしゃると思うんですけども、それぞれの時期において中国人に対する感情はどのように異なりましたか。

古海：さきほども少し触れましたけど、中国人だからという感情はなかったですね。中国人だからというよりもね、張さんだから、何とかさんだから、とかねと思ったりすることはあったけど、それは日本人相手だって同じですよ。僕はね、満洲での体験でつくづく思ったのは、日本人・中国人も併せてだけれど、極限状態になるとね、あるいはその一歩手前、二歩手前でも、悪い奴は悪いのが出て来るのですね。人間というのはいやしいというか、けしからんというか、残酷なものだとか、そういうのを子供のうちに見てしまった感じがします。それから、人を助けようとして自分が死んでしまった人のことを聞いたし、私たちが路頭に迷いかけていたら、うちへどうぞとか言ってくれた人もいました。人間というのは素晴らしいということも随分また見た。それが日本人だったり、中国人だったりする。まあ、概しては日本人社会に居ましたから、日本人なだけけれども、人種の問題より人間の問題だっていうことが、あの時の経験の残りみたいになっている感じです。

僕は学校を出てから銀行で働いて、イギリスに結構長く居たのですよ。全部で合わせると、7、8年になるかな。はじめに行ったときは1961年だったから、日本人には〔部屋を〕貸さないとかそんな時代ですよ。下宿借りに行く日本人お断りとか、そこでやっぱり人種問題を感じたのですね。そこで感じたことと満洲での体験とが一緒になって、ただ人種だけで〔レットルを〕べたっと貼っちゃうのはよろしくないというのがよく分かっています。やっぱり世の中、良い人いっぱい居るし、悪い奴も結構居るしね。日本人は概してぼーっとしているけれど（笑）。そんなことだから、中国人だからどうこうというのは全くない。僕は中国の人には、あるいはイギリスの人には、親しみを感じていますね。基本的には。

#### (4) 新京からの引揚げ

佐藤：以下では、新京からの引揚げについてお伺いしたいと思います。

三浦：先ほどのお話で大分お聞かせ頂いたのですが、敗戦後の引揚げで、収奪や市街戦などで厳しい状況でいらっしゃって、その時に、どのような心情だったのかとか、その具体的な内容をお聞かせいただければと思います。先程のお話を聞いて、なんで古海さんは上手く逃げられたのでしょうか。

古海：ははは（笑）。上手く逃げたという気は全くしません。流れの中で運が良か

っただけです。戦後の長春での、先程お話した市街戦、酷い方のやつね。国府軍と共産軍との間の〔市街戦で〕、日本人で巻き添えになって死んだのは300人いるんです。

佐藤:それはチャーズ（卡子）ですか。

古海:いや、チャーズの前です。長春では、終戦直後はまずソ連軍が入ってきて、それから今度は国府軍が入ってきて、国府軍というか蒋介石の軍隊ですね。軍隊は入らないで責任者だけ入ってきました。ヤルタ会談・協定、ポツダム宣言、みんな中国を代表するのは国民政府ですから。ソ連軍もそれは分かっているから、中国国民政府に満洲を引き渡さなければいけない。当初、全体を抑えたのはソ連軍でした。中国・国府がそれを受け取りに来た。もともとだったらソ連軍は3カ月で撤退する約束になっていたけれど機械や設備の持ち帰りに時間がかかったので居座っていました。大分長くなっちゃった。それで、国府軍は東北行営という組織だけ入ってきたのですね。だけど、兵隊は居ない。そこで、旧満洲国軍というのが居たのです。満洲国軍というのは関東軍とは別の満洲国の軍隊でした。そこに日本人の将校なんかも居た。それで、その満洲国軍が日本人を追い出して、国府軍に就いたのですね。ソ連軍の撤退に乗じて攻め込んできたのが共産軍で、1週間くらい激しい市街戦をやっていました。それで、〔長春

は〕激戦のあと共産軍に抑えられてしまっ

た。そのあとはしばらくしたら、本物の国府軍がやって来たのですね。で、それ見たとき、僕は驚いた。とにかく綺麗なのですよ。だってね、ソ連軍の、あのでっかくて汚い戦車ばかり見ていたものだから、国府軍の戦車というのは、ピカピカなのですね。それから、みんなピカピカのヘルメット被って、立派な自動小銃持って、素晴らしいのが来た。それが山海関の辺りに上陸してきて、中国共産党軍と戦争しながら長春まで北上して来たのです。この時の共産軍は戦うのは不利との判断で、あっという間に姿を消してしまっ

た。それで僕たちはその国府軍が新京などを押さえていた時期に帰ってきたんです。その後、今度は中国共産軍があっちこっちで力をつけて、新京を大包围しました。1948年かな。チャーズが設けられて、その時は本当に電気も止められて。それで長春に閉じ込められた人たちは大量の餓死者を出しました。ネズミまで食ったというんだけれど。気の毒なことに日本人も若干残っていて、えーと、遠藤……。

佐藤:遠藤誉ですよ。チャーズの本を出していますよね。

古海:そう。チャーズにやられた人に比べると、我々は本当に運の良い時に引揚げた。

佐藤:本当にそうですね。

鹿島：ソ連兵や中国の人々による略奪があったことが手記の中に書いていらっしやっと思うんですけど、ソ連兵は武器も持っていて、略奪というのかなりが恐ろしいものだったのではないかと想像しました。精神的に追い込まれることはなかったですか。

古海：もう、しょうがないですからね、そういう所で生きてる訳だから、それに対処することを考えて暮らすよりしょうがない。だから、ものごとに過敏になるし、運動神経も過敏になるし。いつ踏み込まれるか分からないから、寝る時は洋服を枕元に置いて、しかも着やすいように、順番にたたんでとか、そんなのはみんなやってました。安東でもそうだったし、新京でもやってた。戦争というのはいかんですね。みんなキチガイになってしまうのですよね。日本軍だって、南京だとかそれ以外にも、随分嫌な話がありますけども。満洲でもあまりに酷いものだから、ソ連は囚人部隊を満洲に送りこんできたんだという話が実しやかにありました。みんなソ連兵は入れ墨なんかしてましたしね。ところが、そうではなくて、あれはまともなソ連軍だったのですね。ただ彼らのうちの多くが、実際ベルリンまで攻めて行って、ドイツ軍と激戦をやってきたのですね。それでドイツが降伏して、それから、3カ月、4カ月して、こっちまで来たのです。ですからまだ非常に気が立ってたん

でしょうね。規律のない軍隊でしたから、何をされるか分からない。外に出る時は大人は必要な金しか持たない。お金を持ってたら取られてしまう。それから金がなくても殺されてしまいますから、いや殺されたら困るから取られてもいい程度の金だけを持ってね。

満洲でも一番神経使ったのは女性ですよ。みんな髪切って坊主にしたり、男装にしたりしてね。どんどんって扉を開いてソ連兵が、まあ中国人の時もあるけど、押し込んでくるとすぐ押入れの中に隠れろとか、それからあの畳1枚上げて畳の下に逃げ込めとかやっていた。それから街でソ連の兵隊見ると、無知というか腕時計をいっぱい巻いているのですね。俺はこれだけ持っているが無邪気に喜んでいるのですね。当時はすべて巻き時計でしたけど、巻くことを知らなかったり、馬鹿力で巻き切ったり、それで動かなくなると捨ててしまったそうです。聞いた話ですけど。ほんと怖かったですね。そういう点では。終戦の翌年2月の中旬ですが、母と叔母と3人で安東から長春に帰ってきたら、家の半分にソ連の将校2人が住んでいました。残り半分に叔母の連れ合いと若い書生さんが残って住んでいました。1つの家で分かれて住んでいたところに僕たち帰ってきた。家に入っていたソ連将校は少佐と中尉だったかな。これが乱暴はし

ない男たちでね。まあ大丈夫だろうというので、私たちも家に戻ったのです。

それである冬の残りを越したんだけどね。長春は寒いでしょう、長春でも零下 20 度には簡単になりますから。だから北満から来た避難民なんかは大変でした。私が通っていた白菊小学校などにみんな集団で住んでいたのです。その後、彼等が引揚げたあとの白菊小学校に行ったら、外側はレンガだから変わらないのですが、廊下の板は盛大に全部剥がされて燃料になっていました。

それに比べるとわが家は、ロシア将校が石炭を充分持ち込んで来るので凍えずに済んだ訳です。また或る日は電球が切れて、替えを出せというので、替えなんかないというので、ちょっと待ってろと行ってピストル持って出て行きました。しばらくすると、あつかいのを持って帰ってきた。どこかの家へ押し入って、奪ってきたのでしょうね。我が家は逆にソ連の将校が住んでたから、そういう押し込みには遭わずに済みました。そういう生活で、彼らが撤収するまで 1 ヶ月半ほど一緒にいましたけどね。最後にはガッチリやられました。将校 2 人は「荷物はあとから取りに来させるから」と握手して出て行ったのですが、その後でっかいトラックと兵隊が数人来て、わが家の家具家財はあらかた強奪されました。

朝倉：先ほどのお話の中でも結構言及なさっていましたが、敗戦後の治安や経済状況はどうであったのかを伺いたいです。

古海：治安はもうお話ししたので、もう 1 つのお金の話をします。発券銀行であった満洲中央銀行は潰れたわけですね。国が潰れたから中央銀行も潰れました。では、みんなどういってお金で商売していたのかというと、それでも満洲中央銀行券が実は一番信用があったのですよ。変な話なのですけどね。ほかに何があったかと言ったら、汪兆銘政府の中央銀行が儲備銀行と言って、そこが出していた儲備券も入ってきて流通していました。それから朝鮮銀行券という、これまた潰れたはずの朝鮮銀行が発行していたお金も流通していました。加えて、昔むかし満洲が出来た時に張作霖が使っていたお金は全部変えたはずなのだけど、まだ少し残っているのがあったと見えて、古くさいね、江戸時代の日本の藩札みたいなやつね、あれも見たことがあります。それから何よりソ連軍が出した真っ赤な軍票ね。満洲で駐留していると駐留経費、例えば米を買うといったら金を払わなければならない。金はないし、機関銃を持って行って掠奪するわけにはいかないから軍票を刷るわけ。それを盛大にやったものだから大インフレになっちゃったのですね。それで結局、軍票と満洲中央銀行券、あ

と何種類かの紙幣の中でどれが一番人気あったかという、満洲中央銀行券なのですね。

それで、ソ連がだんだん撤退して行ったわけです。そして満洲のいろんな機械設備などを戦利品と称して、汽車に載せてソ連に送ったのです。兵隊も帰った。満洲の南の方からソ連軍がいなくなっていくわけですね。ソ連がいなくなるとすぐ軍票は減価してゆきます。例えば100円の軍票が、ソ連がいなくなったらもう50円になってしまうわけです。しかも、いなくなるよ、と噂が立った時からもう落ちはじめるのね。でも、中国人というのはすごいですよ。南の方でソ連がいなくなるでしょ、すると軍票の価値が下落するわけ。100円のものが50円になる。それをね、例えば満洲中央銀行券でどんどん買うわけですよ。〔ソ連軍軍票の買い値を〕安くね。それをリュックに詰めて汽車に乗って北へ行くわけです。北へ行ってこの軍票で買い物するわけね。満洲の北の方には、まだソ連軍がいますから、軍票は100円の価値を維持しているわけ。〔ソ連軍の力を背景にした〕強制流通力がある。それで、〔目ざとい中国人は〕大儲けするわけです。為替相場が南の大連や瀋陽の方と、ソ連軍がまだいるハルビンとで異なることが儲けを生む。

これは、それから10年ほど経って、私は東京銀行って言う外国為替専門

銀行に就職して、為替業務をずっとやったからわかるのですが、為替の原理なのですね。僕が新入社員の時に教わった為替取引の原理の1つが、異なる地域で異なる為替市場が建っていたら、片方でも買ってもう片方で売る。これを「裁定取引」といいます。私はすぐ「それなら知っている。満洲で中国人がやっていた」と気が付きました。今のように世界中がコンピューターで繋がっているようになっては大きな儲けは得られませんが……。

もう1つ、軍票に関連して、占領軍が引き起こしたインフレーションのことを話したいと思います。満洲では戦後インフレが激化しました。それは戦争で生活必需品の生産や輸入が滞ったからですが、加えてソ連の軍票がインフレを加速させたからです。何がいくらであったのかというのは全然記憶にありません。しかしながら、ソ連の軍票で大変なインフレになったのは事実です。家財道具を売ったりし、もう売る道具も無い世帯では、知恵をしぼって何かを売ったり、みんな生きるのに必死でした。

ところで、これは歴史上の事実ですが占領軍により現地の経済が破壊されるというテーマで考えると、太平洋戦争中の日本軍にも数々の前科があります。私がギルティコンシャスを感じているのは日本の軍票なのですね。日本軍は南方や中国へ行って、軍

票をどんどん出しました。あるいは現地の金融機関からお金を借りました。日本の国内ではもう軍は金を調達できなかつたのですね。というのは、日本の国家予算の中での軍事費の比率が高くなり過ぎて、もう国債発行もやり難くなった。もうそれでは、国債は洪水状態になっている。つまり国内では戦費が調達できなくなった。それで、占領地でも金がないものだから、現地調達と称して軍票を出して買う。それから南方開発金庫を作って、そこから金を借りていろいろなものを買う。中国でも汪兆銘政権の儲備銀行から金を借りて必要物資を買う。こういう金は受け取っても外には通用しないから、どこも大インフレになったのですね。一番ひどかったのがどこだったか、フィリピンだったかな。戦争が始まった年と、それから途中の昭和19年くらいの比較ですけれど、フィリピンやマレーシアなんかでは、もう万の桁のインフレでした。今のベネズエラみたいなものですね。日本軍が侵略したとか、殺したとかいうような話はでてくるけれど、軍票や、あるいはその現地借入れによって、資材を調達した、収奪したということはあんまり注目されてない。経済面に關心のある人だったら、それも戦争の1つの面だったということは研究する値打ちがあると思うのですよ。

佐藤：一橋大学の図書館に軍配組合とい

う、まさに軍票を発行していた組織の史料があるのです。段ボール200箱くらいあります。関係者から寄贈されたと聞きました。これを分析すれば、先ほどの古海さんのお話になったようなこともわかると思います。

古海：私がいた東京銀行は、もともと横浜正金銀行という銀行だったので、ですから、外地のそういった問題に絡んでいたのです。それで戦後、軍票をもっているけれど換えられるか、という人がよく来たそうです。そこで、別に会社が1つあって、昔の業務の清算をやっていたのです。その会社が軍票の対応もしました。まあ、他の仕事もやらせていましたけれどもね。そこでの対応も軍票は払えないと、全部断っていたのですけれど。この根拠は、サンフランシスコ講和条約で日本の戦時債務はチャラということになっていたからです。もう1つ、日本には軍票を払えという国内法がありません、という論拠でした。

松井：敗戦後、中国人の妻となることで中国において生存を謀った方々がいたと思うのですけれど、お知り合いにそのような方はいらっしゃいますか。

古海：いや、私の近辺や知っている範囲ではいません。残留孤児、残留婦人……。残留婦人というのは、その中国人の嫁さんになったそういう話です。私は実は親父に会いに興安丸って船でまた中国に行ったのだけれども、

その時に興安丸の帰路に乗って帰ってきたのが残留婦人でした。結構多かったのですよ。ただ、当時日本から北朝鮮に帰りたいという人たちがいた。北朝鮮は素晴らしい国になっているから帰れというので、ずいぶん希望者が帰っていったでしょう。ああいう流れですよ。



写真7 興安丸

ただ、残留孤児問題については、私が理事などを務めていた社団法人〔国際善隣協会〕もね、残留孤児の親探しにはじめのころから絡んでいました。その時期帰国した孤児たちが、さまざまな理由から状況の改善を求めて、国に対して全国で訴訟を起こしたのですね。訴訟団の全国組織も〔国際善隣協会の持つ〕ビルの中に事務所を置いて、協会も訴訟の支援団体になっていました。いつだったかもうずいぶん昔の話ですけど、桐朋学園で会合があったような記憶があります。残留孤児問題にはそのようなことでしたが、残留婦人の問題にまでは、これまでご縁

が無かったというか、手がまわりませんでした。

善隣協会というのは満洲と関わりの深い社団法人だったのですけれど、今や満洲帰りの人は本当に少なくなってしましましてね。満洲で生まれたという人はまだいるけれど、満洲の記憶がある人が本当にいなくなりました。善隣協会で『満洲国史』とか『満蒙終戦史』とかいくつか本を出して、記録を残したという意味で、本当にいい仕事をやってくれたと思っています。私の仲間も多くが壊れたり死んだり……。まあ、あと数年で記憶のある人はなくなる訳ですね。150万人も日本民間人がいて、60、70万人もの日本軍が駐留して、いろいろな面で日本と関わりの深かったところですけども、今日本史のなかに満洲は全くはいってこないのですね。

例えばある日本史のテキストのなかに満洲というのはどれくらい書いてあったかと言ったら2頁ですよ。ですからね、これはいかにも寂しいと。

〔満洲は扱いとして〕日本とは国が違っていますから、日本国ではないのですよね。一体その日本国の歴史の中で、満洲とか、あるいはまた朝鮮・台湾もそうですけれども、一時期関係があったり迷惑をかけたり、あるいは一緒に何かやったりした地域はどう位置付ければよいのでしょうか。「外史」という位置付けはあるのでしょうか。いよ

いよもってきて時代が移って、いまや関係者はいなくなり、あの時期は「記憶」から「記録」に移った、と言われます。ですから若い研究者の人たちがね、是非これからも色々追っかけて資料をまとめ、満洲国の歴史研究に厚みを加えていただきたい、というのが私としてのお願いなのです。

#### (5) 日本への引揚げ

佐藤：次に、引揚げについての質問をします。引揚船に乗って日本に引揚げきて、日本を見た時にどのような思いがありましたか。

古海：いくつか記憶に残っています。順不同で言いますと、1つはね、広島を見てしまったことです。佐世保に上がった後のことです。終戦翌年の10月ですから原爆から1年少し経っていました。極めてショック受けて、今でも印象強烈です。当時、国鉄の広島駅は少し高い所にあつたのですかね。そこから見るともう一面何も無い。それで、バラックがいくつかひよろっと建っていました。あれは印象強烈で、戦争とは大変なものだと改めて思ったのですね。満洲でドタバタやっていた時の大変さとは異質のね。1発の爆弾で都市がなくなったっていう。あれは本当に強烈な印象でした。日本の印象の少し特殊な部分ですけど。

佐世保に上がった時は、南風崎（はえのさき）、針尾島というところに上

がったのですが、2、3日手続きでいて、それからみんな切符もらってそれぞれ故郷へ帰ってったわけです。針尾島は島とはいうけれど、たぶん葫蘆島と同じで岬だと思います。完全な島ではなかったのではないかな。それで、その時の印象ってのはね。日本とはなんて緑が多いんだろうと。これはやはり強烈な印象だったですね。今と違って当時の葫蘆島はものすごく殺風景なところだった記憶がありますので、日本はほんとに緑が多かった。ついでに言うと針尾島は海軍の施設だったらしいです。江田島の海軍兵学校が空襲やなんかでやられて、戦争がひどくなってきて海軍の士官養成も即製でどんどんやらなければいけないというので、分校を針尾島に造ったのです。あの沖に本船が泊まっていて、小さな湾ですよ。ですから、引揚げ船のLSTは当然入れなくて、沖から、小舟で往復して上陸したのですけどね。沖で何日かいたのは、検疫の関係ですね。変な病気の人がいらないかどうかをね。で、あの針尾島に上がって手続して、2、3日、そこで泊まった記憶ありますけど。そこはだから元海軍の兵学校。言うなれば第2兵学校ですね。その建物が、引揚げ施設になっていました。それから、そのとき聞いて印象に残ったのは古くて高い電波塔がありましたね。日露戦争の時に、バルチック艦隊がどのルートで日本海へ来るか、という話で、

[当時の日本海軍は] えらく悩んでいたわけですね。そしたら、対馬海峡から日本海の方へ入ってきたわけです。一番はじめに信濃丸っていう船が見つけて、敵艦見ゆって打電したのがね。それを受けたのが針尾送信所施設の電波塔だという話を聞きました。

佐藤：少し戻ってしまのですが、先ほどお話にあった、広島駅から広島の状況が見えたということですけども、原爆のあとで一面焼け焦げていたのですか。

古海：焼け焦げというよりは、ただもう一面の平たい平地。ええ、平地がもうなんにもなくなっていて。正確に言うと今のあの、残っている原爆ドームとかね。あれは、あったらうけど。そんな細かい事はあんまり覚えてなくて、とにかく一面全部、街が1つ壊滅。1発で、全部無くなったっていうのが、非常なショックだったですね。それは引揚げて、来てから、3日目ぐらいですかね。私は京都へ帰るので、[針生島の近くの駅から] 汽車に乗って——乗った駅は南風ヶ崎（はえのさき）って言ったかな。僕いつだったか行ったのですよ。関西勤務の時にね、引揚記念館があるっていうので行って、そうしたらやっぱりあの、DDT ぶっかける、あのこんなの……。

佐藤：機械が置いてあるのですか。

古海：そう、いっぱい置いてあってね。

これはびっくりしたのだけど[今は隣

が] なんとハウステンボスなんですね。まさに今風のレジャー施設、大レジャー施設の横が南風崎駅なんです。あの駅はもう廃駅なのかな。プラットホームが一応ありましたけどね。

大野：その駅は今でもありますけど、本当にもうただの田舎の駅ですね。

佐藤：引揚船で日本へ引揚げて来る時のことなんですけども、引揚船の中での食事や、あるいは上陸してからの食事には、どのようにお感じになりましたか。

古海：引揚船の中は、高粱が多かったですね。それで食べられない人が多かったですね。もともと酷い生活をして葫蘆島まで来て、胃腸も弱って足も弱っている人たちが多かったから、僕はちょっと食べましたけども、うちの母は体調崩してて食べられなくて。当時は日本も何にもない時代だったから。

佐藤：はい。であの上陸してからはいかがでしたか。

古海：上陸してからは全く記憶にないですね。記憶にないってことは、少しは良くなったんじゃないですか。

佐藤：次はやや抽象的な質問なんですけれども、帰国した後に引揚者としてなにかご苦労はありましたか。例えば、内地の人との関係についてです。

古海：私自身は引揚者ってことをよく言っていましたけれどもね。それによって特別違う境遇というか、違和感はなかったです。ただ、10何年前に引揚げ

60周年っていう集まりを九段会館で、善隣協会の主催でやったことがあって。そのときに、あのときはどうだったかというのを、代表で5人か6人くらいで、パネルと称して当時のことを思い出して話してもらったんです。



写真8 引揚げ60周年記念の集い  
(2006年)

それで寅さん映画の山田洋二さんとか、当時神保町の岩波ホールの支配人をしていた高野悦子さん、それから毎日新聞の論説員やっていた岩見隆夫さん。あと、なかにし礼さん。もう1人は善隣協会の理事をしていた藤原作弥さん、日銀の前の副総裁ですね。私は客席で聴いていました。みんな苦労した話で来るんだろうとずっと想定しながら、その座談会の準備をしたんです。それで共通の話題っていうのが1つだけあって、引揚げの方は苦労した人は苦労したって言っていました。岩見さんなんかは逆に、あの頃私は光り輝いていたなんて。子供だっ

たけれども、煙草を自分で巻いて作って、売って歩いてえらく儲けてね。小遣いは潤沢だし、あの時はわが生涯で一番輝いていたときだったなんて言われた。ただ共通の話題で、盛り上がったのが、みんな帰国してからいじめられたっていう点ですね。私はその記憶が全くなくて。その理由は今言った5人の人たちは、全員地方に帰ったんですね。私は最初、京都に帰ってそれから東京に来て、まあ大都会にいたからなのです。[言葉の面では]満洲は基本的に標準語ですからね。みんな言葉が違うから、いじめられるわけです。それから、着ているものがね。リュック1つで帰って来ているから、本当にボロボロです。要するに当時の引揚者っていうのは貧乏人の代名詞みたいなものだったから。それでお前は引揚者だろう、なんてっていじめられた、という話が盛り上がりましたね。俺もそうだとかね。あの当時は戦災者の人もたくさんいたし、よく町で見かけたのは傷痕軍人ですよ。それから戦災に遭ったという戦災者、それから疎開帰りとかね。今無くなった言葉がいっぱいある。その中の引揚者っていうのは、一段ちょっと低く見られていたように思えました。なんとなくちょっと違うという感じで。今でも、冗談にですが満洲の頃のクラス会では在日日本人の集まりだ、とか言っていますよ。

**(6)撫順戦犯管理所の父を訪問(1956年)**

佐藤：少し時代が飛んでしまうのですが、1956年に撫順戦犯管理所へ行った時のお話を伺いたいです。1つはですね、古海さんの回想録の中に、戦争犯罪への懺悔が教育刑であると中国側から言われたことや、面会家族の洗脳があったとマスコミが書いたという話に言及されていたと思います。戦犯管理所に行ったことによって、日本の戦争に対する古海さんの認識に変化はありましたか。あと、そのようなことを言われてどのようなことを感じられたのかということをお伺いたいです。

古海：戦犯管理所にはだいたい2週間行きました。瀋陽から撫順に通って、面会に行っていました。せっかく行ったのだから朝から晩まで一緒に話ができたとするとそうではなくて。向こうには中国側の規則がありました。だから、1日だいたい2時間とかいうふうに決まっていたから。もうおしまいだから帰きなさいという時もあったし。かと思えば今日は特別に1時間余計にやってもいいよという時もありました。それから、瀋陽での軍事裁判の時の録画映像を見させられた日があって、面会家族全員で40人くらい。日本語で翻訳したものを観たのですが、3時間くらい聞かされると頭が痛くなってくるのですね。これは辛かったですね。

戦犯のほとんど軍人でした。大雑把に言うと30人が軍人、10人くらいは役人とか裁判官ですね。裁判官も極めて上級の人というわけでもなかったのです。どういう基準で捕まっているのだから分からないんだけど、例えば課長クラスや部長クラスくらいの方がいたりしたわけ。中央官僚の最高位は武部六蔵という元満洲国国务院総務長官でした。その方はその後亡くなりましたけれどね。



写真9 面会時の様子 (1956年)



写真10

面会時に行われたバレーボール  
(1956年)

佐藤：武部六蔵がなくなったのは撫順なのですか。

古海：撫順で重篤になって中国側が釈放しました。それで、日本に帰って1ヶ月くらいで亡くなってしまったのです。武部さんが総務長官の時に、うちの父親が次長でした。それから、高橋康順という人は参議府の参議。そんな人たちがいました。文官が10人くらいいましたけれども、どうしてソ連がそういう選り分け方をしたのか。軍人を含めて戦犯の引き渡しは中国が選り分けたというよりは、ソ連が選り分けたものだと思います。

それで、瀋陽での裁判の生々しいところを編集されたものを3時間聞かされたので、みんなくたびれ果ててね。それは、みんなショックを受けますよね。ある中将、すなわち師団長は部下が残虐行為をしたことが罪状になっていた。僕もショックを受けたけれども、とんでもないことをやっているわけですよ。人を並べて次々に突き刺していくとかね。そんな話ばかりを3時間くらい聞いて。でもそれは満洲で起きたことじゃないのですよ。というのは、瀋陽の軍事裁判というのは中国側が瀋陽で日本の戦犯を集めて、中華人民共和国として裁くということなんです。ただし、捕まっていたのはソ連から渡された人たちでした。それ以外の裁判というのは戦後すぐに中国のあちらこちらでBC級の軍事裁

判というのがありましたよね。ただし、それは蒋介石の中国なんですね。毛沢東の中国になってからは瀋陽だったのです。

なぜそういう人たちがいたかという、軍は昭和20年くらいによいよ本土防衛だということになって関東軍から相当引き抜いたのです。関東軍から引き抜いたのをまず朝鮮に持って行って、それから日本の本土に持って行ったので、関東軍はもうスカスカになっていたのです。それで、それを補充するというので、中国本土の支那派遣軍の方から師団にして4つか5つくらい、終戦直前くらいに持っていた。昭和20年5月に関東軍が守備範囲の変更をやったんです。それは日本の参謀本部と打ち合わせをしてね。満洲とソ連の国境って8000キロもあって、とても守り切れない。基本的には元々山型になっている国境をソ連に備えるように守ろうとしてたんですね。ところが、もうこんな8000キロなんて守ってられない。いくつか要塞があったところは別ですけども、守備ラインを下げってしまった。それで結局連京線のね、大連と新京、それから新京と図們、北朝鮮の国境を結ぶ線の内側、これを守ろうと言うことなんです。だから、この線の北側、満洲の3分の2か4分の3は、もう放棄するわけです。それを開拓団なんかにはそれを知らせないで。それは日本が

下がってしまうとソ連がすぐ入ってきてしまうわけだから。非常にけしからんと思うわけだけれども、開拓団にはいっさい知らせないで軍だけ下がってしまった。しかも最後に根こそぎ召集で5月から7月にかけて、開拓団の男4万人も兵隊にしてしまって、開拓団は女子供ばかりにされてしまった。

あと脱線ついでに言えば、新京で疎開列車で逃げる時にね、あれはまず関東軍の家族と満鉄の家族が逃げたわけですよ。それで、なんで市民を放っておくんだとこう言ったら、いや市民は荷造りに時間がかかるんだと。到底、駅にはすぐ集まれない。それで関東軍の家族というのは、命令一下すぐパツと集まれる。彼らは命令も情報もね、早く流すわけですよ。それで、僕は新京の駅で本当に見ていたんだけど、目の前をね。関東軍の家族を乗せた汽車がどんどん行くわけですね。次に列車が来た、次は誰だつていうと満鉄の家族専用車。それでね、一般市民は全くもって置いてけぼり。それはけしからん。しかも、関東軍の司令官の家族が終戦の時には日本にいたんですね。そういうこともあったし、それからもう1つは話が飛んでいますけれども。ソ連がいよいよ攻めてきたって時に関東軍はさっさと通化にうつったわけ。8月9日に移っているんですね。それで、満洲の政府に通化へ来

いって命令が来たわけですね。だけども、結果的には1人だけ、総務長官が行かなきゃ角が立つっていうんで、行ったんだけど。だけれども、市民はみんな残っているわけですよ。そして、北満からはどんどん避難民が来るわけでしょう。それなのにね、皇帝は行っちゃった。関東軍の司令部も向こうへ移して、満洲国の政府も移すと。それで、移って来る時の汽車輸送は、家族の分も含めて手配するって。それに政府が怒っちゃってね。そんな一般の市民を置いて、政府の家族だけ団体で逃げるなんてね。冗談じゃない。それよりも、それよりも政府が移っちゃったら、残りの市民と避難民を一体だれが面倒を見るんだとか。それで結局、うちの親父なんか結局最後まで新京に残っていたわけですがけれども。途中で関東軍がウダウダ言うもんだから、角が立つっていうんで長官だけが行って。それで終戦の詔勅を聞いてすぐ帰ったわけです。まあそれはちょっと別としてですね。最後の段階で、5月くらいに関東軍がずっと引いた時に、満洲の一部だけを防衛するっていうんで、支那派遣軍から4~5個師団くらい来たんですよ。ところが、それがね。あっちこっちで変なことをやっているんですね。

佐藤：それは、中国戦線でということですか。

古海：ええ、中国戦線で。しかも、そこ

のなかに1人、藤田なんとかっていう師団長で中將の人がいますよね。これなんかは、兵隊を鍛えるためにね。中国の罪人をどっちみち罪人なんだって言って、殺してね。そうしてそれを訓練にしていましたね。そうして、それで度胸をつけなきゃいかんと。なんでだって言ったら、確かにそのころは日本で新しい師団を補充するのって言っても、もう優秀な兵隊はみんなないわけですよ。言うなればもうわけのわからない素人ばかりね。もっと言うと、もしかすると刑務所かなんかから刑の軽い奴は引き抜いたりしているのかもしれないし。そしてそれが渡って行って、しかももうそういう時期だから、中国に支那派遣軍として駐留していても怖いわけですよ。というのも、こっちはどんどん手薄になってくるわけだし。いつゲリラが来て撃たれるかもわからない。疑心暗鬼になっているから、自分の怖さも手伝って、相当ひどいこともやっているわけですね。それがね、終戦の時は朝鮮軍にも補充で入っていたし、関東軍にもそういうのがまわってきていたわけですね。それが終戦の時に、ソ連が入ってきて無条件降伏をした時に、みんなソ連に行って、シベリアで捕まっていたんですね。それで、新生中国ができた時に中国として裁きたいから、日本の戦犯をこっちへまわしてくれと。そういうのが、確か中ソ友好条約かな。そ

れができたのが1950年ですよ。1949年が中国の建国でしょう。それで、その1950年に毛沢東がスターリンに申し入れて、ソ連が1000人ほど選んで。それで、その選び方が全く分からないのです。というのは、中国にしてみれば特に満洲地域では、一番目を付けられているのは関東軍の司令官でしょう。それから参謀長、参謀副長。これが御三家っていうかトップスリーですよ。大將、中將、少將、これはね、ソ連は渡さなかった。それで、その他にもね、関東軍の参謀たちは全部俺の方で裁判をやるからと。関特演っていうのをやっていたんですね。関特演というのはドイツがこう西側から攻めて来た時に、場合によってはこっちから、西側からやろうと関東軍を増強して、ソ連の国境近くまで兵隊を持って行ったんですね。ソ連はそれを非常に根に持っていたというか、神経を使ってたんですね。それでそれを裁くって言ったんだけど、結局あのハバロフスク裁判っていうのをソ連はやったんですね。やったんですが、ところがさすがに関特演は言うなれば既遂じゃなくて未遂ですよ。だから、裁判では関特演自体どうも裁かれなかったみたい。それで、専ら石井部隊ですか、あの有名な細菌部隊。あれは本当にソ連が裁いちゃったんですね。その責任で、関東軍司令官以下、参謀長、参謀副長あたりが、20年の刑をソ

連から受けたんですね。だから、ソ連はそういうことを、関特演と細菌部隊のことですね。細菌部隊も満洲にいる中国人が怒るのはもっともだと思っただけでも、なんでソ連がその細菌部隊の裁判に出てきたかって言ったらそれはよくわからないんだけどね。もしかしたら、ノモンハンでは使っていないと思うんだけど、張鼓峰事件ね。ソ連と日本がドンパチやったっていうのは、ノモンハンと張鼓峰しかないわけだから。ノモンハンではないでしょうね。もし仮に使っていたとしても、張鼓峰なんでしょうけれども。それにしても、小さな極地的な問題で。けしからんのはソ連が20年の刑を関東軍司令官にやったんだけど、1956年に僕たちが中国へ会いに行った時、鳩山さんが行ってね、平和宣言が出たでしょう。あれの特赦でみんなさーっと帰ってきちゃったんですね。だから、それは中国にすると非常に心外だと思うんですね。

佐藤：先ほど3時間話を聞かされて頭痛かったとおっしゃったと思うんですけども、そういう向こう側の、そういう中国語側の、ある意味いろんなプログラムを用意して皆さんに彼らのそういう観念を宣伝してくるんですけど、そういうものを聞いて、何か古海さん自身の考えが変わったかとか、そういうことありましたか。

古海：考えが1つ変わったとしたら、日

本の軍人ってとんでもないことをやっていたという驚きですね。それは非常にショックだったね。ま、今となつてはそういうこと全部出てるし、一般に本にも書かれるけど。あれは1956年ですから、僕が大学を出た年で戦争中のことを振り返って研究するなんていうような余裕もムードでもなかったから、僕はあの、一回56年というのは社会人になってすぐですから、そういう点では誠に不勉強でね、何も知識ないという訳ですよ。だから、東京裁判というのあったし、特にあそこでやられた。東京裁判の被告であったのほとんどが軍人ですけど、その軍人も何かといたらほとんど満洲がらみの人ですよ。

ちなみに軍以外の人かというと、うちの父は総務庁の次長をやっていたけれども、もしかして悪くすると関東軍の首脳がないから、そこも一緒に責任を負わされたのかなという感じはしない訳ではなかった。けれども、その時父親に聞いたし、その後起訴状だとかなんとか中国もそういうのどンドン発表しましたからね。『世界』だったかな、雑誌に出たりして、それを読んで、これにはもうまったく軍の関係の方は入っていない。満洲国の政府の方の問題での判決だというのがはっきりわかりましたし、そういう意味でも割り切っていました。



写真 11 帰途、興安丸船上での慰安会  
(1956年)

だから帰りの船の中でも、同行の記者がいや一大変だったですねっていうから、大変は大変だったけど中国の方でああいう裁きをする立場も分かる、なんてこといったら、あー古海さん洗脳されましたねって。そういうことじゃない、と説明したんだけど、日本に帰って新聞を見たら「面会家族、洗脳されて帰る」と。

佐藤：一部だけ切り取られてしまった訳ですね。

### (7) 父古海忠之の思い出

井田：お父様との思い出の文集を拝見させていただいて、中でも自分が興味をもったこととしては、お父様が拘留の関係で、18年間くらい離れていらっしやって、18年も離れて暮らしていたにもかかわらず、例えばゴルフ一緒に行ったとか、大学通りの喫茶店白十字行った話とかも書かれていて、非常に仲が良いと思いました。自分が丁度 20 歳になったので、自分の父親と過ごし

た時間も 20 年になって、18 年間離れて暮らしていて、なぜそこまで仲が良いのかということ、また、他にも思い出等あれば、お聞かせ願いたいです。

古海：僕、中抜きなんですよ。満洲で生まれて、それが昭和 8 年で、終戦が昭和 20 年だから、12 年一緒に居て、僕は 1 人っ子で、そしてそれから父が 18 年居なくて、その間、母と私は引揚げてきて、私が学校を卒業して就職した翌年に縁があって、この国立に住み着きました。昭和 38 年に父親が帰ってきて死ぬまで、丁度 20 年ありました。

だけど、正確にいうと父が帰国したとき私はロンドンに居たし。その後も海外勤務があったから、一緒に住んだのは 15 年位でしたかね。それにしても、中抜きというのは、向こうも変だったと思いますよ。だって子供のときに別れ、次に会った時には、僕が所帯主になって、結婚もしてるし、子供もいるし、ギャップが凄い訳ですよ。だから、扱いに困った面もあったのかな。だけど、面白かったですよ。

佐藤：何が具体的に面白かったですか。

古海：やっぱり、親父というのは不思議なものだと思います。やっぱり、居た方が良くなって。でも一番苦勞したのは母親ですよ。その父親の拘留とは比べ物にならないけれど。

佐藤：まさにこの家の中にお住まいになっていたのですか。



写真 12 撫順面会時の家族写真  
(1956年)



写真 13 古海夫妻の結婚式 (1960年)

古海:はい。お金借りて家を造って。何で食って行こうかと母親が考えて、一橋が近いから、学生さんの下宿をしたらどうだと言って、それが良かったんで

すよ。来たときはガスが無くて、水道が無くて、電気だけはきていたけれど。だから、水道は井戸ですよ。深く 20メートルくらい掘ってある。ガスはプロパンでした。そのような小さな家の 4 畳半に一橋の学生さんが入ってきてね。はじめ昭和 32 年頃は中田君っていう富山出身で剣道部のキャプテンやってた人でした。

あと、私の父は帰国してから、政治の場に自分も出る、と言い出して。やっと落ち着いた生活ができる、と思っていた母をがっかりさせました。政治家なんかやめてくださいって言われちゃって。それで、結局試すのは 1 回だけ、ということで母と折り合い、昭和 40 年の参議院選挙に全国区で立候補しました。池田首相や岸元首相などの応援をいただいていたけれど、結果はわずかなところで落選しました。

井出:そう書いてありましたね。

古海:ええ、それでもってね。父はこれをもって政治家になることをキッパリ諦めました。その後も政治家との付き合いは結構ありましたけれど。

佐藤:あと、お父様はどこかの会長か顧問か、なにかされておりましたよね。

古海:はじめはね。ホテルニューオータニの役職ですね。昔、大谷米太郎という人が居て相撲取りだったんですが、引退後いろいろ事業を興した。戦後のホテルニューオータニもそうですが、その前に鉄鋼業で成功して、大谷重工

業は満洲にまで進出していました。そういうご縁もあったのでしょうか。それで仕事ですが、ホテルの仕事は比較的短くて、東京卸売センターの設立や運営をやっていました。

佐藤：はい、名前は伺ったことがあります。

古海：TOC（ティーオーシー）っていうんですけれども。五反田にある大規模な卸売センターです。昔横山町とか馬喰町あたりの間屋がいっぱいあったところ。それが大規模な卸売り施設をつくらないと、横山町なんてトラックが入れない。コンピューターのハードやソフトも個々の間屋ではやりにくい。ですから、大きな建物をつくって、全部共通倉庫で。トラックが入れるようにして。それから、マテハンっていうんですかね。マテリアル・ハンドリングですね。自動的に作業をされるようにして。それから、経理も大きなコンピューターでぜんぶ管理する。やろうとしたのは日本で第1号なんですね。大きな投資ですから、当時の日本開発銀行の融資がいます。東京卸売センターの設立準備をやり副社長や社長になって、そうしたことをやっていました。あとは満洲の方の就職だとかなんかのお世話をするのが、老人の生きがいみたいになっていましたね。

佐藤：そうすると、よくこのご自宅には満洲の関係者の方がよく来られたのですか。

古海：大勢来られましたね。この家は建て直してからもう40年くらい経つんですが、むこうに我々が元々住んでいたところがあって、両親はそちのほうに。古くて狭い家だったけどお気に入りの家でした。それに両親は庭の木や草花や小鳥が好きで。そんなところにお客さんが来ていました。それに満洲の人たちの集まりはいろいろありました。国際善隣協会は父が関係していらしたので亡くなった時に、入ることになりました。岸さんとかうちの父だとかを囲むゴルフの会などもずいぶん長く続き、〔引揚者〕2世も参加していました。満洲帰りの方とのお付き合いは、父が帰ってきたおかげでひろまって、ずいぶん長く続いたと思います。

佐藤：お父様が1963年に帰国された後、お父様自身は引揚げてきた方の団体、引揚者団体には参加なさらなかったんですか。

古海：引揚者団体全国連合会というのがありました。昭和40年の選挙のときとか、引揚者への手当支給とか、そういう時には連繋があったと思いますが、私はその辺のことは知りませんが、ずっと後になって、10何年前に引揚げ60周年記念というのを善隣協会で行ったんですが、その時にちょっと調べていたら、その引揚者団体連合会というのが、社団法人として登記上はある。自民党の衛藤征士郎先生が会長だと

いうことも分かった。それで議員会館へ行って実はこういう企画を持っているんだけど、場合によっては共催でもいいですよ、と。そしたら、ずっと長い間、もう実体のない会になっている。どういうことかという、どうぞ私たちのことは気にしないで下さいと。会の当日は衛藤征士郎先生、来られましたけどね。60年というのは本当に長い年月なんだと改めて感じました。



写真 14

赤坂・霞会館での古海忠之氏帰国祝い  
(1963年)

佐藤：そうですね。なるほど。それで、お父様はその TOC で亡くなるまでお勤めだったんですか。

古海：いえ、私がロンドンに2度目の赴任をしたのが1977年、父が77歳の時でした。体力も少し落ちてきたようなので、もう充分働いたのだから、そろそろ辞めてゆっくりイギリスに遊びにいらっしゃいよ、と言いました。父

は、自分は向こうにいた何年間かは、〔働いた時間として〕カウントしないんだと言っていました（笑）。

佐藤：18年間をカウントしないんですね（笑）。

古海：精神的にはわかるんだけど、やっぱり肉体的にはね。それで、79歳のときに、私たち家族が住んでいたロンドンに両親で3週間くらい遊びに来ましてね。その時に確か仕事は辞めて来たんだと記憶しています。顧問もやめたんだっかな。まあ時代によって、親子関係っていうのも違ってくるものかと思いますが、生き別れになりそうな時とか、災害に遭った時とか、そういう極限状態を考えれば肉親の大事さが分かります。だから、やっぱり生きててまた会えたのは極めて良かったと思うし。

ただ、まああの判決自体はね、考えるとなかなか難しく。本当にその責任をなぜとられるんだっていう、そういうものもあるし。まあ、それを言い出すともうキリがない。だから、結局もう1つのセレモニーで、言うなれば侵略なら侵略ですっていうことで誰かの責任があったと。それで、その責任は誰かがとらなきゃいけないのだと。それをとるのが、関東軍なのか政府なのか、そういう議論をすると、100年論争というか、神学論争になってしまうから。

もうとにかく〔敗戦時に〕いた人が、

もっと言うなれば捕まった人が責任をとらされた。順番から言ったら、武部さんっていう上にいた人が病気で亡くなってしまいましたからね。それはもうしょうがないことだと思うんですけど。第一、父親自体がこれはもうはっきり言っているんですけど。これは誰かが責任をとらなくてはいけなくて、もっと横にひろげればこれは俺のところじゃなくて、むしろこっちの方だとか。それはもういっぱいあるわけです。それで、こっちの方の人っていうのは、まだ誰も捕まっていなかったから。まあもうそれは仕方ない。また、とろうと思えばとれるような線で書くとね。総務庁っていうところにみんな集まって来ているわけだから。それはもう最終責任ですから、全然その線を引いても、関係ないということではないわけなんです。だから、そこは非常に明るいですよ。あの、カラッとします。

佐藤：そういう話も帰国後になさっていたんですか。

古海：しました。それでね、実は僕もつと聞いておきたかったことが今になってね。10くらいあるんだけど。やっぱりよくないんだな。一緒にいると、いつまでも一緒にいるみたいな気になって。

佐藤：いつでも聞けるから、ということなんですよね。

古海：そうなんです。それは、半分はね。

満洲国の運営がどうだったか、ということだし。あと、半分は親類関係ですね。親類で、あの人とこの人が遠縁だけど、あれどう繋がっているんだっけとか、なんであの家と付き合いがあるんだっけ、とか。父の実家は京都でしたが、その前は米沢。上杉なんですね。明治維新のあと藩が月給くれなくなったから、大挙して米沢を脱出したんです。うちの父方の祖父っていうのは、米沢の中学から仙台の高等学校へ行って、大学は東京で、法学部をでて判事になったんですね。地方裁判所の判事、それが京都だったんですね。甘粕さんっていう人も米沢なんですね。いつだったかな。上杉謙信の大河ドラマをやっていた時にも甘粕って出てきました。あれは、家老格のお家なんですね。

佐藤：甘粕家ってそういう名門だったんですね。

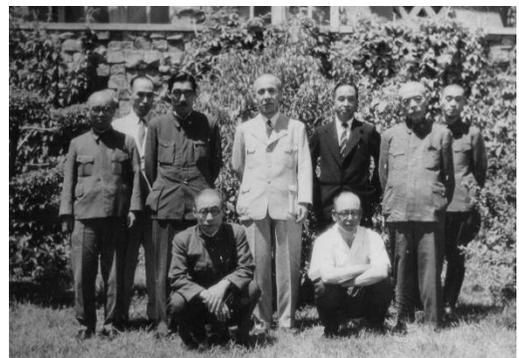


写真 15 満映湖西会館での集合写真  
(1945年)

古海：米沢藩、上杉の家臣ですよ。甘粕さんの長男の忠男さんという方が、去年亡くなりましたね。

佐藤：古海さんも交流があったんですか。

古海：ありました。あの人ね、三菱電機の副社長やっていて、仕事の上ではただの取引先の副社長という話なんだけど。あの甘粕さんが死ぬときに、ピストル取り上げたり青酸カリ取り上げたり、みんな取り上げて。ところが2つに分けて持っていたらしくて、その片方を飲んで亡くなったんですね。それを飲むんで、水を持ってこいって言われて、水を持って行ったのが一番若い秘書だったらしいけれども、その人が年をとってたけど、銀座でバーをやっていたんです。ずっと長いこと。甘粕さんはそのバーの常連でね、連れてってもらいました。彼は僕より2つか3つ上でした。昔大連で甘粕さんの家に行って、一緒に釣りに連れてってもらったこともありました。そのバーも一昨年無くなりました。満洲の話題になるようなところは、人も場所も含めて本当に少なくなりましたね。

#### (8) 満洲国について

佐藤：次の質問になります。大変に大きな問題なのですが、様々な経験をなさった古海さんにとって、満洲国とは何であったのか、それから、その歴史を学んで継承していく意味はどんな点にあるのかについてのお考え

を教えてください。

古海：当時から僕あまり考え変わってないんですけども、菅野君も経験したかもしれないけど、日本で満洲の話というのは非常にやりにくかったですね、ずっと。やりにくいというのは、私が若かった頃の日本人の満洲観というのは、もう何でも日本が悪かったよ、すべて悪いという人たちですな。それから自分たちが建設的なことをしたという人たちがいて、中間がいなかったんですよ。それで僕が中間みたいなことをいうとね。右よりの方からおまえはなんて左翼的なんだといわれ、左翼の方からは反動だといわれるような感じだった。建設的なことをやったのは事実だったと思うし、イギリス、フランス、オランダなどの植民地経営とは、十分違う建設的なものがあったと思う。だからといって、それが全部ということでは全くありません。それをいうと両方から叩かれて、座りがいい椅子がなかったけれども。近頃はね、非常に楽になったのはね。先生もそうかもしれませんが、固定観点からだけでないノンポリの学者さんというのが出てきた。

佐藤：はい、ノンポリかもしれません(笑)。

古海：いやいや、つまり先入観を持って、はじめから俺はこっちの陣営だと決めていない人たちがね。出てきたもんですから、随分話しやすくなった気がします。そういう意味でいうと、今日

本でやっぱりあれは侵略だったというのはいくらも通説ですよ。僕はね、それになんの異存もない。こう思ってるんです。つまり、満洲国というのは、まずその動機からいって、当時、昭和期の日本で言われていた満蒙問題を解決しようとしたものでした。それで柳条湖で鉄道を爆破して、中国側の仕業だということにして満洲全部の占領につながった訳です。条約上の権利というのは日本にありました。日露戦争により得たもの、袁世凱への 21 箇条の要求に基づくものなどです。ところがそれらは五四運動のあたりから危なくなってきた、権利だと思っていたものが侵害されてきた。張作霖までが反日になって迫害を強めてきた。それで現地にいる人たち、山口重次とか、小澤開作とかいう人たちは、行動を起こさない関東軍はなんて腰抜けだと、もう罵倒してる訳ですね。俺たちがこんなにいじめられてるのにちっとも助けてくれない。関東軍というのは俺たちを助けるために居るのではないのかと怒ってる。日本に来てのぼりを立てて遊説して回ったりしてね。権利だと思っていたものがどんどん侵されてく、なんとか防がないといかんというニーズあった。これが 1 つ。それからソ連の問題があった。必ずまた満洲に出てくると思い込んでいましたからね。実際ソ連はしょっちゅうちょっかいを出したり居座ったりし

ていた。ですから満洲を固めておかないといつまたソ連が攻めてくるかわからない。日本を守るのが朝鮮で、朝鮮を守るのが満洲だというようにも考えられていた。その次は経済問題です。大不況下の日本経済を打開する方策は満蒙しかない、と思われていました。それから次に資源の問題。いざアメリカと戦争することとなれば——石原莞爾という人は最後の戦争は日本対アメリカだといってたけれども——日本は何も資源がない。ということになるとやっぱり満洲北支、さらに南洋を押さえるのが日本のニーズでした。ですから満洲事変はね、はっきりに日本のニーズにあった戦争でした。もう 1 つ、その後の満洲国の仕組みというのは、大雑把にいうと、関東軍がずっと後ろから目を光らしていたこと。そして、1 つの省のトップが中国人でも満洲人でも、2 番目のポストに日本人が入っていて、それで抑えられる仕組みを作ったとか、もっと詳しくいうと総務庁中心主義の制度とかね。そういう仕掛けをみてもね、満洲国はやっぱり傀儡国家だといわれても仕方がないと思います。その辺を争うつもりはありません。

ただ、私が以前から問題意識を持っていることがいくつかあります。満洲事変を起こしたとか、満洲国の仕掛けは、関東軍と日本の官僚が大事なところを握っていたということから、侵略

で傀儡政権の実質植民地ということになって、そこでおおかたの関心は止まってしまうのです。その先は日本が望む政策を好きなようにやっていたのだろう、論ずる迄もないと思っているのですね。それだと、ただ収奪の対象だったのだろうとかで、スペイン、ポルトガル、またイギリス、フランスなどの植民地と違うところがあったのかどうか分からないではないですか。

確かに満洲国 13 年の歴史の後半、日中戦争が泥沼に入ってしまった、更に太平洋戦争が始まってからというもの盟邦日本への協力が何にも増して大事なことになりました。そのため工業生産を高めるために無理をしたり、農産物の供出目標が引き上げられたりしたのです。その他にも、当時満洲で働いていた人たちに戦後聞いた記憶ですが、戦況の深刻化とともに関東軍の態度がピリピリ神経質になって来た——厳しくなったということです。ノモンハンでの関東軍の敗退が昭和 14 年。それから軍と皇帝の線で、建国神廟を建立して天照大神を祀る、なんてことをやったのが昭和 15、6 年でしたかね。あの辺からおかしくなったのではないのでしょうか。

満洲国の当初数年は治安対策と必要な制度作りに忙殺され、やっと離陸して理想に沿う国造りに努めて、手ごたえも得ていたけれども、結局戦争で

すべてが台無しになってしまった——これは満洲国の関係者、私の父親も含まれますが、とくに政府官僚だった人たちなどが述懐していましたね。その満洲国の、昭和 7 年の建国からの前半期、昭和 13、14 年までのところは、ですから満洲国の土台を固めて成長期にあったと云えるでしょう。

満洲国が侵略だったとか、傀儡国家だとか非難されるときに、そうでない要素も見て貰いたいという主張も出てきます。思うにそういうグループが 2 つあります。1 つは建国前から活躍していた満洲青年連盟や大雄峯会といった、いわば青年グループ。民族協和、五族協和の理想を唱えて国造りに挺身した人たちです。建国後の大同学院や建国大学にもこの思想が流れていました。情熱を傾け、ときに命を懸けて働いた純粋な人たちです。満洲が植民地というなら、他の植民地で宗主国の人たちからこういう動きがあったのか。ただこの人たちの主張はやや理想に走りすぎて現実問題の掘り下げに欠けたところがあったと思います。

もう 1 つは（もう昔のことになりますが）満洲で働いていた人たちの話をいろいろ聞いて感じたこと、また回想録などにも出てくる一種の達成感です。特に役人をやっていた人たちの意識に強い。何かというと、税制など財政制度の確立、乱れていた通貨制度

の統一、産業の振興、計画経済の採用、大規模なインフラ整備、鉄道網の拡充、雇用の拡大、郵便制度、教育制度等々です。そしてこうしたことを背景に国民の生活が良くなったという意識がある。与えられた条件の中で具体的な目標をもって達成に努力するのが官僚です。その努力をして一定の目標を達成したという満足感がある訳です。

その「与えられた条件」の中には満洲国に実質君臨していた関東軍との交渉も含まれます。関東軍と政府との関係は、ある特定の問題をどうするかといった場合に、議論を重ねて双方納得の結論に至ったこともよくあったし、一方では意見対立し、当時のことですから最終的には軍が強い。役人が憤然抗議して辞職するといったことも時には起きていました。

星野直樹という満洲国の総務長官を勤めた人の回想ですが、昭和7年に大蔵省を辞めて建国直後の満洲国政府に参加するグループが、時の大蔵大臣高橋是清に私邸での食事に招かれた。その時の高橋是清の言葉の1つに、「満洲は新しい国を造ろうとしている。その仕事を引受けに行く君たちは真に満洲のためを計ってやらなければならない。日本のことを考えるのは二の次だ」と言われたそうです。その言葉は、うちの親父の回想録にもあります。まあ現実にはいろいろ難しい問題があったことは当然ですが、理想の

国づくりに励むことがひいては日本のプラスにもなる、という考えは政府の中でかなり共有されていたと思います。少なくとも戦争の激化でジャパン・ファーストとならざるを得なくなるまではそうであったと思うのです。なればこそ関東軍との衝突もいろいろ起きていた。軍と同意見という場面ももちろんたくさんあった訳ですが。

脱線しますが、高橋是清という人は財界人としても、政治家としても偉大な常識人だったと思います。満洲については、元になっている信念があって、満洲行きのグループに敢えてそういう話をしたのでしょうね。満洲の関係では、彼は治外法権の早期撤廃を唱えていた。更に満蒙開拓団をあのような形で入植させることに強く反対していた。とくに開拓団反対は彼のアメリカ体験も影響していたのかもしれませんがね。あのころは中国移民への排斥運動がアメリカで盛んだったですからね。でも開拓移民に賛成していた軍部は嫌がりますよね。彼が二・二六で殺されたのは、満洲関係の理由ではなくて、軍部の予算を抑えようとしたとか、まあ常識路線が睨まれて「君側の奸」ということになってしまったのでしょうけど。それで高橋が殺されたら、もう反対者はいない。居ても口をつぐんでしまった。それですぐ満蒙開拓団の入植が始まったと理解しています。

話を戻すと、満洲国での政策決定などについて、関東軍と政府との間には緊張関係があったし、政府国務院が重要な行政や法案の決定を行う場合には、国務院会議を通さなければならない。出席者は部長(大臣)だったから、総務長官を除いてすべて満系です。それが通ると今度は参議府での審議だけど、出席者である参議は3分の2が満系です。この2つの会議で修正されたり、条件が付けられたりしたこともある。それを通過して皇帝の決済ということになる訳で、このプロセスでは相当緊張したと星野さんが回想録に記しています。戦争の激化とともに対日協力が全てに優先してゆく訳ですが、満洲国には理想追求の流れや時期もあったことをぜひ歴史の中に残して行ってほしいと思うのです。

それで、その先には日本の利害がもろに政策に出てくる時代が来る。それについて、環境に応じて日本のニーズがどう変わり、満洲国に何を期待するようになったか、対応して満洲側の政策や問題がどう処理されて行ったかと見て行くことが必要だと思います。日本は、支那事変が深まるにつれて、また米国との関係が悪化するにつれて、戦力増強の必要が益々高まり、武器・艦船・工業製品、についてはその原料への需要が急増しました。その結果は当然財政に及んで、太平洋戦争が始まる前から日本の財政は異常なほど

国債依存体質となっていました。そういう状況が当然圧力となって満洲国にもかかってきた。満洲でもっと何とかできないか。満洲国に頼もう、やらせようという訳です。満洲国の産業開発5か年計画は第1次の途中から修正修正を余儀なくされた。第2次計画はあつてないようなものだったのではないですか。もっと沢山、それも直ぐに、という訳です。それで成果が上がった分野もあるけれども、強行するための混乱も起きたし、ネックもハッキリしたのではないですか。工業製品などは部品や原材料などの裾野が確りしていないと、頑張るだけではどうにもならない。満洲国は工業と言えるものが殆どないところから、産業に大投資をして立ち上げたけど、成立して5、6年でそういう時代に入ってしまった。だから負荷をかけてもネックが露呈するだけ、といったところが多かったらしい。満洲重工業総裁だった高崎さんの回顧録にその辺のことがよく書いてあります。満洲国の経営という面でいうと、そういう戦争のためのシフトは当然に民生を圧迫します。もともと満洲では生活のための軽工業品を外に頼ってきました。昔は華北から、満洲国成立後は日本からでした。それが不自由になったし、農産物の供出割り当ては増えるし、です。そうすると民衆の不満も増えるし、王道政治の理想はどこに行ったということになり

ます。

悪いことについて、自然の成り行きなのか、とくに太平洋戦争になってからはだんだん日本人のいらいらが目に付くようになって、現地中国人との関係が心配されるようになったという。これも何人もの人の回顧録に出てきます。神社の前で頭を下げなかった満人を日本人が殴ったなどです。満洲国では宗教は自由だった。日本人は仏教か神道、中国人は道教など、蒙古人はラマ教。勿論キリスト教会もありました。でもそうなるとう五族協和どころではありません。宗教関係の悪政は、1941年だったか、満洲に建国神廟というのが創られました。皇帝溥儀が訪日した際に、日本に頼んで天照大神を祀る神社を満洲にも建てることに

した。そして拝礼することを全国民に求めたというものです。政府が、それはまずいと棚上げしたものを、皇帝が自分も日本の天皇の権威をまとうために無理に頼んだという説明が多いのですが、宮内府の処長（局長）だった人の回顧録に、関東軍がその必要性について時間をかけて皇帝に吹き込んだことが詳しくでています。大体、関東軍がもし反対ならば国務院会議や参議府会議を通す筈がない。天照大神が頂点の国家神道、その八紘一宇思想で東亜を纏めるのは陸軍の基本的な考えでしたから。まあちょっと脱線しましたが、戦争が満洲国運営の方向転換を迫ったという視点もぜひぜひ歴史研究に入れるべきだと私は思っています。

# 延吉からの引揚げ体験

## ——終戦から日本に帰国まで——

執筆：東郷量子

編集：朴敬玉

### 1. 終戦直後の延吉にて

#### (1) ソ連兵が延吉に来た

1945年8月15日、当時14歳の私は家族とともに玉音放送で戦争の終結を知りました。

その4日後の早朝、ゴーという音で眼が覚めました。ソ連軍の戦車の列が轟音を鳴り響かせながら延吉の町を北から南へと進んで来ました。その翌日から恐怖の日々が始まりました。ソ連兵が家に土足でズカズカあがり、手あたり次第、たんすや机の引き出しの中から、目ぼしい物をすべて持っていきました。時計・万年筆・カメラ・指輪・ブローチ・姉の美しい友禅染の和服など、私共が恐怖で部屋の片隅で震えている目の前で持って行きました。幸い伯父が日露戦争の時に頂いた金鵝勲章はあらかじめ倉庫のレンガの床の下に埋めておいたので見つかりませんでした。これが見つかったら大変なことになった、と皆で話し合い胸をなでおろしました。

#### (2) 西尾さんの会社の寮に身を寄せる

そのような日が続き個人の家にといたら危ないので興農合作社の西尾さんが「自分の会社の寮に入ったら」と勧めて下さったので、持てるだけの衣食を持って、引越しをしました。ある晩のこと、「今夜は、もう来ないでしょう」といいながら11時過ぎ、布団を敷いて寝始めたところ、廊下をコツコツとソ連兵の靴の音が聞こえて来ました。電灯を消し、乳飲み子をかかえた21歳の兄嫁と58歳の父・50歳の母だけが布団の上に座り、18歳の姉と14歳の私は布団の中にもぐっていました。ソ連兵は私共の部屋の前でピタリと止まり、ドアをあけるなり懐中電灯で部屋中を照らしながら「マダムダバイ(女の人を出しなさい)マダムダバイ」と叫びながら、一番若そうな兄嫁の腕をつかみ連れていこうとしました。その時、気丈な兄嫁は咄嗟に毛むくじゃらのソ連兵の腕にかみつ、父も母も兄嫁も「キャー」と大きな声を

出したので、布団の中にいた姉と私も、のどが痛くなるほどの大声で「キャー」と叫びました。

ソ連兵は、噛みつかれた痛さからか、あまりの大声にびっくりしたからなのか、血をポタポタたらしながら、部屋から出て行きました。そのような恐怖の日々が数日続いたので、私共の家族は寮から西尾宅に移りました。

### (3) 男の子のように変身する

西尾さんの息子さん（当時13歳）に姉と私は、バリカンで頭を丸坊主にしていただき、乳房をさらし布でしっかり巻き、中学生が着ていたオード色の学生服を着て、すっかり男の子に変身しました。それでも、ソ連兵は外にいる若い人を見つけると、いきなり胸を触り連れて行こうとしたのを、今でも鮮明に覚えています。

また、ある時は父が「ソ連兵が、こっちに歩いて来ている。妙子と量子は、すぐ天井裏に隠れなさい」というので、すぐ天井裏に隠れ、静かにしていました。ソ連兵がやって来ました。入口にいた父に、「マダムダバイ」と言ったので、「ニエトダ（いないよ）」と言うと、家の中にズカズカ上がり、見回して、どこかに隠したのではないかと、銃剣で天井や床を何回も何回も突き刺し始めました。いくら怖くても声を出したら見つかると思い、生きた心地もせず、じっと息を殺していました。ソ連兵は、いないとわかると腹立たし気に、そばにあった七輪を持ち上げ、父の頭を思

い切り叩きました。父は5分間ぐらい気を失って倒れていました。

そのような暮らしも危険なので、日本人居留民会から「フルハト河の河南地区の人は、終戦と同時にカラになった大きな刑務所に入りなさい。その方が、高い塀に囲まれているから安全です」とのこと。河南に住む多くの家族が、刑務所生活をする事になりました。

刑務所収容所での暮らしは、ソ連兵から身を守ることは出来ましたが、水を汲むにしても、トイレに行くにしても、大変なことでした。バケツに紐をくくりつけ井戸にたらし水汲み上げのですが、零下10度以下の延吉の冬ですから井戸の周りは、垂れた水が凍って口が狭くなっているのです。それを砕いてから始めるのです。又、井戸の周りはこぼれた水でビショビショ！それが凍って滑りやすくなり、井戸の中に落ちそうになります。命がけの水汲みです。食べ物、刑務所の入り口の両側に、朝鮮人や中国人が売りに来るので、持って来たお金で買うことが出来ました。そのような生活の中、刑務所内で虱による発疹チフスが流行し、多くの方が亡くなりました。

### (4) 父の死

父が、「12月23日は多分天皇誕生日だから、お祝いに餃子を作ってください」と言いました。母は刑務所の入り口に中国人や朝鮮人が食べ物を売りに来ていたので、わずかな豚肉と小麦粉を買い、餃子を

作って父に食べさせました。父は、おいしそうに食べ、母も喜んでいましたところ、父はお経を唱え始めました。30分以上お経をあげたと思います。急に、父の読経の声がとまりました。「お父さま、お疲れになったでしょう」と、父のそばに行った時、父の呼吸はもう止まっていました。

#### (5) 朝鮮人・教え子たちの好意

父母が朝鮮人子弟に読み書きを教えるための「敬愛学院」という学校を河南にたて、朝鮮人の先生・生徒たちと仲良くしていたので、その教え子たちが時々私共の様子を見に来てくれていたので、父の死を伝えるとすぐ、お棺と大八車を用意してくれました。父の冷たくなった体に、父が長い間信仰していた佛教のお袈裟を左肩から右わき下にかけて、延吉神社の裏の日本人共同墓地まで大八車で運びました。土はカチンカチンに凍っているので、お棺に雪をかけ、母と2人手をあわせました。不思議なことに涙一つ出ず、ただ黙々と刑務所にもどりました。

#### (6) 刑務所収容所から出る

昭和21(1946)年の春ごろになると、ソ連兵も街の中からいなくなり、治安もいくらか良くなってきたので、私たちは満洲電業の社宅にいた姉(春子)、姉の夫(加藤辰雄)と子供たち(軌政、乳児)のところで一緒に暮らすことになりました。

#### (7) 生活費を得るための商売

生活費を得るため、ポーミーパン(とうもろこしの粉で作ったパン)を焼いて売ったり、たばこの材料(たばこの葉・葉を巻く紙・出来たたばこを入れる袋)を満人市場から仕入れ、家族みんなで「古塔」というたばこを作り、姉と2人で机の引き出しに紐をつけ、肩からつるして売り歩きました。

そのころ、毛沢東が率いる中共軍と蔣介石が率いる国民軍との内戦があり、八路軍が延吉駅を通るとのことで、その兵士たちにたばこやポーミーパンを売るので、「ヤンジョール・ヤオ・プヤオ」(たばこはいりませんか)「ヤンジョール・ヤオ・プヤオ」と大きな声を出しながらホームから売ります。とっても良く売れて生きる喜びを感じました。

恥も外聞ありません。もと女学校の校長先生の奥様も、もと省庁の方も、みな必死で品物を売って、生活費をつくりました。また、暖かくなり雪も解けてきたので共同墓地の父のお棺を焼いてお骨にしようという話がもちあがりました。この時も、もと敬愛学院の朝鮮人の先生や生徒さんが大八車と薪など燃料を買ってきて下さったので、母と私と義兄の3人で共同墓地に行きました。12月には、カチンカチンだった土も5月には雪も解け、草が生え、冬の間になくなった方々のお棺がずらりと並んでいました。

さあ、これからが大変です。どのお棺が父のものか探さなければなりません。お

棺の上にそれぞれ名前を書いておいたのですが、半年間の間に名前は消えていました。大体覚えていた場所のお棺を開いてみましたところ、白骨化したなきがらに、あの時かけたお袈裟が胸にかけてありました。確かに父のなきがらとわかったので、薪を井桁に組み、その上にお棺をのせ、火を付けました。母と私で、お経を唱えながら燃える炎を胸が締め付けられる思いで見つめていました。こうして、父の遺骨は私たちのところに戻って来ました。

## 2. 延吉を出発して、日本へ

夏のはじめ、居留民会から、「日本に帰れる」という知らせがありました。

### (1) 延吉を出発

昭和 21 (1946) 年 8 月 1 日、いよいよ日本へ向かって出発です。母 (上領定子) と 1 歳の子供 (正代)、姉 (妙子)、私 (量子)・結婚した姉の家族 (加藤辰雄、姉の春子) と乳児 (軌政) で、大人 6 人と乳幼児 2 人の大世帯です。ありったけの紙幣を父のお骨箱の下を二重底にして入れたり、ねんねこの襟にお札を折って縫い込んだり、いろいろ智恵をしぼって日本紙幣・軍票・満洲紙幣等を隠しました。持ち物も、大きな鍋・米・味噌・塩等々、いつ着くやらわからない旅に、いろいろ考えながら大きなリュックサックや旅行カバン・大きなふろしきに入れ、若い人が持てるだけ持って出発しました。母と姉は、正代と軌政をおんぶしました。

さあ、出発です。延吉を出てから吉林、新京 (長春)、奉天を経てコロ島にむかい、そこから船で九州に渡るのです。吉林にむかう途中、「拉法」の駅まで来ての事です。

「ここから先の鉄橋が壊されていて、これ以上汽車は走れません。みなさん降りて下さい」とのこと。私たちは、やむなく汽車から降りて、駅前の広場で茫然としていたところ、リーダーが「皆さんは、ここから歩いて老爺嶺を越えて新站まで行き、そこから吉林に向かって下さい。大きい荷物と年寄りや子供は、お金を払ってあの馬車に乗って下さい」と言うので、私たちは母と乳児の甥・姪と重い荷物数個を荷車に載せ、代金を払ってから新站へと歩き始めました。どの位歩いたでしょう、急にパンパンと銃声が響くと同時に「荷物を降ろせ」「コウリャン畑へ逃げろ」「静かに」という声！馬車を引いていた中国人は「八路軍と中国軍との戦いだ」と叫んで、どこかに走って行ってしまいました。銃声もおさまったようなので、私たち延吉からの引揚者グループは、そろそろコウリャン畑から出て、また重い荷物を背負って、あとどのくらいで新站に着くかわからない道を黙々と、老爺嶺を越え新站にむかって歩きました。私はまだ 15 歳ですから重い荷物を背負っても元気でしたが、母や姉は乳児をおんぶしての山越えですから、背中汗びっしょり、飲む水もなく大変でした。お年寄りや病人をかかえた家族の方は、本当に

その苦勞は筆舌につくせません。やっと新站着いたのは夕方でした。そこからは、材木などを運ぶ貨物車(台車)で吉林まで行くのです。くたくたに疲れた体ですが、はやく日本に帰りたい一心で、皆はその台車のまわりに大きなリュックサックなど並べ、ひもでくくり、その中に延吉から来た人たちが座って、いつ走るかわからない台車の上で寝てしまいました。どの位走ったかわかりませんでしたが、目が覚めたら夜8時頃、吉林に到着していました。

## (2) 吉林收容所

吉林の收容所は石炭置き場でした。そこは、数百人の日本人が満洲各地から集まっていました。9月とは言え、夜はとても寒いのです。乳幼児には綿の入った亀の子(簡単なねんねこのようなもの)をかぶせて寝ましたが、大人たちは着の身着のまま寝ました。食べ物中国人が売りに来るコウリャンや水でお粥をたき、持って来た塩・味噌などを入れて食べました。これから先、いつ日本に着くかわからないので持って来たお金・味噌など大事に大事に使いました。半月あまりの吉林收容所生活も終わり、やっと次の目的地・新京(長春)に行かれる順番がやって来ました。新京(長春)へ向かう列車も貨物列車でした。

## (3) 新京(長春)と錦州にて

新京(長春)での生活は、終戦と同時に

破壊された日本人官舎で赤レンガ造りの建物でした。窓も畳もない家でしたが、吉林の石炭置場よりましでした。食事は1日に一度。新京(長春)居留民会の日本人が、各地から来た引揚者たちに食事を出して下さいました。そのありがたかったことは、今でも忘れられません。新京(長春)に数日間滞在したあと、いよいよ奉天(瀋陽)を経て日本に帰れるのです。しかし、やっと台車(材木運搬用の台だけの貨車)に乗ったものの、数キロ走っては止まり、数キロ走っては止まるといった走り方です。こんな走り方では、いつ日本に帰りつくかわかりません。ある時、2時間以上たっても列車を出してくれないので誰となく「運転手にお金をあげれば動かしてくれるのではないか」ということになり、代表者が皆からお金・時計・指輪など集めて運転手に渡したところ、列車は南に向かって走るのです。このようなことを3回ほど繰り返し、やっと錦州に着いて列車から降ろされました。

錦州の收容所は広く、コロ島行きの順番を待つ日本人でいっぱいでした。周囲は鉄条網が張り巡らされ、私たちは一歩も外に出ることが出来ません。その外側に中国人がいろいろな食べ物を売りに来ます。母と私は、そこでビーフンと野菜の炒め物を買ひ、皆で分け合って食べました。大ご馳走でした。そのおいしかったこと！いつもはコウリャンのおかゆでしたので。あちこちに隠し持ってきた大事なお金も日本には持って帰れないというこ

となので、ここで少しずつ使っていきました。10月の末は満洲ではもう冬です。ここでの半月余りの収容所生活の中で、日本を目前にしながら栄養失調や発疹チフスや寒さ、そして3カ月あまりの長い旅の疲れでお年寄り・乳幼児は次々と亡くなっていきました。私共は生き抜く知恵を持つ賢い母(定子)と体力のある姉の夫(辰雄さん)を中心に家族いたわりあい、励ましあいながら何とか乗り切ることが出来たことは幸いでした。

#### (4) コロ島で引揚げ船に乗る

いよいよコロ島に行く日が来ました。

コロ島まで、どうやって行ったか記憶にありませんが、コロ島には3日間位いたと思います。いろいろな手続きのため慌ただしく、中国人とアメリカ人が、その世話をして下さいました。日本に持ち帰れるお金は1人千円(日本円)でした。

いよいよ乗船です。乗船の前に長い行列を作ってひとりひとり頭から背中・腹・足・腰にいたるまでDDT(消毒の白い粉)を噴霧器で吹きつけられ、みんな真っ白なお化けのような姿になりました。日本に帰りたい一心で笑う人は1人もいません。船は摂津丸という赤十字の病院船を改造したものでした。船底に班ごと入れられ、コウリャンや乾パンの食事を与えられました。その乾パンは割ってみると、中に白いウジがわいているのもありましたがウジは捨てて残りを食べました。そのカンパンも1人何個と決まっているの

で捨てられません。船中でもなくなった方が数人いらっしゃいました。日本を目前にして、ご遺体は船尾から水葬されました。さぞ無念だったことと思います。

船は、緑の美しい沢山の小島の間を縫うようにして進み、やっと佐世保港が目前に見えて来ました。やっと日本に戻れたという喜びで胸が高鳴りました。ところが、その喜びは船員のメガホンの声に消えました。「この船内に流行性の患者がいるから、しばらく上陸は出来ません。それぞれもとの場所に戻りなさい」。私たちは従うよりほかありません。そこで、佐世保を目前にしながら乾パンとコウリャンを食べて上陸許可を待ちました。

#### (5) 日本に帰れた

2週間目に、やっと上陸許可がおりました。佐世保に着いて一番はじめに食べたのがさつま芋入りのごはんと昆布のつくだ煮でした。私はおいしくておいしくて配られただけでは物足りない位でしたが、もともと胃が弱かった姉は食べてすぐ胃けいれんを起こして苦しみました。一晩苦しみましたが、痛み止めの注射をしてもらい、私たち東京組は品川にむかいました。あらかじめ、電報を打っておいたので、復員していた兄(頼正)や兄嫁(千代)の兄(繁さん)が品川駅まで梅干しの入った白米のおにぎり・とろとろ昆布で包まれた塩味のおにぎりを持って迎えに来てくれました。その頃の日本は食糧難だったので、これだけ用意するのは大変だった

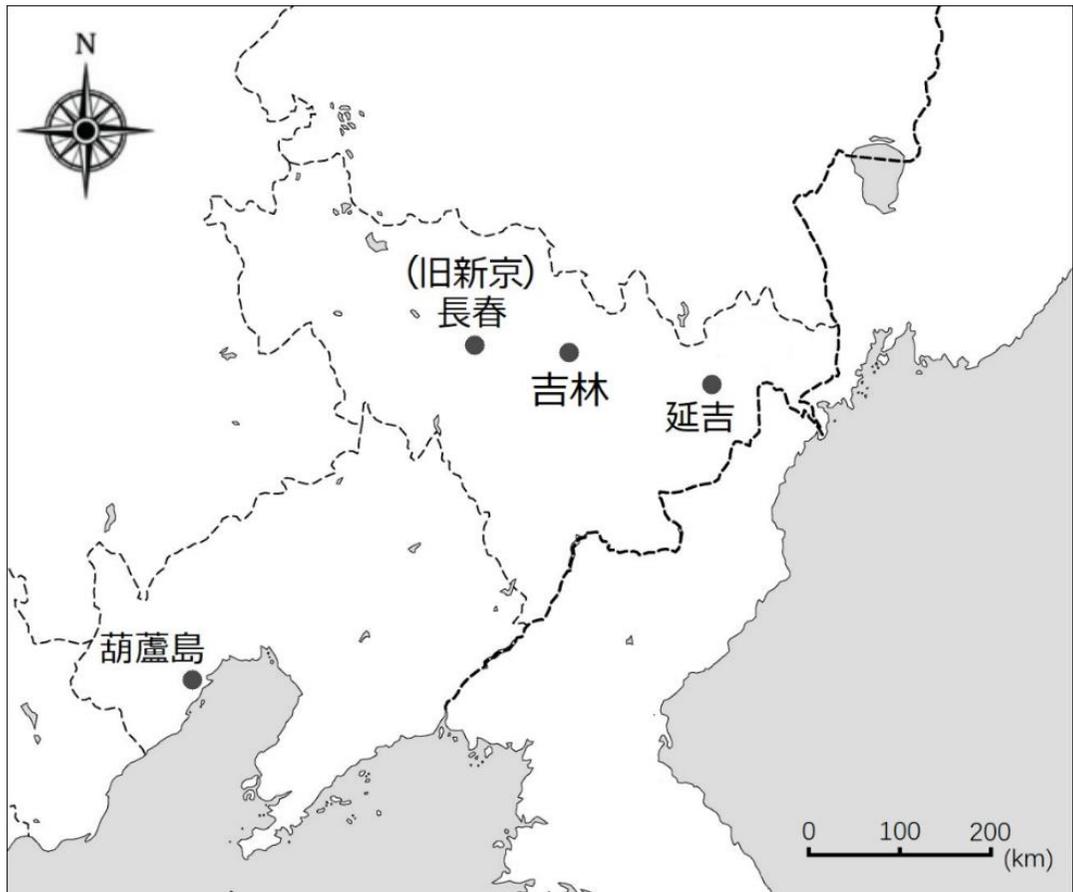
たと思うのですが、そんな苦労もわからず兄たちに会えた感激と日本の味「おにぎり」を食べたおいしさ、嬉しさに涙だらけでした。感謝・感謝です。本当に日本に帰ることが出来たのだと、あらためて実感したひと時でした。

終戦（敗戦）の8月15日から、日本に帰国できた翌年の11月4日までの1年4ヶ月、恐怖・苦労の毎日でした。しかし、

それも家族一緒だったから何とか乗り切れたのだと思います。途中で力尽きて亡くなった方、やむを得ず中国人に乳児・幼児を託された方、お国のためと思って義勇隊に志願して入隊し路傍で命尽きた方々のお心は、いかばかりかと察しつつ、ペンを置きます。

2018年8月

東郷 量子



中国東北部の地図 （作成者：大野絢也）

# 遊牧の雑草

執筆：甲賀綏一、甲賀あや

解題：甲賀真広

編集：甲賀真広、森巧、梅村卓、大野太幹

## 解題

「遊牧の雑草」は、甲賀綏一（やすかず）、綾子夫婦によって書かれた手記であり、結婚 50 周年を記念して 1964 年に作られたものである。当該手記には、2 人のアメリカ、満洲への移住や引揚げ後の生活などが綴られている。本解題では、本手記の内容を概観した上、その史料価値を簡単に紹介する<sup>(1)</sup>。

### 1 概要

「遊牧の雑草」は、金婚式を記念して、甲賀綏一、綾子夫婦によって 1964 年に書かれたものである。手記は全部で 22 頁（1～6 頁を綏一、7～22 頁を綾子）、約 2 万 5000 字から構成されており、B5 版で製本されている。付記の「金婚式の年にあたって、無理に頼み書いて貰った」からもわかるように、作製に至った背景には七男春明の頼みがあったという。実際どれほどの部数が作製され、その費用がどうであ

ったのか、さらに誰に配布したのかについては不明であるが、おそらく親族や友人に配布するために作製されたものであると考えられる。

なお、筆者が所有している手記は、五男和彦（筆者の祖父）より譲り受けたもので、和彦の他界（2018 年 3 月）を受け、遺品整理をしている際に見つけたものである。

#### (1) 執筆者の略歴

ここではまず執筆者 2 人の略歴を紹介する。

甲賀綏一は 1886 年 2 月に千葉県君津郡秋元村市宿（現在、君津市）にて生まれた。大成中学で学んだ後、1905 年にアメリカへ渡り、サンフランシスコ市ヘイト街基督教青年会に入会し、これを契機にキリスト教の牧師になるという道を選んだ。1916 年にサンフランシスコのサンセルモ神学校に入学、1919 年に卒業、南カリフ

オルニア州ランポーク日本人教会に赴任した。その後いくつかの町で牧師を経験したが、アメリカで起こった日本人に対する排斥運動を受け、1925年に日本へ帰国することとなった。日本に帰国し数ヶ月後には、満洲の安東へと移住した。安東教会の赴任は日本基督教会の総主事をしてきた小林誠牧師による紹介だったようである。安東では牧師の他に、安東中学校と安東高等女学校で英語教師としても勤めていた。敗戦から1946年9月の引揚げまでの間にも、満洲各地から引揚げのために集まった日本人のキリスト教信者と共に、自宅である牧師館の2階で礼拝を行っていたという。引揚げ後には保田教会(千葉県保田町)に赴任し、また石川四郎牧師の薦めで1951年から1961年まで高岡教会(富山県高岡市)でつとめていた。そして、1967年2月に他界した。

綾子は、1896年に千葉県木更津で生まれ、本名は(戸籍上)あやである。綾子の父は医者であり、キリスト教徒でもあった。そのため、幼い頃から信仰を守るよう育てられていた。綾子が女学校を卒業してから1年後、木更津教会の宮田熊治牧師の紹介で綏一と結婚した。当時、綏一はアメリカにいたが、1915年にサンフランシスコで「パナマ大博覧会(サンフランシスコ大博覧会)」が開かれることになり、日本との連絡や準備のために一時帰国をしていた。挙式は1914年7月29日、木更津教会で執り行われた。結婚後に綾子も渡米し、そこでは7人の子供を出産し

た。また、1925年に満洲へ渡ってから、5人の子供を出産している。綾子の仕事に関する記述がなく、専業主婦として家事や育児を中心に行っていたと考えられる。引揚げ後には、保田教会、高岡教会にも連れ添い、晩年には綏一とともに武蔵野教会(東京都豊島区)の礼拝に参加していたという。

## (2) 内容

本手記は、大きく「日本の生活」、「アメリカの生活」、「満洲の生活」、「引揚げ後の生活」の4部から構成されている。「日本の生活」では、それぞれが両親からどのようなことを教えられたかや、渡米の背景などを中心に書かれている。「アメリカの生活」では、綏一の学生時代の思い出や、アメリカ各地を伝道していたことが記されている。「満洲の生活」では安東教会での牧師生活や、その傍らで安東中学校と安東高等女学校で英語教師としても勤めていたことが書かれている。「引揚げ後の生活」では、米軍航空基地の高野組の通訳として働いたこと、保田教会や高岡教会で牧師として赴任したことが回顧されている。

ここでは、筆者の関心である「満洲の生活」に着目して、その内容をもう少しみて見る。綾子は、「満洲の生活」の中で子ども一人一人の状況に即して回想している。例えば、「クリスマスも近くなると、さすがに寒さは厳しく、ペチカに朝晩石炭をたいても二重ガラスは氷りつき、外は全

くみえなかった。人の出入りが多いと温度が下り、満洲の気候になれぬ為、満里子は前年(大正十五年)五月に生れていたのだが、遂に風邪をひき、手当てをしたがとうとう肺炎になり、小さくて抵抗力のない為か、それまで一度も病気をしなかったのに、わずか8ヶ月で又も惜しい生命を亡くしてしまい、かわいそうな事をした」と回顧し、家族でキャンプに行ったことについては「正典、純男は中学時代、隣の老岐一郎君や、緒方君等と朝鮮の白馬にキャンプに行った。テントは正典がミシンをかけて造り、食料を持って出かけ、二、三泊した。その間にパパは小さい子供を連れて訪づれ白馬川で皆で泳いだりした」と語っている。また、敗戦後のことについては「恵美子、暁子も看護婦に出される恐れがあったが、中共の女官で中共に協力して翻訳の仕事をしていると云う証明の為、のがれる事が出来た」と回想している。綾子の記述からは、一日本人家族の安東生活ばかりでなく、牧師の妻としての視点や、1人の母親として時々の思い出や苦悩が窺い知れる。

## 2 史料的价值

最後に本手記の史料的价值について簡単に述べる。

本手記は、日本、アメリカ、満洲で生活を経験した綏一とその妻綾子によって書かれたものであり、満洲研究や移民研究、キリスト教史研究にとっても一手がかりになりうる史料である。そして本手記の

一番の特徴は、2人の視点から回想していることにある。それぞれの記述を比較してわかる通り、同じような生活をしていても、視線や内容は大きく異なる。本手記において、綾子の妻として、母親としての目線から多く書かれている点が特に興味深い。従来、満洲体験や戦災の記憶は男性目線で語られることが多い。本手記のように、女性としての視点が加わることで、当時の生活の様子がより多様に浮かびあがる。また、2人(あるいは甲賀家)にまつわる関連史料は他にもいくつかある<sup>(2)</sup>。これらの史料を相互対照することで、当時の状況をさらに分析できるばかりでなく、家族の記憶継承などについても分析することできよう。これらを今後の課題とする。

(1) 本稿の詳細な内容については甲賀真広「ある牧師の国際移動と教会ネットワーク——アメリカ・満洲・日本」佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2020年を参照されたい。

(2) 手記には甲賀綾子『遍歴』私家版、1952年や甲賀純男『日系同胞10年の旅路』キリスト出版社、2001年、綾子の兄の手記、牧野正路『私の生い立ち』私家版、1987年などがある。他にも、引揚者団体である安東会が発行する『ありなれ』にも掲載されている。石川光子「丹東(旧安東)を訪ねて」『ありなれ』41号、1977年。甲賀綾子「近況あれこれ」『ありなれ』22号、1978年。甲賀恵美子「中国丹東を訪ねて」『ありなれ』41号、1977年。甲賀和彦「父甲賀綏一と安東教

会』『ありなれ』55号、2011年。甲賀和彦「純男兄の思い出」『ありなれ』49号、2005年。甲賀和彦「五十年ぶりの丹東訪問旅行」『ありなれ』41号、1997年。甲賀ジェームズ「神様の世話」『ありなれ』41号、1997年。甲賀純男「子供に

なって旅を楽しむ」『ありなれ』41号、1997年。甲賀ドーラス美代子「中国丹東を訪ねて」『ありなれ』41号、1997年。甲賀正彦「1996年9月8人の中国の旅」『ありなれ』41号、1997年。

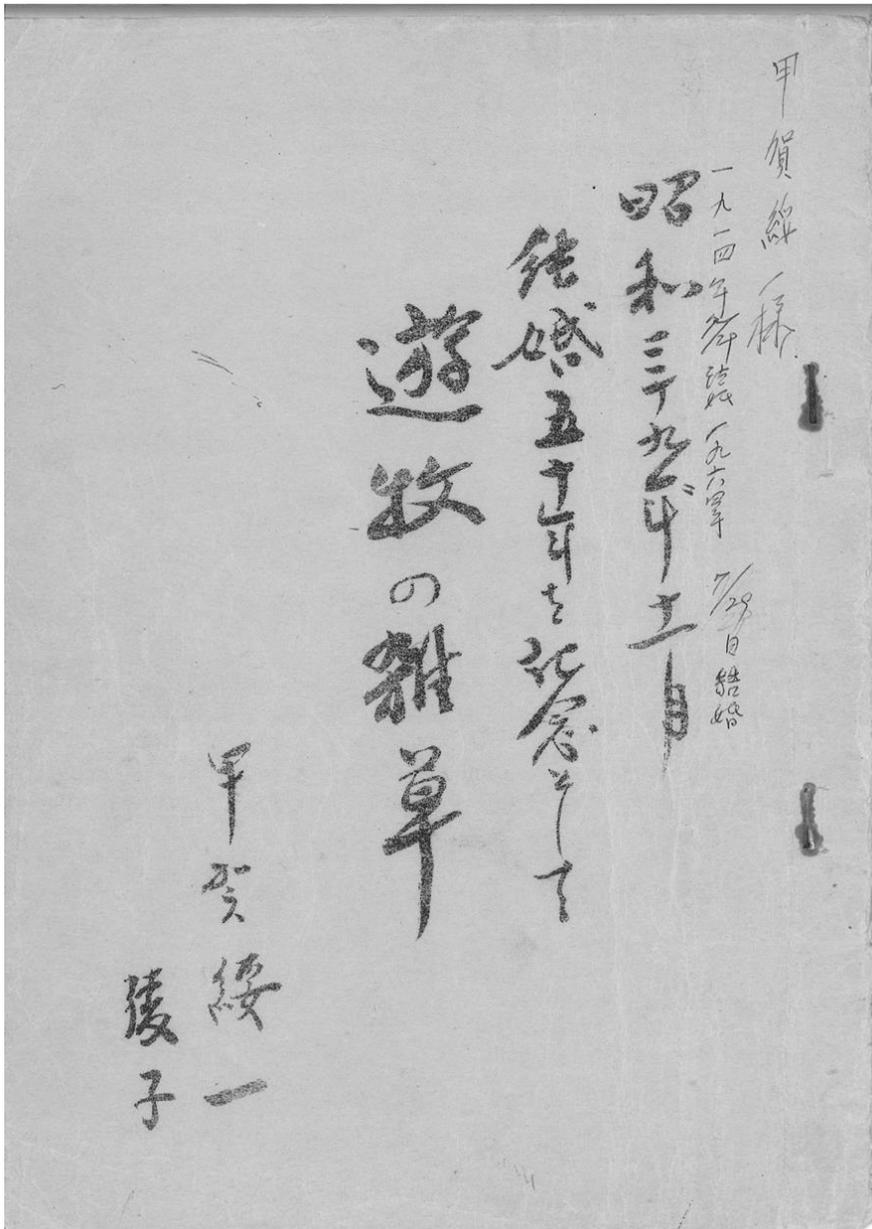


図1 「遊牧の雑草」表紙



▲ 甲賀ファミリー（安東時代最後の全員写真）1934年（S9年）

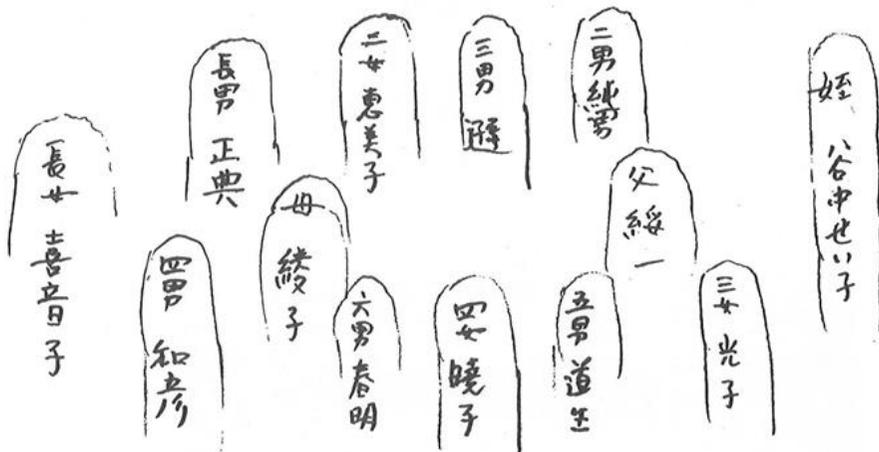


図2 家族写真（『ありなれ』49号、115頁より）

## 本文

### 凡例

- ・旧字体や異体字、略字、旧かな使い等は、史料の性質を考え原文のまま掲載した。
- ・誤字と思われる箇所はそのまま掲載し、句読点、空白、改行は適宜記入した。
- ・各史料名は編集者によってタイトルを付した。

### 甲賀綏一の手記

金婚の年を迎えて こしかたの 山坂  
多き道も みめぐみ

七十八年分の生涯を省みると、あれやこれやと在りし月をよび起しては、短いようで又長くもあったと思えるが、忘れっぽい自分でも自分の事は自分より知らないで神の恩寵の中に抱かれ、今日ある自分の有難き感謝の思いを何らなす事のなかった生涯だったが、回顧の一端として極めて断片的で取り止めもない事柄であるが、記憶をたどってちび筆の跡をのこして恥の事がきにする。

明治十九年と云えば基督教が日本に伝えられて最も隆盛になり、この分なら全国は間もなく福音化されるのではないかと、基督者の意気こんだ年であった春二月に千葉県鹿野山裏の麓、市宿に生を享けた。母親は浄土宗から禊協に改宗し、上名柄の道に信仰を高め、熱心になり、健康を増進し、婦人伝道師となり、八十二才で

死去するまでに二千人の信者を導いたと云われた。四十二才の時に末子として自分が生まれた。修養会があれば何時も膝に抱かれながら、「おほらい」を聞かされた。父は六十二才で、私の九才の時に死んだ。父の記憶は、殆どないが死の数日前、遊びに夢中になっている私を呼んで、「綏一足をさすれ、お前は年より子だが、あまえないで母のいいつけを守り、しっかり勉強して安心させよ。」といわれたことだけが、記憶にあるのと、葬儀の時、当時のハイカラ婦人の姉が私のため毛糸で色のついた服を編んで着せられたのはつっぽうばかり着ている子供らの中で、はずかしくて着るのがいやでたまらなかった事だけ覚えている。商売の関係で幼時時代、東京に同伴されて、行った時、只一つ覚えている事は、四五才の頃、婆やに連れられて、両国橋の上から川蒸気船の航行するのを見たのが忘れられない。東京には汽

車もないので、東京湾を会社の小さい汽船が交通機関であった。小学校四年の時に始めて、オルガンが置かれ、水野先生が口をとがらせて。何かうたったことと、何かのはずみで、三人の友人と学校に行かずに弁当を腰にして、鹿野山に遊んで、母にこっぴどく叱られたことは忘れられない。高等二年を卒えて、田舎では始めて親戚の世話で神田の大成中に学んだ。叔父の家から通学した当時、明治三十二年の頃は電気もなく鉄道馬車が銀座を走っていて、丸の内は三菱原で狸が出ると云われたものだ。一九〇五年隣家の星野乙一郎氏が米国で医学を修め、横濱で検疫官をしている事に励まされ、渡米したく六十二才の母に希望を話したら承諾したので、十九才業を終えると、渡米の支度をした。尤も日露間の国交の緊迫もあり、徴兵される恐れもあったので、母も賛成してくれたふしもある。同航青年二十余名で「ドウリック号」六千トンで三週間もかかって、希哇經由桑港市向った。航海中、日露国交断絶して、黄海にて、日本の勝利を知り、船中祝会で、賑わった。二月下旬、ヘート街基督教青年会に同航の荻野と落ちついた。漠然と英語もわからない向う見ずの青年を青年会は極めて懇切に指導してくれた。会長のストウジ博士は長老教会の総理で、青年を愛し、身を以って福音を実証しつつ、聖書研究、英語教授に力を致してくれた。博士の人格的感化に由り、幾多の青年が、社会に又宗教家として世に送られている。自分も誘惑の多い、米

国では基督教信仰こそ能力であるのを知り、禊協からはなれてはならんと固く誠められたのを捨て、一九〇六年九月に現にハワイ、マウイ島で伝道している渡辺玉作君と受洗した。親の許をはなれ、自活しつつ、勉学せねばならぬので、今日で云うアルバイトに相当の苦勞もして、グランマスクール、ハイスクール、カレッジコースと順調に進み、夏季には休暇を利用して、農園の果実採集に年毎に行った。また夏休みを利用して、国吉君と国立公園ヨセミテ—溪谷に、自転車二百五十マイルを走り、三週間山中テントをしながら観光した事は生涯忘れ得ない事であった。特に四千呎のヨセミテ滝の落下のとどろき、一万数千呎のクラウドレストの山頂に立った爽快さは天下を取った心地でした。青年会での思い出は学生奨励会を組織して、青年会から援助を求めたり、クリスマスには青年会の特色行事のシエクスピヤ劇を毎年上演しては、日本人に称賛された。主役は医学校に通学していた檜原であった。一九〇七年に旅順口が陥落してまもなく、日本が勝利に終わった時には、桑港の町を活歩したもので、日本人である誇りをしみじみと味わった。前掲の渡辺君が、青年会の主事を辞し、神学校に学ぶことになったので、ストウジ博士の命により、後任として、主事に就任した。一九一〇年、桑港大震災には会館の下まで焼けたが、無事のため救済に役立ったのを覚えてる。教会としては、執事、長老となって、渡辺徹、寺沢宮崎何九

も、小平氏等と教会運営に当たり、青年会としては苦学生年のオアシスとして、渡米する青年や留学生の世話ができて喜ばれ、楽しい働きであった。一九一五年パナマ大博覧会が桑港に開催されるので、日本との連絡や、その他の準備もあるので、渡米十年で祖国を訪問のため、帰国した。日本の著しい進展におどろいた。

郷里迄既に汽車も通じていた。在任中、日本国威の発揚と共に、間もなく労働党が先棒となって米国日本人の排斥運動が盛んになり、公立学校より日本人入学拒否、布哇より渡航者禁止、農業への圧迫、等々さまざまの排斥運動が加州全面に広がった。新日米人は心を痛め、其の誤解を正すため教会に訴えた。ストウージ博士らは労働者の避難もものともせず、敢然彼等に抗して講演会を諸所に開いて日本人を援護した。自分も博士のお伴をして、先棒をかざしたものだ。帰国の際には母を始め、肉親友人らに歓迎されて故郷入りした時は嬉しかった。母は帰京する前結婚する様すゝめるので、自分もそれに従い、相手が基督者ならばと条件つけて承諾した。いろ／＼と世話する方もあったが、木更津教会宮田牧師の媒介で現在の妻綾子と一九一四年七月二十九日、忘れもしない酷熱の日、教会で宮田牧師の司式で挙式した。両親姉兄は木更津教会の有力な信者である。十一月には滞在期間も切れるので友人、国吉夫人と後より渡米する事にして、寂しく単身帰米した。翌年は大博覧会で寧日もなく、会務に迫

われた。春になって綾子が渡航して来たので、喜び迎えて青年会の仕事を理解してくれて労苦を分けあった。

長男が大正天皇即位の日一九一五年十一月一日に生まれたので正典と命名した。青年会の主事も意義がるが、直接伝道したい欲望も出たので、ストウージ博士に話すで大賛成で、家内も同意してくれたので主事を辞し、翌年、桑港長老派神学校に入学した。家族をかかえての勉学は相当無理もあったが、必要物資は与えられ、三年間、米人学生の中に借家して二回夏期伝道のためウォナッツ・グローブ、ハンフォードに赴いた。在学中に次男が生まれた。同級生が御前の後継者にせよと祈ってくれた。幸い意、純男はシカゴ市長老派マッコミック神学校を卒え、目下、私が五年間伝道したワッソンヴィル教会牧師として三人の子供を与えられ伝道している。

神学校生活はまことに楽しかった。校長ランドン博士は日本人学生を愛された。理由の一つとして、云われた事は日本人は卒業して凡てが一貫して伝道者として働いてるので学校の誇りだと朝鮮併合後の日本政策が宣教師に対して好感を持たず、むしろ圧迫したので、事の真偽を交えて学校で報告講演する時には、常に日本の立場を正解して吾らの同情者であった。一九一九年春、卒業すると間もなく、桑港中会で按手札を領じ、教職につき。直にランボウク市日本人教会に赴任した。同教会は白人長老教会牧師マッケーン氏が日

本人の伝道のため教会員を動かし、及川牧師を迎えて始めたが、数年にして同氏が辞任して帰国したので後任として赴き、一年の跡には、より多数の同胞の居るガタルーペ市の開拓伝道に転じたが、仏教の本陣で、伝道には苦勞多くして、三男を失い、悲しい経験をしたが、たまたま沿岸での有力なワッソンヴィル教会に招かれて、赴任した。

同級の伊藤君はロスアンゼルス近くのロングビーチ教会に招かれ、鈴木君は帰国して中学校の英語教師をしたが兩人とも故人となった。五年間楽しく伝道し、会堂の増築、ボーイスカウトの編成、自動車を購入しては、近郊市サリナス、モントレイ両教会と相提携して教勢の進展を計った。モントレイ教会小北牧師と小崎道雄氏の帰国を前に風光明媚の十七哩ドライブやアシロマに於ける長老派の大会等は楽しい思い出であった。

此の間大人の子供を与えられ、米国に骨を埋める覚悟であったが、二世以降の民族的発展を思うと、日本人としての誇りを背景とせねば、自然消滅の恐れあるを知り、子供らを日本にて教育してせしむるにしかずと考え、同労者のはんたいにもかかわらず、長男次男小学校四年と三年を頭に、四人をつれて、一九二四年八月、二十年の米国生活を後にして感無量の中に春洋丸の二等室、家財道具一斉と共に乗船して、桑港灣を最後と、地平線上に消えるまで見つめて別れを惜しみ途中ハワイを見物して二週間にして横浜に着

いた。大震災に傷ついた悲惨な姿におどろいたが、暖い肉親多数に迎えられ、郷里、市宿に落ちついた。

「綏一が帰国したら信者になる」と待っていてくれた母は一年前に世を去っていたのは寂しかった。九月になって、木更津市の牧野両親が準備して下さった海岸近くの借家に移り住んで、長男、次男を小学校に入学させた。十一月になって当時日本基督教会総主事、小林誠君が同窓の故をもって、先輩として、徳島、外、二三伝道地を推薦してくれたが、植民地気風が米国大陸と相似たる点のある満洲国安東市の安東教会の招へいを受けて一九二四年十一月多数の会員に迎えられ、大人の子供と落ちついた。牧師館も整っていて住心地もよく会堂は木造建で、会員は六十余名で在留同胞は一万余人で悉く日露戦争後の移住者であった。周囲には女学校、小学校二、三寺院もあって文化の中心でもあった。

満洲は日本基督教会と組合教会とが主な伝道戦線をはって居た。大連には先輩三吉牧師、奉天には山口牧師等があつて、協力して福音宣教に励んだ。此の間、恩師ストウジ博士の再度日本訪問を迎えて、新義州で講演会を開催した。博士は多年日本青年の指導と、日米親善に尽力した理由で、勲五等旭日章と日本教育会の終身名誉会員にせられた。又満洲事変には軍部の策謀の故を知ると、痛心事であった。捕虜の多くは悲惨な私刑で殺された。伝道も順調に進展し、会堂の増築もし、S・

Sの生活も七、八十名にもなった。傍中学校と女学校の英語教師を多年、勤めたので、多くの便宜も与えられ、子供四人をも与えられ、長男次男は中学校生活と同時に相次いで渡米させ、長男は大学を卒えると電気技師として現にシカゴ市に、次男は前掲の如く伝道師としてわたしの勤めた教会に牧会伝道している。大東亜戦争と共に親米家と目され、中学校を辞するに至ったが米国を知っている私が日頃考えている如く敗戦の結果となったのは悲しかった。昭和二十年終戦となり、昨日に代ってあわれな多数の難民が安東を目ざして引揚げて来るのを有志と協力して二十一年九月に帰国するまで世話をして帰らせたが、同胞全部が荷物を手放して生活するみじめさであった。大切な書物全部も売却するも止むなきに至った。ソ連軍が進駐した時には、日本人の工場の機械、個人の目ぼしい家財道具は殆んど没収して本国に輸送した。過日救済事務所に三人と居ると、ソ連の中尉三人が酒気を帯びて這入りこみ、ピストルを一人一人の胸にあてて、金と女を出せと驚かした。周囲の婦女子は恐れて姿をかくした。若い中尉が私の胸にピストルを押しあてていたが、旅の苦労や故郷の母の事を英語で同情を以って話していたら、パさん悪かったと銃をおさめた。愛と同情をもって接すれば習慣のちがったあれくれの軍人も心をやわらげると教えられた。菓子、南京豆、ビールをたらふく飲食し、そくばくの金を手にして帰ったの

で、一同ほっとした事もあった。人民解放隊を組織した日本共産党員がやって来て、順次帰国の手を打ってくれたので、二十一年九月一人五阡円の船賃を出して、持金一人壹阡円の制限で聖書一卷と、僅かな着替えと、自分の食料をリックに各自背負うて鴨緑江をジャンク船で一行五百三十人と共に仁川に向って出航した。

之らの諸費用は中共軍に勤務の関係で、一年間残留した三男遜の調達であった。百トン足らずの船におしずめ、身動きもできできない窮屈さであった。汽船なら一日の航行で足りるのに風がなければ二日も三日も動けないジャンクの事だから十一日も要したので食料の欠乏をきたして、危険な窮状に陥った。漸く仁川港外に着いたが、海が浅いので入港できず、小舟で迎えて貰わねばならぬので、交渉のため鮮、支、英語のできる三人の中の一人におされて、ボートで出発したが、波高きため、航行不能のため引き返した処、幸い鮮人の小汽船の航行を見つけ懇願して、乗船させてもらい、仁川港の警備隊に行き、事情を話して、依頼した処、「時間外だから明日にせよ。」と鮮兵の拒否にあったが、米兵の上官に窮状を訴えたら「よし上陸用の舟艇を出せ」と四主人の兵隊に命じてくれて、直に出航して、女子供が第一だと、一人一人をかゝえて浅橋に押しあげてくれた事は、ソ連兵に苦しめられて来た一同には余りにも異なった扱いに、おどろいたことであった。空腹には、温かいうどんの夕食で大満悦で、生きかえった

と感謝していた。其夜のうちに、貨車で、京城に送られ、南山中腹の西本願寺に二キロばかりの市街をリュック背負った難民の姿は敗戦のみじめさを知らない日本人の痛ましさをたどりついた。時計のくさりや、帯などを鮮人に売って、焼きいもを買って食した時のうまさは忘れられない。収容所に入って安心したのか、急に病人も出来、多数の死者も出た。一週間検疫の後、貨車で釜山に送られ、「大隅丸」にて博多に上陸したのが十月二十七日であった。得も云われない安堵の思いに充たされた。

二日の後引揚者に乗って、一路東京に向った。広島、神戸と打ちのめされた敗戦の後を見て、感無量であった。郷里市宿の生家に温かく迎えられた。内地の教会の多くは戦災で焼失したので、引揚牧師を迎えてくれる空きもないので、生活のため、一ヶ月後、木更津市に移り、井上某の推薦で、米軍航空基地の高野組の通訳となり、主として、各地に墜落した飛行機の収集に米兵と共に艀艦に乗船して東京湾より遠くは伊勢湾、名古屋、三河、鳥羽と数ヶ月に亘って愉快的航海でした。伊勢神宮にも米兵をつれて参詣したが、昔とは打って変わって日本人は観光気分で俗歌を口ずさみ、そびゆる樹木の評価をしながら散歩する姿は勝利に導いてくれなかった日本の神様に対する腹いせの様子も見えた。船中生活も一段落ついたので木更津に帰り、伝道の手伝いもしたが保田教会より招かれたので三年にして辞し

て鋸山麓の同教会に一家を挙げて赴任した。此の間四女暎子は東洋英和保育短大に学んだ。東京教区に訴えて、館山に開拓伝道を開始し竹岡教会の兼牧をもして数年を経過してる時に、石川巡回牧師のすゝめで北陸の高岡教会に昭和二十六年十二月に赴任した。有力な若い牧師が教会所属保育園の園長と何かにつけて折り合いがつかず、苦盃をなめて辞任せざる得ない問題のある教会故、年配の私が何とかできるだろうとの配慮もあつたらしく着高の夜、長老三人が口をそろえて教会伝道の癌である保育園の問題を陰々に改善してくれとの話にはいささか面くらった。日を経るにつれて事情も理解し、見当もついたので、氷見、出町、新湊、伏木の伝道の傍ら五年がかりで、漸く解決ができ保育園は実質的に教会直属となった。高岡教会在任九年数ヶ月七十五才の老齢で寒い北陸に長くおくに忍びないとの子供らの意見と在米の二人が相次いで、六年前帰国の時に応援してくれて求めであった現在の土地に信仰の友興利工業の会社梶元成氏夫妻の力ぞえで、小さい住宅を建ててくれたので、幸い、武蔵野教会熊野先生夫妻が同教会副牧師斎藤昭夫氏を私の後任に推薦して下さったので、後事を委ねて三十六年一月隠退して、六男春明と現住所に移り住んだ。顧みるに海外生活四十一年、教会伝道五十余年の間基督者として導き入れた兄弟は姉妹の数は母が禊教に導いた二千人の半数にも足らなく、多くの躓きも与え、豪慢不遜主の御

心を痛めし事も数えることも出来ない。徒に聖名を穢す生涯であったにもかかわらず、今日まで必要あるものを与えられ、十人の子供らも信仰の中にありて基督者として各自許されている持場にて、家庭生活を営んでいてくれる事は云い知れな

い感謝である。主の恩寵と信仰にありて交わる多くの兄妹姉妹たちの祈りの賜と衷心より感謝するものであります。

むつみあい、五十路の坂を越えぬれば、天国の空は金色のごと（やすかず）。

## 甲賀あやの手記

オリンピックを初めてアジアの日本で開催する事になり待ちに待っていたが、今や最高潮に達し、手に汗を握る場面が展開されているが世界の若人の厳しい訓練を経て、優勝をめざしての熱戦ぶりに驚嘆するばかりである。毎日テレビを見ても胸のすく思いがする。

此年丁度結婚して五十年。顧みて今までさゝえられて来たことは、神の深い御恵みと長い旅路の中に、数多くの温かい人の力添えがあったればこそと、感謝の思いで一杯である。私は明治二十九年木更津で生れ、父は医者をして居り、兄一人姉二人、自分と弟の五人兄弟であった。父は明治十九年キリスト教に入信して洗礼を受け、七十八才死する迄、信仰一路邁進して、其頃、異端者扱いされて随分苦勞したようであった。が、少しも妥協する事もなく、キリストの僕たる事を、最上の光榮として、この世の名誉や富に目を向けず、子供の教育にも神第一と、与えられた身体も大切にして神の御用に、仿られる様、教えてくれた。母は口数の少な

い人目には余り目立たない地味な性質で、よく父に仕へ、子供にもぜい沢な事はさせず、細かい注意はよく教え、どんな忙しい時にも一人聖書を読み、祈っていた。父が重病の患者があり、呼ばれて行った後は、必らず二階の静かな部屋で、熱心に祈りをさゝげていた事が、思い出される。

小学校六年生の儂、明治学院を卒業して、すぐ、奥様を同伴して宮田熊治先生が、木更津教会に来られて、日旺学校から、結婚して、米国に行くまで、お世話になった。十六才の時。石原傳太郎先生が、応援伝道に来られた折、先生から受洗した。女学校を卒業して、一年後に、宮田先生の司式で木更津教会で千九百十四年七月二十七日結婚式をあげた。

宮田牧師は其頃、サンフランシスコ市のキリスト教青年会の幹事をしていた甲賀を、文を通じて結婚の話があった。私に考えておくように、申されたが一度も見た事も、話した事もなく、返答に困り、父は信者でその様な仕事をしている人であれば大丈夫、米国へは、なか／＼望んでも、

行けない処だし、羨ましい位だと一人で喜んでいて。自分は、無我夢中で、あったが信頼する先生や、父兄も賛成であるし、そのまゝ、とん／＼調子に話が進んで、一ヶ月もたたないうちに、式をあげてしまった。初めは、一緒に渡米するつもりであったが、其頃、トラホームと十二指腸の検査が、やかましく、眼の治療のあとが残っているとので、自分だけ通過出来ず、十月に夫は先に渡米し、淋しく残された。一人行くのが、不安なのか、友人の奥様と来る様に、言い残していったが、結局、其年の十二月、春洋丸に乗船して一人、行く事になった。其の時、父が、横浜まで、見送りにきてくれ、気丈な人ではあったが、若い娘、それに、田舎だけにおいて、一度、東京に嫁ついた姉のところに行ったことがあるだけだったのに、娘を遠い所に、送ることはつらかったであろう。しかし、今更、そんな気弱なそぶりを、見せてはと、思ったのか、励げまして「元気にしっかりやりなさい。先に行って待っているし、心配はない。」と申してくれた。それでも、案じられたのか、ロスアンゼルスに本屋をしている佐藤と云う人の家族の室に、一緒に、いれてもらい、船中も親切にしてくれ、淋しい思いもしなかった。十六日の長い船旅も終り、やっと金門湾に入り、あたりの珍しい風景に、目をうばわれている間に目的の地に着いた。これから新しい生活が、はじめられるが、何もかも、わからず、一切をまかせ、共に出来るだけ強く、歩んでいきたいと思った。

今迄、日本着物に袴と云う格好だったが、早速、デパートに連れられて、洋装に早返り、いよ／＼米国の生活がはじまった。サンフランシスコでは、東ヶ崎菊松夫妻の一室を借りる事になった。この時の印象は、一生忘れられぬ思いで、何も知らぬ者に、親の様な、温かい愛情で、細かい事まで、将来のためになる様、第一歩から、ひとつ／＼教えて貰った。夫妻は、熱心な基督者ホームで、早くより米国に渡り、食料品を、日本から取りよせて、消費組合と云う貿易商をしておられた。千九百十五年は、パナマ運河開通の記念のため、金門湾の見晴しのよい場所に世界博覧会が開かれた。目をみはるばかりの広大な規模であった。

十一月十日長男正典が生まれた。この時も、東ヶ崎で、お産をして、少しも不安がなく、何もわからないので、一切のお世話になった。育児の事も、種々教えて貰ったので、病気もせず、はじめ母乳だけであったが、不足の様なので、牛乳を足したら、発育もよく助かった。甲賀は今迄の青年会の仕事をやめて神学校に入って、勉強し、直接、伝道したい希望があると云った。その時は、次の子が妊娠中であつたので、オークランド、メンローズの友人宅に家を一ツ造って、子供と私とが住み、夫は、十六年の九月から、学校の寮に入る事になった。

十七年一月八日純男は生まれた。その頃、正典は十四ヶ月でまだ歩けず、パパは土曜日に来て、月曜日に学校へ帰ったが、幸

い、月曜日の朝で産婆はオークランドの町から、電車で来て貰う事になっていたもので、間にあわないかと、心配していたが、やっと生れる時、かけつけてくれてほっとした。十日程毎日来て風呂にいられてくれ、何かと手伝ってくれて世話になった。パパは二週間休校して家にいたが、二週間すぎるとすぐ学校へ帰った。幸、近くに住んでいた磯川夫人が親切にしてくれ、自分も励げまされ、身体も健康になり、元気を出して、育児に専念する事が出来た。

神学校は五月より九月まで、休暇に入るのだが、大抵の学生は夏期伝道に行く様であった。自分達は其時の夏、ハンホード教会に行った。正典は一年半、純男は四ヶ月、二人を連れて、それぐ荷物を下げて出立した。加州の中部でも、最も暑いところで、日中は仕事もあまり出来ず、涼しいところで休んだりしていった。しかし、久しぶりで、家族一緒にくらし心のおちつき、うれしかった。何より子供等が、暑いところでも、健康で元気に過すことが出来、神様の守りと感謝して九月にひきあげた。信者の家族の人や、青年とも親しくなり、去るのが、惜しい様になった。二年生から sacrament を引揚げて、学校の近くに、小さい家を借りて住み、勉強を続ける様にした。学生の中でも妻子があつて勉強する人が、二、三家を持って暮していた。学校のあるサンアンセルモには、日本人は、学生が三、四人いて、よく遊びに来たが、他は外国の人達であつたが、環境も良く静かで、住み心地はよく、庭も広く

て子供等には、よい処であつた。この家は、パーラー一つ、ベツトルーム二つ、台所、風呂場があり、家具も戸外道具も、一切ついで五弗であつた。となり、老夫婦が住んでいて、言葉をかけてくれた。特に正典を可愛がってくれ、朝食に必らず呼んでくれるので、家で食べて、又となりに出かけ言葉もあまり話せないのに、小さい客人扱いされて、得意であつた。寮にいる学生も日本に妻子を置いている人もあり、かわるぐよく遊びに来てくれ、子供等を可愛がってくれた。ある時は、教授の家で学生を招待してくれ、夫人同伴だから是非来る様に奥様がわざ／＼子供にケーキを持って来て、案内されたので子供を寝かせて出かけた。言葉もよく話せずそんな所は、はじめてであつたが、気まずい思いをさせない様に親切にしてくれたので、楽しいよい経験であつた。

翌年、オーナツグループ教会に招かれた。今井牧師がその間、日本訪問にいった。正典も純男もだいぶ大きくなつたが、この時は、サンフランシスコ迄、連絡船にのり、次には、 sacrament 河を船で上流に登るため、夜、寝台をとつて翌朝目的地に着いた。信者の迎えをうけた。会堂は新しいが、会員も少いので、下が礼拝堂で、後が台所、三階が寝室であつた。こゝも暑いところで、アスパラガスが生産されていた。町には、日本人の店もかなりあつた。日曜礼拝、夜の集会、祈祷会には少数でも、きまつてよく出席され、今でも、そのうちの一人、赤松次郎老は牧師になって、ニュ

一ヨークで良い働きをしていることをきき、喜んでいゝ。

七月二十七日三男友信が生れ、信者である沖田ドクター夫妻の手厚いお世話になった。裏の日本語学校で教えていた女の先生も信者で子供等もよくなつていた。夏のわずかな期間であつたが、又、別れて学校に帰った。途中、三人の子供を連れてであつたが病氣もしなかつた。十九年四月、やっと卒業することが出来た。

初めての伝道地は南加州ランポーク。こゝは開拓伝道一年して、日本に帰つた及川牧師の後であつた。この町も、静かな小さい町であつたが、酒屋は一軒もないし、遊び場もなかつた様である。日本人は大方、農業で、町には、三、四件食料品や雑貨、豆腐製造、魚屋等があつた。気候もよく平常は子供等ははだしで遊んで居たり、買物にも行ってくれた。会堂はしっかりとして、牧師館は小さくとも新しく、まわりは畑があり、よい環境であつた。十一月三日天皇誕生日には、会堂に大勢集つて祝会をした。その夜、三男友信が急にひきつけを起し、驚いて米人医者ハイジェスを頼んで、診察をして貰つた。早速、胃の洗淨をしてくれたり、アルコールか何かかゞしたり、やっと、気がつき、もう大丈夫と言われ、二、三日すると元気になるだろうと帰つたが、そのうち、あまり食欲もなく、只、水ばかりほしがつていたが、まだ口もきけず自分達にも小児の病氣には経験がないので医者にきてもらい、たずねたら、大病だと言われ、驚いて、手の

ほどこし様もなく、わずか一週間足らずで亡くなってしまった。今迄、子供等は病氣らしい事もなく、こんなに急に亡くなるとは、思いもよらず、もっと何とか、手のほどこし様もあつたのではないかと、かわいそうでならなかつた。親しくしていた夫人達も同情して慰めて下さつたが、心の中が空虚になつた様で、がっかりした。初めての伝道地でこんな大きい犠牲を拂うとは、夢にも思わなかつた。葬儀は在留日本人も大勢集まってくれ米人のマッケン牧師によって、司式して貰つた。心より同情され説教の中で純真な幼児の死は悲しい、短い生涯ではあつても立派に指名を果し、天上に召され、愛されて後より来る親しき者の先導となるであろうと、力強く話された。今迄は此世の事にのみ心を使つていた様であつたが、愛児が召され、天国が親しくなり、子供を失つた経験は同じ様な悲しい事にあつた人に心より同情と慰めが出来ると共に子供等に一層の注意が、拂われ二度とこの失敗はさせたくないと思つた。今もランポーク丘の墓地に葬られてあるが、訪ずれる機会もなく思い出されるかの地には、戦後日本人は井上雑貨店があるばかりと言うが、その家の長女が召された時、甲賀が葬儀を司どり、同じ経験があり、其家人が友信の墓は、よくしてくれているとの事、正典、純男が再渡米して、親しく墓参りしてくれ何よりの慰めとなっている。

翌年一月十七日長女喜音子が誕生した。今迄淋しかったが、初めて、女兒が与えら

れ、明かるくなった。憐りの米人チャーレーの家の老母がわざ／＼お祝いに帽子と靴下をあんでくれた。娘の使った乳母車があるがよければと、云われたので、喜んで貰った。新品同様に藤の立派なものであった。正典は毎日遊びに行き、家族同様に可愛がられ、私共にも、何かと親切にしてくれた。米人教会の婦人会の人が来て、ベビーのお祝いに、旧新約聖書を贈ってくれた。

其頃、少し離れていたガタルーパーにも、伝道に行っていたが都合でそちらに移る事になったが、ランポークには続いて伝道出張にも来る事にもなっていたが切角、親しんでいた人、特にとりよりのチャーレー一家は別れを惜しんでくれた。ガタルーパーは、やはり農業する人は多かったが未だ会堂はなく、普通の住居を借りてははじめ、信者は少いが一生懸命遠い処にも出かけ、集会もして喜ばれていたが、佛教会があつて盛んで困難であった。そのうち、ワッソンビル教会の招きで行く事になった。サクラメントには、姉が五十歳に結婚して住んでいた。東京の浜田病院で産科を学んでいたので、妊娠中の私は子供を連れて、お産のすむ迄、世話になり甲賀は一人、ワッソンビルに先に行った。この地は、加州の首村で暑いところであったが、恵美子は七月一日生れ、姉の温かい心盡しで安心して養生が出来、一ヶ月後にワッソンビルに迎えられた。この教会は沿岸でも有数の会員が揃っているし、集会も盛んであり、婦人会もなか

／＼よくやっていた。

正典は小学校に、純男は米偉人の幼稚園に世話になった。千九百二十三年一月三十一日遜が生れ、翌年四月、光子が与えられた。二人共、長老渡辺ドクター夫妻のお世話でお産をした。帰国はよく、冬も、クリスマス頃も雨も少し、朝晩にストーブをたく位で、四月から十一月頃迄は全く雨を見ないので、たいていの日本人がイチゴ造りや、リンゴ栽培をしていた。イチゴは年四回の収穫で立派なものが生産されていた。

ホード自動車教会の伝道用にあつたので、夜の集会や訪問にも一緒にのっていった事も度々あつた。近くのサイナス・モントレー教会とは毎年の様に連合礼拝をかわるがわるして、親睦を厚くしていた。この教会に五年近くいて、種々の経験をしたが、正典は四年、純男は三年、喜音子は未だ学校に行っておらず、恵美子、遜、光子と六人の子供を連れて、甲賀は在米二十年、私は十年の生活をきりあげて日本に帰る事にした。慣れぬ日本での生活は困難であるから、無理をしないで米国で伝道する様申してくれた人もあつたが、子供等にも日本に帰り勉強させて、仿かせるのもよいと考え、長い米国生活であつたので一抹の淋しさはあつたが、決心して八月春洋丸に乗って帰国した。

途中ハワイに寄り、太平洋上のパラダイスと云われたので見物したり、堀真一牧師をおたずねして、大きいパインアップルを頂いてなごり惜しくお別れした。

海は静かだった。子供も元気で無事に過ごした。船はだん／＼祖国に近づき今日は夢にまだみた忘れられない故国に着くと云う日、朝まだ暗く、遠くにかすかに点々とあかりがみえ出し、船中は急にざわめきだして、久々にみるなつかしい陸地がぼんやり島のように浮かんで目に映じ、息をこらしてみても居たら、明けやらぬ大空に、気高い富士の姿があらわれ、かんぱん上の黒い人は、驚きの声と共に、感きわまって、涙がほゝを伝わり、嬉しさで、心はおどる思いであった。十年前に一人淋しく渡米したのに、六人の子供を連れ、大家族となって逢う事のできる崙び、何とも云い現わされぬ。やがて船は、岸壁に近づく。そこは迎えの人でいっぱいにあふれていた。目を皿の様に探していたら傘を高くかゝげている父の姿がまず目の中にとびこんで来た。つぎ／＼に親しき人の出迎えに足は床につかない。やっと上陸して皆の元気な様子を目の当たりにみると、何から話してよいか言葉も出なかった。その日のうちに木更津に着いた。母は嬉し涙をかくし、心から喜んで、御祝いの御馳走を食べきれない程、つくってねぎらってくれた。

ひとまず市宿に足を止めたが、子供等の学校の都合で木更津に移り住むことにした。何より悲しく淋しかったのは、九年前迄は元気にして居た義母がこんなに早く私共が帰るのも知らず亡くなっていたのが心残りですまない気がした。牧野両親の骨折りで新築の貸家を見つけ貰い、

皆の新らしいふとん、かやも作って待っていてくれ大助りした。

九日より十一月迄上の二人は小学校に通わせたが、先生の言葉もわからず、かわいそうであったが、友達も出来、遊びにもきてくれ崙んで通って居た。両親は毎日何か持って来て見舞ってくれた。

小林誠牧師は且ては米国で伝道して居られ、先に帰国して居られたがこの方の世話で、宇都宮、徳島、満洲の安東教会を紹介してくれた。外地生活になれているので、安東を希望して十一月はじめ出立した。途中京城に姉の坂口和子の一家が居ったので、久しぶりに逢うことが出来た。二泊してやっと安東の地に着いた。寒い安東の地に移っても子供は病気もせず崙んで居た。クリスマスも近くなると、さすがに寒さは厳しく、ペチカに朝晩石炭をたいても二重ガラスは氷りつき、外は全く見えなかった。人の出入りが多いと温度が下り、満洲の気候になれぬ為、満里子は前年(大正十五年)五月に生れていたのだが、遂いに風邪をひき、手当てをしたがとう／＼肺炎になり、小さくて抵抗力のない為か、それまで一度も病気をしなかったのに、わずか八ヶ月で又も惜しい生命を亡くしてしまい、かわいそうな事をした。今迄考えも及ばなかった事だが、室の中でも、窓側と真中とは温度も違い二階の方が温度が平均してよいとき、こんな事も気がつかず、すまない気持ちでたえられなかった。せつかく神様からたくされながら、この様な失敗を重ねて、お

詫びしたい気持ち、何か張りつめた力がぬけた様な思いがしたが、またも気を取り直し、他の子供に一層心をくばって、成長させなければと祈るばかりであった。葬儀には鴨緑江対岸の新義州教会の菅日出男牧師をお願いした。心からの同情と慰さめとを頂いた。一年中で一番寒い一月三十一日で道路も氷結してかち／＼、パパが人力車に乗り、小さい樞を抱いて焼場に向う。惜しく泣けて、無言のまゝついていった。祖母の亡くなった時、内地に持ちかえり、今は木更津教会の墓に永き眠に入っている。

昭和三年十二月二十五日和彦誕生する。一週間前、賀川豊彦先生の特別伝道が近くの学校であり、盛んな集会できゝに行つて励げまされた。クリスマス生れなので平和の意味と豊彦の御名を一字頂いて、和彦と命名した。たいした病氣もせず順調に大きくなった。

我家の周囲の様子を少し記してみると、右となりは礮業の六角堂、左は岐外科医院、前は日蓮宗の寺、教会は真中であつたが、どこも子供が五、六人づつあつて仲良く遊びに来て、楽しそうに勉強もよく一緒にやつて居つた。米国から持って来たワグンは珍しく皆で乗りまわしたり、かんけりでかくれん坊の遊びもおもしろがつていた。日旺学校も盛んで熱心に集まつて来た。子供は多くとも相応に手伝いもしてくれ、買物や子守等もやり、忙しい中にも元気に過していった。

三女暁子は六年十月四日に生れた。小

学校の運動会であつたが、親達も見に行つてやれず、楽しみにしていた弁当も、特別のはつくれず、我まんして貰つた。暁子は六ヶ月の時、麻疹から肺炎になり、急に重くて入院し、其の夜はむづかしいと云われたが、何とか助けたいと、夜中起きて御湿布したり、ミルクの中にせんじ薬まで入れて飲ませ一生懸命祈りながら、夜をあかした。朝になりいく分顔色もよくなり廻診の先生もこれなら助かるかもしれぬと半信半疑で申されたが、幸い、ぐん／＼よくなって八日目に退院することが出来た。二才位まで腸を度々悪くしたが、たいした事もなく成長した。

翌七年十二月二日に道生が生れた。聖句の中にある道なり生命なりと云う箇所を取つて命名した。七月末梅雨期のむし暑い時に人工栄養で消化不良になり。下痢は続き医者に診て貰つたが、なか／＼よくならず、衰弱もひどく医者で紹介で、満鉄病院に入院した。早速ぐったりした幼児に酸素吸入を夜中続け、一時も油断は出来ない状態であつた。もはや絶体絶命、一心に神様にお祈りも、いやされん事を願いつゝ顔をみつめるばかりであつた。あたりの人もとても助かるとは思わなかつたと後で申して居つたが、やつと死期は脱した様であつた。家の方はパパに他の子供等を頼んで道生の看護に専念した。十日位して、元気は出て来たが、とう／＼一ヶ月位かゝり、痩せた幼児を抱いて家に帰つた。大病したので発育も遅れ、二十ヶ月になって、やつとよろ／＼歩きが出

来た。翌年も肺炎になり入院、長くかゝらず、退院出来たが、他の子より注意しても病気になった。六才位の時は百日咳から肺炎、この時も入院し、遠藤医長も手こずる位なおりにくく、幾日もかゝって危いところをいやされてほっとした。小学校も低学年の時はよく学校も休み、中学に入る様になってすっかり健康になり、其後は家中で驚く程の身体になった。

昭和九年二月四日春明誕生する。正典、純男は中学、喜音子は女学校、恵美子、遜は小学校、光子は幼稚園、他は家に居り、十人の子供等も家はごった返しの有様、それでも皆、学校も休まず、気持ちよく手伝ってくれた。パパも健康で、伝道にさしつかえなく、長女喜音子は母親の大切な補助者であった。子供等の丈夫な時には、毎週とは行かなくても、信者の家庭訪問もしたり、夜の集会の時には上の子供が見てくれるので、出席も出来た。子供の健康のため、スケートを奨励し、学校では体育の時間、小学校も女学校も必修課題になっており、はじめはよく下駄スケートと云う簡単な物でその後、小学校でも、本スケート競争用の長スケートをはいて元気に寒い戸外ですべった。鴨緑江にもスケート場が出来、毎年開かれるのが例になり、かえって冬が待ち遠しく楽しんで来た。町の大人もその時は、応援に出かけ、選手達は信州の諏訪湖に出かけても満洲から行った者が、大方優勝をして帰って来た。

毎月二回の婦人会も少し離れている六

道溝等に行く時は二人位子供を連れ、哺乳瓶を二本位持って、満人の馬車に乗って出かけたが、大人しく夕方帰ったりすると、上の子供等が帰って買物をして食事の用意もしてくれて、楽しく夕食も出来た。風呂もたいてあり、教会の御用に皆で協力してくれ心配なく出かけられた。

正典、純男は朝食の支度も弁当も作って出掛け、他の子もそれぐ食事もすませて朝の忙しい時も順序よく運んで行った。日曜日は寒い所なので子供等の来る一時間前に石炭でダルマストーブをたき室を温め、集会の準備をしてくれたが、これは引き続き遜もやってくれた。それに週報も土曜日学校から帰ってから、信者の元に配って案内をして、和彦等もよく、やってくれた。

安東は満洲では日本に一番近く、気候もいづらか温かったので、鎮江山には四月末の天皇誕生日頃から、五月一日安東デーにかけて吉野桜が満山を雲かかすみ様にかざし、頂上の見晴台からは、雄大な鴨緑江の流れがあり、その上には安東と新義州をまたがる大鉄橋がかゝっており目を遠くに転ずれば、朝鮮の山々がうつすらと絵の様に映じて、いつみてもあかね眺めは満洲第一の景勝地と云われて居った。子供連れの家族や、学校の遠足にもよくこゝが選ばれて、楽しい思い出となっている。正典、純男は中学時代、隣の壱岐一郎君や、緒方君等と朝鮮の白馬にキャンプに行った。テントは正典がミシ

ンをかけて造り、食料を持って出かけ、二、三泊した。その間にパパは小さい子供を連れて訪づれ白馬川で皆で泳いだりしたこともあった。

正典も中学を卒業した。彼は工科を希望して居た。種々考え、米国には五十嵐一家が居り、渡米させて勉強したら、と申ししてくれたので、その頃、下の春明は、一月生れで未だ乳幼児で手がかゝったので、喜音子の女学校の夏休みになるのを、待って、道生と二人を置き四才の暁子を連れて、自分は八年ぶり正典を送りながら、東京にいる両親を訪問も兼ねて出立した。

正典も日本に帰り英語を用いる機会がなかったが、思いきって sacrament 市の姉の家を目ざして行くことになった。正典はまだ十八才八ヶ月の若年で初めて親兄弟と別れて一人遠い米国に行く事は淋しいだろうと思ったが、姉の家には、年のあまり違わない男の子三人と女の子一人も居りにぎやかで五十嵐兄も崑んで、迎えてくれ、私共も米国には知人も多いので、将来のため躊躇せず、当人も進んで決心出来た。そして、しっかり勉強し兄弟の為にも力を出して、両親を助けると云ってくれた。牧野の祖父母も淋しそうではあったが、励げましてくれた。横浜には牧野伯父達と私は暁子を連れて行ったが、船中には入らず、別れる時、正典は少し淋しそうであったが、しっかり手を握り、私も励げまして涙の出るのをおさえて送った。翌年純男も卒業、彼は英語が好きであったので正典の後を追って渡米する事に

なり、相方が力を合わせてやったら、心強く、かえって都合もよくなると思ってやった。純男は木村熊次郎伝道師が再渡米するよい機会に五月頃一緒に行く事になってこの時はパパが送っていった。渡米後二人共姉の子供と兄弟同様仲良く高等学校よりカレッジ迄進み、その間、学校から帰ってから、日本語学校を教える手伝いをしたり、夏は果樹園にも少しは出かけた様であった。其後も相互助け合って勉強した様である。

上の二人の渡米後、崑音子は女学校を卒業してから弟妹が沢山で、手がかゝるので、どこにも勉強に出せず、家の手伝いをしたり、特に洋裁も習いに行かず、家の者の着る物を引き受け、大方「婦人の友」を読んで数多くぬううちに自分のスーツやオーバーも手がける様になった。家の方の弟もまかせてよくやってくれ、どんなに助かったか知れず、後に武田と結婚し子供が与えられても、娘時代の経験が役にたち、困難な境遇にも切りぬき、現在は釧路で夫を助け、女の子四人の母として家庭の大切な仕事に携わっている。

恵美子は小さい時から優しく弟妹の面倒を見てくれ、姉と共に、母の助けとなってくれ、卒業後、東京の弟が医師で開業して居り、母が手放してよこさないかと申されたので、友人と一緒に上京した。母も八十才迄家のためよくつくし、信仰も持ち続けておったが、ぜんそくがひどく遂に帰らぬ人となった。戦争ははげしくなり崑音子は結婚し、私も過労のため、健康

がすぐれぬので恵美子に帰って貰い、一緒に引揚げの時も彼女のために家中が力づけられた。

遜は電気科を勉強する為上京し、卒業後、安東に帰って、家から電々公社に勤め、十九年戦地に行き、北満の方一線迄進み、危いところで終戦になり、途中苦労して我家に帰り、前の勤めを続け、家の大切な柱となって、両親・妹・弟のためつくしてくれた。

光子は元気な性質で丈夫に過していたが、女学校三年の時、肋膜炎になり驚き、入院。其時も私がつきそって看病にあたった。幸い一ヶ月位で退院できた。よく注意したためか、一度も再発せず健康になった。二十年の七月、石川寛と新京で結婚した。

戦争はだん／＼烈しく、あまり良い知らせはなかったが、勝つまではと物質が窮屈になっても頑張った。が、八月十五日天皇陛下の終戦になった事のラジオ放送を聞いた時は、ぼう然としてこれからどうなるのかと、がっくりした。特に外地にある者は今迄この地を生活の基礎として暮し、内地に帰って暮す事等、考えもしなかっただけ、やり場の無い気持ちであった。引揚げの事もいつの事かわからず、国民党が入って来るかと思うと、人民軍に官庁も会社も満人になり、日本人は恥もなく持ち物の売り食い、それが出来ればよい方で身体一つで逃れて来た何万と云う老若男女子供は今迄どんなぜい沢な楽しい家庭を持っていた者も、住む家もなく、

食べて行く方法もないまゝ、子供を背に負い、寒い街頭で物売りをしたり、男は軍に連れ去れてつらい仕事をし、若い女は隣組を通して、中央軍の負傷者のため看護婦に召集され、知らない土地にいつ帰るかわからないので、親しい者との別れを惜んで涙ながら手を振って行くのがかわいそうで、この時つくぐ敗戦の為、外地にある者のみじめさを感じさせられた。尚、北満から身体一つでのがれた人々は身のまわりの物を着たきり、若い婦人は途中ソ連兵に見出されて、つれ去られる危険を恐れて顔も真黒に男装している人も多く見られた。家の恵美子、暁子も看護婦に出される恐れがあったが、中共の女官で中共に協力して翻訳の仕事をしていると云う証明の為、のがれる事が出来た。その他の知人の家ではかなり大金を出してのがれたものもあった。一時無警察の状態であったが中共軍は日本軍や財閥は敵だが人民はにくまないと云って保護してくれた。教会堂を中共軍の学校に使用され牧師館の二階で日晷礼拝は続けられ、引揚げ迄、休みなく出来た。他の人は中共軍の宿舎にと引越しを命ぜられ、七回も八回も行く先も目当てもなくとも出て行かなければならないので、せまい所で幾家族も頼り合って暮してた。私共はその点ものがれてよかった。子供等の学校は終戦と同時に閉校となり、丁度一年、きまった勉強もあまり出来ず過した。遜は心配して自分は少し後に残り、一人なら何とかして帰るから、先に帰ってくれと申

し（困っている者から先に安東から奉天を通してコロ島から帰る事が許されて少しずつ帰れる様になった）二十一年九月末、鴨緑江からジャンク船に乗り、仁川まで行く事になり、リュックサックと手荷物だけに着がえと食料を入れて乗艦した。船内はぎっちり横に寝たり、足を入れるすき間もなく、自分の頭の上には他人の足がつかえる状態であるが帰りたい一心で我慢して居た。武田一家は十月に奉天を経てコロ島から引揚げたが妊娠中の崑音子は崑美恵を負うて、途中歩いて歩いて髓分苦勞した様で私等も心配で無事な事を祈ってたが故障なく武田の郷里に落ち着いて登崑恵が生れ、こんなに嬉しい事はなかった。終戦と同時に通信もできず、光子とは結婚式の時新京で別れたきり、少しも様子がわからず、相方が引揚げた大分後になってから消息が分かった。

引揚船はジャンク船で船長も働く者も満人ではあったが、親切でしっかりして、心強かった。鴨緑江を九月三十日に出航し十二日目にやっと仁川港に着いた。其の時は食料も極度に欠乏し、皆、空腹で疲れ、こんなつらい思いをしたことはなかった。夕方入港し、パパや二、三の代表の人が通りがりの鮮人の船に乗せて貰い埠頭の米軍に行って頼み、その日のうちに上陸を許してもらわないと病人が多く出るからと嘆願した。許可され早速迎いに来てくれ、温かいうどんをふるまってくれ、これで一同元気になり、その夜、貨車で京城に向った。龍山駅に着いたが

日本人には電車にも乗せてくれず一里以上の道を荷物を持って、長い列を作って歩き、幾日もろくな食事もとって居ないので疲れ、やっと元本願寺の跡の建物に落ち着いた。こゝでは八日間も検疫を受けたが、裏の暗い室には重病人が居り、毎日の様に故国の地をあこがれつゝ死んだ人もあり、気の毒でやりきれなかった。この辺は小高い岡で見晴らしはよく眼下には市街が見渡され、かつては威容をほこった總督府の建物が特に目に止り、近くには京城神社の広い境内があり、その廻りの静かな場所にはこゝを永住の地と定めていたであろう見事な日本人の家がある。その頃にはもう韓国人がゆう／＼と住んで居り、帰りにその辺を歩いて通った時は、情けない思いがした。京城の駅から貨車に乗り釜山に着いた。こゝは倉庫跡で下はコンクリートで敷物もなく、寒さに震えながら、一枚のオーバーにくるまって一夜をあかした。それでも長く止められる事がなく、翌日大隅丸に乗せられ一路なつかしい故国に行ける事になり、嬉しく元気が出た。この船も引揚者のため改造されたもので、暗い、広い船底の様なところに大勢で不自由ではあったが、やむを得ず、それでも日本に近づいたので博多に上陸する前日には久しぶりに別れを歌ったり、元気を出した。博多迄一ヶ月近くもかゝり、十月二十七日朝に着いた。午前引揚者は荷物も身体も消毒の薬 DDT をかけられ、やっと引揚列車で各国の故郷にたつた。途中、広島原爆の跡はひ

どいのに驚いた。ところぐ枯木がひよろ／＼と立って居るばかりで、家らしいものもなく、遠くかすかにあがりが見え、まんたんたるものであった。やっと両国駅に着いた。本所も戦災で焼け、パパは子供と戸枝を訪ねたら焼野原に土蔵だけ残っていたと申して帰って来た。十月三十日木更津駅に着き、子供の頃よりの親友の玉屋にリックサックを肩にモンペ姿で身を寄せた。その日のうちにパパだけ市宿に向い、二、三日して迎えに来てくれ、子供等を連れて行って貰ったが恵美子が発熱し、診断の結果、ジフテリアと云うので藤代耳鼻科に入院私も看病した。一週間後、市宿に行き、こゝで二ヶ月半止まった。春明はこの田舎の小学校に入学、後の和彦、道生、暁子は学校にも入れず、やはり木更津へ出なければならぬので、パパはこんな場合、やむなく高野組の通訳をなつて田舎を引揚げ木更津に居を定めた。木更津に移って早速暁子は女学校二年、道生は中学校一年に、春明は小学校六年生となった。和彦は旧制都立高校に入れることになり、恵美子は赤羽の弟の處から、是非来て手伝ってくれる様、頼まれたので和彦も同家に世話になり、通学することになり、それぐの道に進まれる事が出来崙んだ。その年の十一月名古屋に居った崙音子と崙美恵をあずかる事になりしばらく共に暮した。三月になって米国の正典、純男から便りが届き、嬉しく急に一同元気が出た。早速、手紙を出し戦争が始まってから通信も出来ず心配してた

ので心も躍り、返事を待った。間もなく、便りがあって皆も大崙び、其頃、二人共シカゴに居り、加州大学を正典が工科を純男は文科を卒業し、正典は電気の方の仕事に勤め、純男は、シカゴの神学校に戦争中勉強して卒業後、日本人教会の副牧師として元気にしている事がわかり、相互の無事を感謝した。米国の二人からはこちらの不自由な事を知り、沢山の物質を送ってくれた為、衣類から食料、その頃石けんのよい物がなく洗たくにも困ったのでいつも入れてくれた。米国の心ある人で日本の困っている事を知り、送りたい人の名を知らせて欲しいと云われたと申して、知らない善意の人々からも送って下さった。田舎の小さな教会の婦人会の方々は北海道に其の後移転した崙音子の家にも度々贈られ、手紙をそえて励まし、武田が信仰に入るため、特に祈ってもらった。婦人会の人の写真も入れてあった。クリスマスには子供に人形や新しい手袋、食料、キャンデーもあり、親切で温かい愛の実行にはどんなに助けられ、心にしみて感謝し、力づけられた。

崙音子たちは木更津に共に一年数ヶ月居り、種々家事を手伝ってくれたが、其間二十三年七月に日頃丈夫な可愛い盛りの崙美恵が疫痢にかゝり、医者に見て貰い、大した事はないと申されたが高熱と下痢が激しく、急に衰弱して崙音子も一生県命手当もしたがとう／＼亡くなってしまった。思えば、元気で可愛い盛りで皆に可愛がられ人気者であった。何でも不自由

な時ではあった崑美恵の為、皆がいつも元気づけられ、明かるい毎日であった。暁子が日旺学校に連れていったり、病気になる前、アメリカから送って貰った赤白のチェックの地で二人お揃いに崑音子が作ってお祭りにも連れて行ってとても崑んでいた。今もあのコンクリートの床を可愛い下駄で歩いてた音が耳に残って忘れられない。名古屋の武田に知らせたら驚いてかけつけたが間に合わず気の毒であった。「崑美恵！なぜ死んだのか」と手を取ったら冷えて堅くなったのに動き出し、一層涙をさそった。純真無垢な幼き者の死は、自分も二人の子を失ったので父母の心は察するに余りあり、私にとっても初めての孫で安東で生れた時は側において介添をしたので一層つらかったし、托された自分等としては、申し訳なく武田達に何ともわびる言葉もなかった。引揚の時、崑美恵を連れて来るのに途中病気もさせない様に切角持って来た物も売って食料を買い与えたりして、やっと故国の武田の両親にあわせて崑ばれたのに残念に思うた。しかし崑美恵が居ったため、親達は励まされ、頑張りも出来たと思うと、尊い天国への道案内の訳も果たせた事は大きな功きとなったと思う。

妹の登崑恵は生後八ヶ月、崑音子は淋しい内にも慰められ、元気を出して何かと偽ってくれた。翌年二月歩行が出来る様になり、少し歩き方が心配なので東京の赤羽の牧野に行って診て貰い、専門の日本大学の診察をして貰ったら、やはり

脱臼してるとの事で田舎では思う様に治療も出来ず上京し、牧野の世話になり、一週間入院して早期治療を必要との事で実行した。退院後、ギブスをはめた子を背に負うて通院し早くなおした。とう／＼完全になる迄続け、九ヶ月目にやっと許しが出た。その頃北海道に渡って仕事を始めた武田が迎えに来て元気に出立した。

遜は安東に一人残り、電々の仕事を続け、其後奉天に移って同じ仕事をして居た様だったが、都合よく帰国が出来七月崑美恵の亡くなる前に帰宅一同崑び迎えた。一日も早く仕事を探すため、上京し、其頃はなか／＼東京都内に入る事が出来なかったが、この時も赤羽の叔父の家に住まわせて貰い、張り切って出かけていった。

木更津は私の生れ故郷で米国に行く迄すごした。引揚当時は身体の具合が悪く、家事をやっても疲れやすかったが、子供の頃からのれた処のせいかだん／＼力づいて少しずつまわりの空地に野菜を作ったり、時々浜にあさり取りに遊びに行きしおかげも心地よくすることが出来、見違える位、健康を取り戻すことが出来た。

夏には東京の親類の子供等が毎年きまって休暇中来て、海水浴等してにぎやかだった。パパの仕事は割合楽であったが、途中から、東京に通う様になり、其時は一番列車が五時発なので、四時頃起きて朝食を大急ぎに済ませ、若い人と汽車で三時間位かゝっていき、夜七時過ぎ帰ってきた。其頃は千葉駅で乗りかえをする時

は混雑して、窓から入らなくては走れない位であったが元気を出して一年位も続けた。いつ迄こんな仕事をしていてはと思ひ、この際やめて本来の伝道をしなければと、決心してやめた。木更津には三年半住ったが暁子は高等二年、道生は一年、春明は中学三年生であった。

保田の教会の招きで二年近く住んだが石川四郎牧師の紹介で高岡教会に赴任した。北陸の地は冬中雪におゝわれたり曇天続きで老年になってから無理と周囲の者からも心配されたが、この際、及ばずながら導かれるまゝ最後の御用と信じて、道生もあと一学期で高等を卒業、春明も高校二年で学業も途中でむづかしい時ではあったが決心した。

遜は自分の仕事であちこち出張がちであったが、和彦は旧制高等学校から東北大学法科に入学出来、仙台の寄宿に住んだ。暁子は赤羽の家から東洋英和の短大保育科に学んで居ったが遜は弟妹のため忝いて毎月学費の応援をしてくれた。

道生は卒業後どんな道を選んだらよいかと心にかゝっていたら、思いがけない時「僕、神学校に入って勉強したいが。」と云われたので真に嬉しくて、感きわまった。伝道者の道は険しくとも何よりもこの希望は進めてやりたいと遜にも相談したら、崑んでくれたので、和彦、暁子続いて道生と容易でないと思いつゝも、前進する事により、神様は何とか必要のものを与えて下さると信じて居ったが、遜は自分の事を考えずよく援助してくれ

た。恵美子は女学校を卒業するとすぐ母の居た弟の家に迎えられてよく仕え、そのみならず親兄弟のためにも、心を配って姉として母親の様な温かい気持で自分の事の様に盡くしてくれ、皆から信頼され感謝されて居る。

昭和三十一年八月純男が加州ストックトン教会に奉仕している時、二十二年ぶりに両親訪問の為、来日して来た。パパが羽田迄、恵美子と迎えに行ってくれ、市宿や木更津の墓参りをすませて高岡駅に着いた。手紙の往復はして居ったし、いつ逢えるかを待っていたが、目前に現われた時は夢の様で嬉しくて呆然として言葉も出なかった。純男は日晷礼拝に日本語で説教をしてくれた。彼は生れた時パパの神学校で同級生達が将来直接伝道のため用いられる様、祈ってくれた事が今日迄、神は尊き御守り下されて実現して、何にも震って嬉しく御期待にそう様祈った。教会から一ヶ月休暇を貰って美代子のすゝめで、一人で万障をはいして来てくれた事はどんなに自分達を崑ばせ、慰めてくれたかわからなかった。切角来たので、純男は中学時代修学旅行しなかったので、其頃神学校に勉強中だった道生が京都の大宮教会に夏休中、伝道の手伝いに来て居たので、彼に案内させて関西地方を見物させた。八月下旬に帰米するので私が送りに出かけ、純男と和彦も同行して日光に行き、純男と久しぶりに奥日光の湯本に一泊し、中禅寺湖を遊覧船で見物し、楽しい思い出となった。又、いつ

逢う事ができるかわからないが遠く離れても相互が信仰により与えられた御用に励げまん事を願いつゝ感無量であったが恵美子、遜、和彦、光子、道生と見送りに行った。自分達が米国伝道の最後のワッソソビール教会で伝道し、長く子供に恵まれなかったが、帰米後、次々に与えられ、二男一女の親となり、忙しいうちにも元気で居る。自分等が此地を去る時、純男は知らない日本に行く事が不安であったが、僕はジャパンへ行くのは嫌だと泣いたが、再び渡米してゆかり深い教会で自分等の出来なかった事を補ってくれる様で嬉しく、其頃の長老方も今も健在で崑んで応援してくれている。

正典は久子を連れて同じ年の九月に二十二年ぶりで帰って来た。この時は私が羽田に行き、赤羽の牧野に滞在し自分は正典を連れて墓参りをすまし、一足先に高岡に帰り二人を迎えた。長い間、遠く離れて戦争中は音信も出来ず、案じて、居ったが、何等障りもなく、御守り中に目的の勉強もすませて、共にすこやかに相見る崑びを思うと感謝の他ない。高岡には十日間寝食を共にし、長い間の事を何から話してよいかわからず、只、嬉しく過した。迎える時は楽しいが別れる時は悲しく淋しい思いがした。しかし遠く米国にあってそれぐ忙しく責任のある仕事をかゝえているのに、わざ／＼来てくれ、渡米させた時は若く、家から他に出た事がなかったが、五十嵐はじめ多くの人の善意による励げましもあったであろうが、後はそ

れぐの努力で目的を果してくれた事は有難い事であった。しかし、それにも優って神様の絶えざる御加護は何より力強く、遠く離れても祈りによって結ばれ、安心することが出来た。

暁子は幸い、短大を卒業し金沢の幼稚園に奉職、春明は金沢大学教育学部に入學を許され、一年間早朝二人で通う様になった。暁子は其の後、高岡教会の附属保育園に勤めた。熊野先生の御世話で、秋田県鷹巣教会の牧師小林恵一と結婚し今は男一人、女二人子供を与えられ千葉県小金教会で牧師の妻として元気でやっている。

春明は金沢大学を卒業後東京板橋区蓮根小学校につとめ、一昨年多重子と結婚し俊明を与えられ、現在一緒に生活している。

高岡には二十六年十二月はじめより三十六年一月まで約十年種々むづかしい問題もあったが教会員一致して、よく助けてくれてよき解決が与えられ、北陸伝道は困難とされていたが大過なく過ごすことができ感謝であった。子供等の仕事の関係で上京したので、心配してこの際、隠居して近くの東京に出てはと勧めて来たが苦楽を共にして伝道に協力してくれた親しき方々は未だ元気だからとしきりに止めて惜しんでくれたが、やはりいつ迄も続けて老人が腰をすえているより若きよき後任の牧師が与えられたら引退した方がよいと思ひ決心した。幸い子供等がお世話になっている熊野先生にも相談した

ら、その頃、武蔵野教会の副牧師をされていた斉藤牧師を後任におゆずり下さったので安心した。近年まれな大雪の降り積もる一月十六日後髪を引かれる思いで夜の高岡をなごり惜しく別れた。出立の時は二、三日前から降り続いた大雪で空はどんよりと曇り、別れの挨拶に近くの親しい方々の家に行くのに、モンペに長靴、手には傘を杖にして幾度も雪の上をころんだが高岡に九年以上住んではじめての事で忘れられぬ思い出となった。こんな日にもかゝらず多くの人々の見送りをうけ、何か胸がつまる思いであり、四十数年の牧会生活を最後に何等大した事も出来なかった事を心に恥たる思いがした。夜汽車は一路東京に向って走り続いたが、途中長野あたりに来たら、天気は一辺して目もまぶしい位、太陽はさん／＼と照り、別天地に来た思いがして、北陸とは余り離れていないのにこんなにも違うのかと不思議に感じた。東京は冬は寒くても晴天続きで北陸とは全く反対の様で後に残っている人にすまない気がしてならなかった。高岡を去る前の年には何か健康がすぐれず、思う様に働かれず、医薬に親しみ、東京にいる恵美子に度々来てもらって世話にもなった。そんなわけで、子供等も心配して東京に呼んでくれ、老人が長く病気でもして教会の迷惑になっては済まないとの心づかいもわかった。

結婚五十年過ぎて見れば誠に短い様ではあったが、子供等が今迄歩んで来た経験をありのまま、記してみたらとの希望

で筆を取ったが誠に未熟で恥かしい様である。観みて自分の様な何も出来ない者でありながら、欠点多く、強情で我儘者が今日かくも恵まれて、最も至難とされる牧師の妻として足りないながら、長い年月を一貫して過ごさせて頂き、其の上十二人の子供を与えられ、二人は天上に送り、十人のうち二人は牧師に、娘一人は牧師の妻として御用にあたらせて頂き、後の子供はそれぐの仕事に携わっているけれど信仰を持ち感謝しつつ、社会人として働いている。亡き父が私共の事を遊牧の民のようなイスラエル民族に似て、随分あちこち歩いて暮し、その度に子供を生み、いつになったら落ちつけるかしらと申して居ったが、神様はこの様にして種々の経験を通して訓練して下さった事を思うと共に苦しい時にみことばによって力を与えて下さったり、失望する様な時に思いがけない新しい道を開いて勇気づけ、かえって磊びに変る事をも経験させられた。やはり自分の様な者も神様のお選びにあずかり同じ信仰者と結婚し、信頼し協力した事が今日迄さゝえられた事と思われる。今は六男春明、多重子と孫俊明と共に心置きなく過し、老いても二人共、力して守役の手助けも出来、健康に楽しく過しているがもっと信仰を深め、幾分でも神様に磊ばれる毎日を過して行きたいと願っている。

今夏北陸を訪問し大変磊ばれた。健康が許され機会があれば安東にも米国にも訪問したいと思っている。(あや)

## ある少女の満洲生活

### ——細谷和子氏史料紹介——

大石茜



図1 寄贈史料

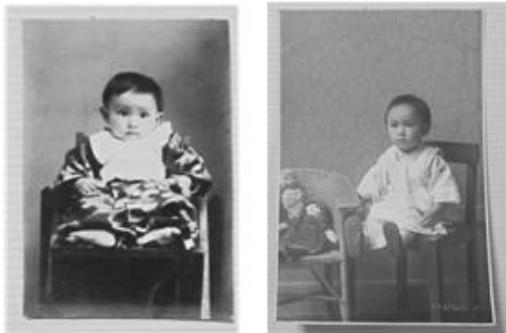


図2 幼き頃の和子

#### はじめに

細谷和子氏（以下、敬称略）と初めてお会いしたのは、2017年10月に上野で開催された公主嶺会だった。自宅に、満洲関係の写真や史料がたくさんあるので、引き取ってもらえないか、と声をかけて

くださった。12月に初めてご自宅をお訪ねし、その後何でも通わせていただき、史料を拝見したり、体験をお聞きしてきた。

細谷（旧姓：吉富）和子は、小学校5年生から女学校卒業までの時期を満洲の公主嶺で過ごしている。父の転任により終戦前に内地へ戻ったこと、また、東京の家が偶然にも空襲を免れたことにより、非常に多くの写真や史料が手元に残っている。その多くを、本研究会に寄贈してくださった。本稿では、和子の生い立ちをたどりながら、和子が大切にしてきた貴重な史料の一部を紹介していく。

#### 1. 吉富一家

1926年12月25日、大正天皇の崩御により元号が昭和となったその日、和子は東京で生まれた。父・吉富敏男は軍人（陸軍）で、母・季子（すえこ）の家系も軍人が多いという一家の長女（4人兄弟の一番上）であった。父方の祖父母である吉富林作・たみは長州の出身で、祖父はもともと武士であったが、屯田兵となり北

海道の滝川へ渡り、兵村監視の仕事をしていた。父・敏男はそこで長男として生まれた。入拓した土地は、原生林のような場所で、子どもに教育の機会を与えることが難しかったという。10人の子どもたちの教育の機会を求め、祖父母は開墾した土地を手放し、札幌へ移った。敏男は札幌中学校を卒業し、陸軍士官学校に入学（29期生）し、工兵となった。

母方の親族も多くが陸軍である。祖父・大久保徳明は、土佐の出身で、『坂の上の雲』でも知られる秋山好古と陸軍の同期であり、また、新田次郎『劔岳-点の記』に登場する参謀本部測量部長のモデルが、祖父であるという。要塞司令官として旅順にいたこともあった。祖母・仙は篤志看護婦をしていたという。母方の祖母は千駄ヶ谷で暮らしており、700坪あるお屋敷だった（祖父は母が幼い頃に亡くなっている）。母も10人兄弟で、下から2番目であった。父母は、母方の叔母の紹介で結婚することとなった。軍人の一家に生まれた母は、和子の嫁入り道具はまず喪服、と言っていたという。当時、軍人の家へ嫁いだ場合、夫は戦死する可能性が高い。軍人との結婚は、そのような覚悟をもって嫁ぐことを意味していた。

和子が生まれた頃、父は転任で熊本に単身赴任していた。和子も、父の転勤で熊本や大分で幼少期を過ごし、学齢に達する頃には東京へ戻り、千駄ヶ谷第一小学校に入学した。この頃父は、市ヶ谷にあった陸軍士官学校本科の工兵術科教官

であり、士官学校48期から50期あたりの工兵将校が教え子であった。

和子は、父からは「平常心」を教わり、母からは、「約束を守ること」を教わったと語っている。宿題は先生との約束だから必ずやるようにと、母から言われていたという。



図3 小学校時代の葉書

## 2. 満洲公主嶺へ

1937年に父の転任により一家で渡満し、公主嶺小学校5年生に転入した（31回生）。担任は着任したばかりの岩森亘先生だった。岩森先生は奈良県吉野郡の出身で、お国自慢をよくしていたという。

渡満したこの頃、はじめて月極の2円のお小遣いをもらうようになり、内地の友人たちに送る便箋や絵葉書を買ったという。幼少期からの葉書や手紙を、和子は大切に保管している。図3は、公主嶺小学校の同級生で、和子と同じく陸軍官舎に住んでいた友人が、熊本へ引っ越したのち、和子に宛てた葉書である。



図4 譜面

当時、音楽の授業で生徒たちは作曲をしていた(図4)。和子が5年生のときに書いた譜面が残されている。4章節分の譜面を書く宿題であったが、16章節書き、先生に褒められたという。タイトルは「皇軍」で、1番が陸軍、2番が海軍の歌詞となっている。

「笠置山行在所」と書かれた習字の作品もある(図5)。「高野山佛法僧」や「太平洋土用波」も書いたという。当時のすずりも、今でも大切に保管されている。図6は5年生の家事科の授業で作成したフランス刺繍の花瓶敷きである。

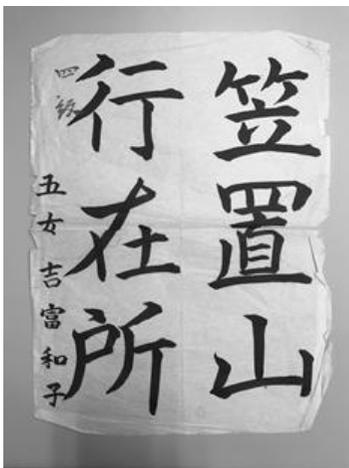


図5 小学校時代の習字

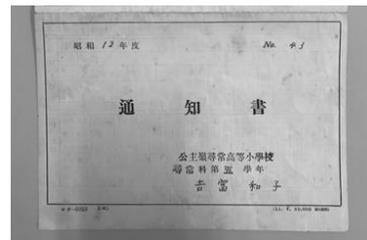


図7 公主嶺小学校通知書



図6 小学校時代の刺繍

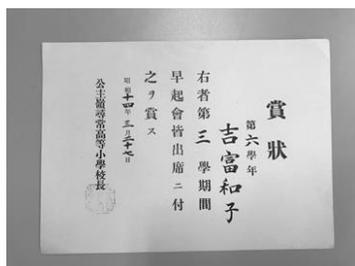


図8 週番・早起会

公主嶺小学校の通知書には、成績や出席状況、身長体重等が記されている（図7）。体操の授業が苦手だったという和子の当時の様子がよくわかる。

週番の任命書や、早起会の皆出席の賞状も残されており、当時の学校の取り組みが垣間見える（図8）。週番の仕事は、他の生徒よりも早く学校へ行き、掃除をしたり、窓が割れていないか等の確認をすることだった。早起会は、夏休みの取り組みで、早起きをして学校へ行き、ラジオ体操をして麦茶を飲んで帰ったという。当時のラジオ体操は、現代のラジオ体操と歌が異なっていた。

小学校5年生の修学旅行で奉天・撫順（2泊3日）を、小学校6年生のとき大連・旅順（3泊4日）を訪れており、その際のスタンプ帳が残されている（図9）。修学旅行中、5年生では小遣いが3円、6年生では5円であった。6年生の修学旅行の際のお土産である壁掛けを、大切に保管してきた。旅順の白玉山にある忠霊塔が描かれている。

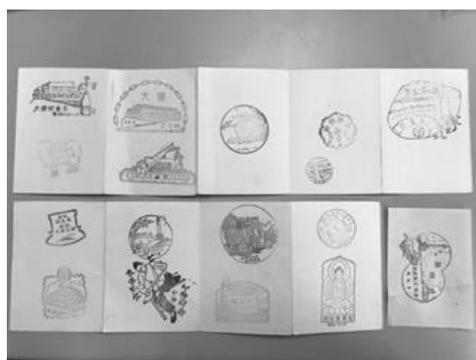


図9 修学旅行

1939年3月、公主嶺小学校を卒業した。和子が小学校で作った短歌を、手芸好き

の母がリボンにペインテックスで書き写し、仲の良かった友人たちに記念として配った。リボンには、「巣立つとも 永久に忘れじ学び舎の やさし師の君 ひなどりの友 和子」と記されている(図10)。



図10 小学校卒業証書とリボ

### 3. 新京錦ヶ丘高等女学校へ進学

1939年4月、新京錦ヶ丘高等女学校(5回生)に入学した。公主嶺には中学校や女学校がなく、進学する生徒たちは新京の学校を受験することが多かった。公主嶺から新京の女学校に通うためには、新京に保証人が必要だった。新京に住んでいた母方のいとこの一家(叔父・石川義久は軍人)に保証人を頼むこととなった。このいとこである石川忠久は、のちに漢文学者となり、令和改元の際に、新元号の考案を担当した1人である。



図11 女学校入学関連史料



図12 女学校時代の写真・紀章



図13 身分証・定期・授業料納付書

女学校の入学許可証や、合格者一覧を大切に保管していた。新聞記事「新京中等校合格者」には、新京中学校（新京一中）、新京商業高校、新京敷島高等女学校、新京錦ヶ丘高等女学校の合格者が掲載されている。自身の名前と友人の名前に印が付いている（図11）。

制服のリボンはいんじ色だった。記章も大切に保管されている。当時、女学校の会議室には、図12の写真のような全生徒の個人写真が常時展示したったという。生徒の髪型は自由ではなく、3つ編みをしていた転校生が、翌日にはおかつぱになったという。先輩後輩の上下関係が強く、上級生になると、前髪を分けることができたという。

女学校在籍の身分証明書や定期券、また、授業料の納付書も残されている（図

13）。毎月、授業料 500 円、校友会費（同窓会費）100 円、旅行積立金 200 円、家事費 20 円、計 820 円を納めていた。4 月と 9 月には保護者会費 150 円が加算されている。

女学校時代の家事科のノート 4 冊が残されており、大変貴重な史料となっている（図14）。ノートには、調理実習の記録や、栄養に関する板書などが丁寧に記されている。

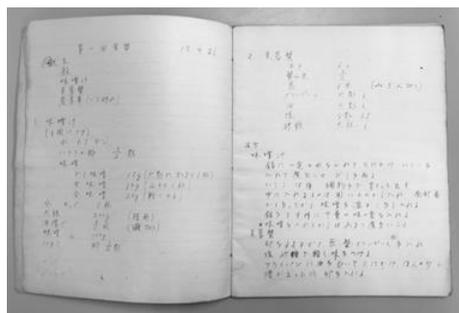


図14 女学校ノート

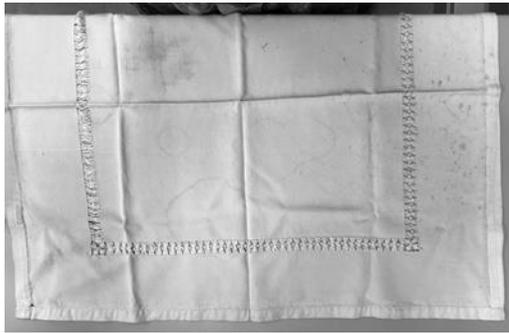


図15 家事科作品

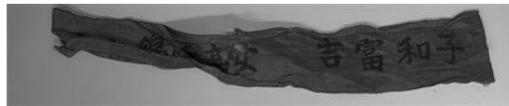


図16 修学旅行リボン



図17 着物と写真

女学校には割烹室があり、6人1グループで調理実習をしていた。割烹室の隣が試食室で、女学生たちの作った料理を先生たちにもふるまった。また、洋裁も和裁も女学校で習ったという。家事科の授業で作成したテーブルセンターも残されている(図15)。ドロンワークの作品である。

修学旅行で内地へ18日間行き、全国の神社仏閣を訪れる「聖地参拝」をした。その際に祖母や叔父叔母にも会いに行った。修学旅行中に山本五十六元帥の国葬があり、国葬の時刻に皆で黙祷をした。修学旅行でリュックに付けたというリボンが残されている。リボンには父による手書きで「錦ヶ丘高女 吉富和子」と記されている(図16)。

母が新しい着物を和子に仕立てるたびに、それを着て公主嶺のさくら写真館で写真を撮っていた。和子は、写真で着ている着物の布地をアルバムと一緒に収めて保管していた(図17)。白黒写真ではよくわからない着物の色や柄がよくわかる。母はよく土井呉服店へ買い物に行っていたという。

女学校2年生のとき、微熱が続くことがあり1年間休学することとなった。当時、結核を心配し、和子のように休学することは珍しくなかったようである。この頃、父親が牡丹江省興源鎮に単身赴任していた。単身赴任先から父親が和子に宛てた手紙が残っている(図18)。和子が学校の成績を報告した手紙に対する返事

のようで、成績が上がったことへのコメントや、家族の様子をうかがう内容が記されている。

また当時の手紙や葉書の中には、検閲済みのものも多く見られる。図19は、東京の友人から公主嶺の和子宛の手紙である。封筒の底が検閲で開封されており、検閲済みのシールが貼られている。

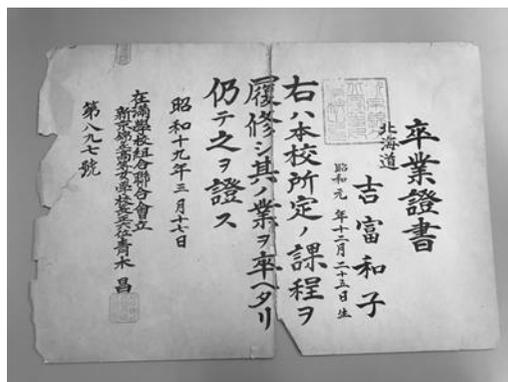


図20 女学校卒業証書

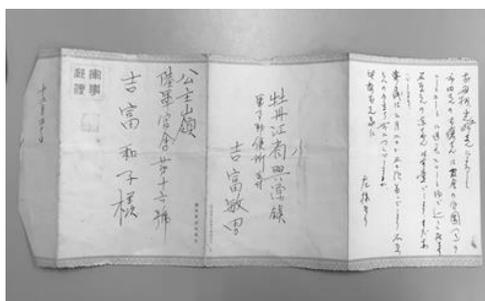


図18 父からの手紙



図19 検閲済みの手紙



図21 中原淳一の絵葉書1



図22 中原淳一の絵葉書2

1944年3月、和子は女学校を卒業した(図20)。卒業式では、「仰げば尊し」が禁止されており、代わりに「海ゆかば」

を歌ったという。

卒業後、新京に働きに行く友人も多かったが、体が弱いため電車通勤は避け、家の近所で仕事を探した。当時、幼稚園では、免許がなくても手伝いに働きに行くことができたので、公主嶺幼稚園で働くと考えていた。ちょうどその頃、父の南方への転任が決まり、内地へ戻ることとなった。

内地へ戻った和子と満洲に残っていた友人との手紙や葉書が残されている。当時満洲でも流行っていたという中原淳一の絵葉書もみられる。図 21 は、公主嶺小学校の同級生から別府の和子に宛てた葉書であり、図 22 は、別府に移った和子が、新京の友人に宛てた葉書（転居先不明で未達）である。和子は月刊の雑誌をとっており、はじめは『少女クラブ』を愛読していたが、途中から『少女の友』を購読するようになったという。当時の少女文化を享受していた様子がうかがえる。

#### 4. 内地・大分へ

1944 年、父が南方戦線へ転任となり、陸軍官舎から出なければならず内地へ戻った。転任の指令を受けて 1 週間で引越さなければならず、引越しの荷造りは大変だったという。荷造りには、柳行李や竹行李のほか、木製のみかん箱やりんご箱を使用した。父が長男であるため、長男の妻が舅・姑と一緒に暮らすべきだということで、父方の祖父母が暮らしていた大分県別府へ引越した。当時祖父

母は、北海道から、10 人の息子たちの暮らす場所を転々と移り住むような生活をしてきた。別府に移ってからの生活は厳しく、母の服や指輪等を売って生活していた。和子は別府で小学校の代用教員をしたが、戦後男性たちが復員し必要なくなった。当時さまざまな物資が不足しており、ノートもなかったため、酒屋で一升瓶に貼る紙をもらいノートの代わりに使用していたという。代用教員を辞めたのち、幼稚園の先生が病気だということで、代用保姆となった。その後、職を求めて 1 人で上京し、日本商工会議所の庶務部で働くこととなった。その後転職し大和証券に勤め、以来今日まで東京で暮らすこととなった。任命書によれば、月俸は、1945 年 6 月付けの代用教員及び、1946 年 1 月付けの代用保姆が 30 円、1948 年 12 月付けの商工会議所庶務部では 3710 円とある（図 23）。戦後のインフレの影響がよくわかる。



図 23 任命書・辞令

父は敗戦時には大佐であり、少将になることが内定していた身分であった。戦後は捕虜となり、インドネシアのレンバン島にいた。食事は 1 日 1 缶で、それ以

外は自給自足だったという。海水を沸騰させて飲んだり、猿を獲ったり、タピオカを食べていたという。父は、食事が出された缶の蓋を切り取り、俳句を彫って持って帰ってきた(図24)。同じ部隊に東京美術学校(現・東京芸術大学)から召集された人がおり、父と同様に缶に絵を彫っていた。非常に立派な絵であったという。



図24 父の作品

父の兄弟の末っ子である吉富忠雄(陸士59期)が当時名古屋の復員業務にあたっており、父が生きており内地へ向かっているという情報を得られた。いつ父が別府に到着するかわからず、和子と妹は、毎日駅へ父を迎えに行った。駅に現れた父は、それまでの恰幅の良い体型からは想像ができないほどやせ細り、杖にすがって歩いており、和子たちはとても驚いたという。ちょうどキャベツの収穫の時期で、キャベツがおいしいおいしいと食

べていた姿が今も印象に残っているという。

## 5. 同窓会史料

満洲で過ごした時期の史料のほか、戦後の同窓会関係の史料も数多く残されている。和子自身が直接関わっていた公主嶺会や、公主嶺小学校同窓会関連のものだけでなく、和子の家族・親族が関わっていた陸軍・海軍関連の同窓会史料が含まれている。中でも貴重なものとして、公主嶺小学校同窓会が出版した記念誌『満洲公主嶺——過ぎし40年の記録』(1987年)や写真集『満洲公主嶺——その過去と現在』(1988年)の制作過程を知ることのできる手紙や葉書、手書きの原稿がある。

図25は、和子が寄稿した原稿の原本である。掲載にあたり編集者から修正を依頼した原稿も多かったというが、和子の原稿は字数も守られており、文章も読みやすく、そのまま掲載されていたことがわかる。

記念誌や写真集の編集を手掛けた伊藤聖(33回生)及び土屋洸子(37回生)からの手紙や葉書も残されている(図26・27)。当時の陸軍官舎について、伊藤から問い合わせしている手紙や、同窓生の近況について土屋からの報告などが確認できる。今日手に取ることのできる様々な同窓会の史料とは、こうした個人が保管してきた史料や、記憶を頼りに編纂されてきたということがよくわかる。



図 25 記念誌原稿

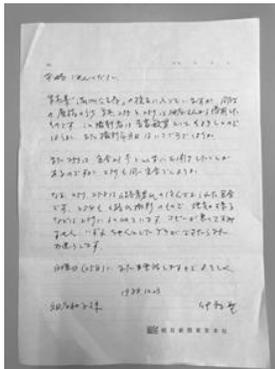


図 26 伊藤聖からの手紙

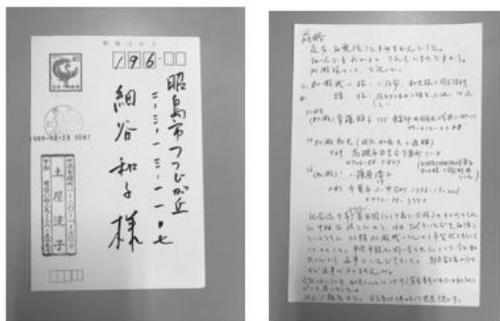


図 27 土屋洗子からの葉書

## おわりに

細谷和子史料は、幼少期からの膨大な史料群である。渡満した少女の日常生活や、軍人の父を持つ家庭の暮らしぶりを垣間見ることのできる貴重なものとなっている。このように散逸することなく、まとまった史料が自宅に保管されていることは、珍しいと言えよう。また、戦後の史料は、同窓会の出版物が、どのように個人の史料や記憶を頼りに編纂されてきたかを知ることのできる貴重なものとなっている。本研究会では、これらの史料を大切に保管するとともに、さらなる研究へと活用していく予定である。

## 寄贈資料目録

本目録には、2018年8月1日から2019年7月31日までに本研究会に寄贈していただいた資料を掲載しました。他にも貸与していただいた資料や写真、ハガキ、書簡、切抜も多くありますが、紙幅の関係上ここでは省略させていただきます。また、多数の資料を提供していただいた方の資料名は一部のみ（5冊まで）紹介させていただいております。

本研究会では皆様からいただいた資料をより多くの方々にご利用していただ

るように整理・保管し、ニューズレター発行の機会などを通じて順次公開していく予定であります。

本研究会に貴重な資料を寄贈・貸与していただいた方々には、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。また、今後とも継続して資料の収集を行っていく所存ですので、御理解・御協力の程よろしくお願い申し上げます。

(50音順)

### 上田裕子氏

・上田マリ『喜寿記念出版——あしたも元気で』私家版、1997年

### 梅沢順子氏

・錦州高等女学校同窓会 創立50周年記念号『錦園』1984年  
・阜新会『阜新終戦誌』1981年

### 奥村武彦氏

・奥村松平『洪熙の残照』（手記）

### 北原雅以氏

・奉天千代田小学校 17回生同期会制作「奉天千代田マップ」2004年

### 恵雅堂

・哈爾濱学院同窓会会報『アヴローラ (ABPOPA)』第11号～17号

### 小坂宣雄氏

・「大錦州新区劃図」（複写）1939年  
・「錦州市中心地営業案内図」（複写）1939年

・錦州会事務局『錦州会報』第42号

### 東郷量子氏

・東郷量子「第二次世界大戦終戦より日本帰国まで——1945年8月15日～1946年11月4日」(原稿)2018年

### 丸山淑子氏

・秋山都家乃「引き揚げ時前後の思い出」(原稿)1997年

### 村上節子氏

・奉天教育専門学校附属小学校・奉天千代田小学校同窓会『会報 ちよだ』第8、9、10、18、19、20号  
 ・奉天千代田小学校同窓会『奉天千代田

小学校創立50周年記念誌』1977年

・奉天会会誌『奉天会の歩み——草創より記念植樹まで』2003年  
 ・国際善隣協会『引揚60周年記念誌——いま後世に語り継ぐこと』2007年

### 山根光玄氏

・山根光玄「わたしと中国 記憶の記録——八路軍見たまま 1945～46年 虽是偽満州国却是養我的地方」(原稿)2017年  
 ・吉林省檔案館『東北抗日運動概況——1938—1942』吉林文史出版社、長春、1986年

(文責：尹国花)

## 2018年度（2018年8月～2019年7月）

### 「満洲の記憶」研究会活動記録

- 2018年8月1日 シベリア抑留者慰霊の碑調査(福島県会津若松市) 参加者:大野絢也、菅野智博、森巧
- 2018年8月19日 中国遼寧省瀋陽市調査 参加者:大野(絢)
- 2018年8月22日 中国吉林省公主嶺市調査 参加者:大野(絢)、菅野、甲賀真広、佐藤量
- 2018年8月23日 中国吉林省長春市調査 参加者:大野(絢)、菅野、甲賀真広、佐藤量
- 2018年8月24日～26日 中国内モンゴル自治区フルンボイル市調査 参加者:大野(絢)、菅野、甲賀真広、佐藤量
- 2018年10月5日 公主嶺会事務局長土屋洸子氏訪問 参加者:菅野、甲賀
- 2018年10月12日 平成30年公主嶺会大会 参加者:大石茜、大野(絢)、菅野、湯川真樹江
- 2018年10月29日 奉天千代田小学校同窓会懇親会 参加者:大石、大野(絢)
- 2018年11月12日 満洲引揚者(公主嶺)篠原操子氏インタビュー 参加者:湯川
- 2018年11月27日 平成30年度安東会大会 参加者:甲賀
- 2018年12月5日 満洲引揚者(新京)上田裕子氏訪問 参加者:菅野、甲賀
- 2018年12月21日 満洲引揚者(安東)古海建一氏インタビュー(第3回) 参加者:大野(絢)、菅野、甲賀、佐藤仁史、森
- 2019年1月22日 満洲関連慰霊碑(高野山)調査(和歌山県伊都郡高野町) 参加者:菅野
- 2019年2月18日 土屋洸子氏インタビュー(第10回) 参加者:菅野、甲賀
- 2019年2月23日 第2回企画運営委員会、2018年度秋季大会 参加者:飯倉江里衣、今井なるみ、大石、大野(絢)、菅野、甲賀、佐藤(仁)、佐藤(量)、鈴木航、朴敬玉、西井麻里奈、森、湯川
- 2019年3月3日 親縁山満光寺拓魂碑調査(長野県伊那市高遠町) 参加者:大野(絢)
- 2019年3月3日 伊那公園内の義勇軍慰霊碑調査(長野県伊那市) 参加者:大野(絢)
- 2019年4月6日 公主嶺会細谷和子氏イ

- インタビュー(第3回) 参加者: 大石、菅野、甲賀
- 2019年4月15日 第20回哈爾濱学院記念碑祭 参加者: 甲賀、森
- 2019年5月2日 観音寺開拓礎靈之碑調査(静岡県磐田市福田町) 参加者: 大野(絢)
- 2019年5月20日 公主嶺小学校37回生同期会 参加者: 甲賀
- 2019年5月24日 第67回奉天会懇親会 参加者: 甲賀
- 2019年7月13日 第3回企画運営委員会、2019年度春季大会 参加者: 尹、梅村卓、大野(太)、大野(絢)、菅野、甲賀、佐藤(量)、朴、森、林
- 2019年7月15日 細谷和子氏インタビュー(第4回) 参加者: 大石、甲賀
- 2019年7月20日 古海建一氏インタビュー(第4回) 参加者: 大野(絢)、菅野、甲賀、佐藤(仁)
- 2019年7月25日 満洲引揚者奥村武彦氏、上田裕子氏からの資料提供 参加者: 菅野、甲賀
- 2019年7月27日 古海建一氏インタビュー(第5回) 参加者: 大野(絢)、佐藤(仁)

(文責: 尹国花)

## 2018 年度秋季大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2019年2月23日に研究報告の場として、2018年度秋季大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、第1部として大石茜氏に研究報告「奉天におけるカトリック修道会と幼稚園」をしていただいた。続けて第2部として梅村卓・大野太幹・泉谷陽子編『満洲の戦後——継承・再生・新生の地域史』（勉誠出版、2018年）の編者で

ある梅村卓氏と大野太幹氏を迎えて「出版の経緯と目的について」および『満洲の戦後』の意義と今後の課題」というタイトルで報告をしていただいた。そして、本書について成果や意義、さらに今後の研究課題や展望について紹介していただき、参加者による多方面での議論を行った。

### 第1部

大石茜（筑波大学大学院博士後期課程）  
「奉天におけるカトリック修道会と幼稚園」

本発表では、パリに本部を置くカトリック修道会であるサン・モール会（現・幼きイエス会）が、奉天に設立した修道会・奉天雙葉会及び、修道院附属の奉天雙葉幼稚園について検討した。サン・モール会は、日本では女子教育で名高い雙葉学園を設立したことで知られている。メール・セン・マチルドが1872（明治5）年に来日して以来、サン・モール会のシスターたちは、内地で社会事業や教育事業を展開

し、「満洲国」建国後には、奉天にも事業を展開していた。当時内地の雙葉学園教頭を務めていた山崎忠雄<sup>(1)</sup>による著書と、奉天雙葉幼稚園の主任保姆を務めた日本人シスターであるメール・セン・ジョン・ベルクマンズ横澤<sup>(2)</sup>（以下、横澤）の手記「奉天雙葉学園10年の思い出」（執筆年不明）を資料として使用した。

奉天雙葉幼稚園の特徴は、ヨーロッパから赴任したシスターをはじめ、シスター及び園児の国際色が豊かな点であった。満洲国は、「五族協和」等の理想を掲げていたものの、実際には、日本人に優位な傀儡国家であったことは周知の通りである。

奉天雙葉幼稚園においても、幼稚園保姆が日本人であるため、幼児教育の基本的な言語は日本語を用い、教育方法も日本式のものであった可能性は高い。奉天に暮らす多様な子どもたちが、日本語及び日本の習慣を身につける施設として機能し得たという点において、植民地教育の一翼を担っていた可能性が指摘できる。しかしながら、横澤の手記からは、日本人の考えには同調しない外国人シスターや園児が多く存在したことがうかがえた。奉天雙葉会及び奉天雙葉幼稚園は、日本人が優位な空間ではなく、むしろ日本人シスターたちが翻弄される空間であり、日本式の施設運営や幼児教育のあり方を変更せざるをえなかった。雙葉幼稚園に関わった人々は、奉天の富裕層であり、階層的な制約があるものの、日本人地区に

ありながら、多様な背景を持った人々の集う特殊な空間となっていた。

(1) 当時、新栄女子学院幹事兼雙葉高等女学校教頭。

(2) 現在の幼きイエス会では全てシスターと呼んでいるようで、手記の表紙には「シスター・ジョン・ベルクマンズ横澤」とあるが、戦前はメール（英：マザー）とスール（英：シスター）の二階級があり、手記の中では他のシスターを戦前の呼び名メール／スールで記しているため、ここでは人名に限り当時の呼称に統一して表記する。

## 第2部

大野太幹（国立公文書館アジア歴史資料センター研究員）・梅村卓（茨城大学非常勤講師）『『満洲の戦後——継承・再生・新生の地域史』の出版の経緯と意義、今後の課題について』

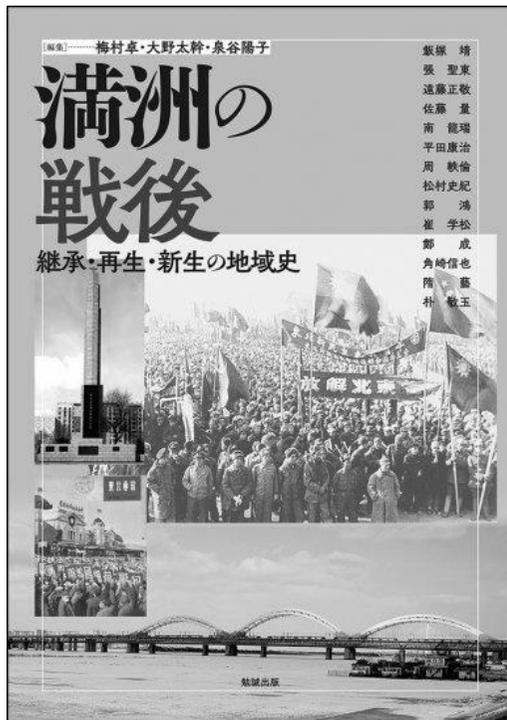
### 1 はじめに—出版の経緯

戦後70年を経て、引揚者・留用者など関係者の多くが亡くなり、「満洲」の記憶は次第に忘れさられようとしている。近年のアフガニスタン、イラク、シリア、ク

リミヤ半島などで起きている紛争は、いまなお民族と国家、支配と被支配という問題が、人類にとって解決され得ない問題であることを示唆している。それゆえ、日本が異なる民族、異なる価値観・慣習を持つ人々を支配した「満洲」は、その象徴的な存在として今なお問い直す価値があるのではないだろうか。

以上のような問題意識から、2018年11月、報告者の梅村と大野、そして泉谷陽子氏が編者となり、アジア遊学 225号『満

洲の戦後——継承・再生・新生の地域史』が出版された。その後、両名が所属する戦後「満洲」史研究会で書評会が行われた後、本研究会で本書の意義や課題について報告した。



梅村卓、大野太幹、泉谷陽子編『満洲の戦後——継承・再生・新生の地域史』アジア遊学 225号（勉誠出版、2018年）

戦後「満洲」史研究会は、満洲に焦点を当てた数少ない研究会として2006年に発足した。当時大学院生であった我々が中心となり、1、2ヶ月に1回の頻度で研究会を行い切磋琢磨してきた。そして2016年に10周年を迎えたのを期に、研究会の一つの総括として『アジア遊学』の

場をお借りして「満洲の戦後」の出版を企画したのである。

意義について一言で言えば、日本人の視点から語られることの多かった「満洲」・東北地域を現地の人間や地域の視点から捉え直し、「満洲国」（以下、括弧を省略）の崩壊で断絶するのではなく、「戦後」に焦点を当てたことにあるだろう。本書は戦後の東北を強く意識しており、満洲国期についても触れられてはいるものの、それは東北への移行を前提として叙述されている。サブタイトルにあるように、満洲国から戦後の中国東北へ何が引き継がれたのか（継承）、満洲国成立以前に存在していた何が満洲国消滅後に復活したのか（再生）、満洲国消滅後何が新たに創出されたのか（新生）を明らかにすることが、本書において全執筆者に取り組んでいた課題なのである。これだけ満洲国崩壊後の満洲・東北地域に焦点を当てた研究成果は、従来存在しないと行って良いだろう。その点が画期的であり、新たな研究であると言える。

さらに、本書執筆に当たり、すべての筆者には以下の3点を考慮していただくようお願いした。それは、満洲国期やそれ以前からの連続性を可能な限り示すこと、従来の認識に再考を促す歴史的事実を可能な限り提示すること、従来明らかにされていなかった歴史的事実について可能な限り実証的に解明することである。編者としては、上記3点は本書に掲載されている各論稿において、十分に体现され

ていると自負しているが、個別の評価は読者各位に委ねたいと思う。

満洲は研究者だけでなく広く一般にも関心が共有されており、そこに『アジア遊学』で出版した意義もあるのではないだろうか。編者としては高校生や大学生、満洲に関心を持つ方々など一般読者でも読みやすいよう、平易な言葉遣いや内容となるよう心がけたつもりである。本書を多くの方が手にとっていただき、満洲・東北地域の記憶が継承されていくことの一助になったとすれば、編者としてこれほど嬉しいことはない。

## 2 本書の意義と今後の課題

### I 満洲に生きた人々の戦後

第1節の構成は以下のとおりである。

飯塚靖 「ハルビンにおける残留日本人と民族幹事——石川正義の逮捕・投獄と死」

張聖東 「『満洲国』陸軍軍官学校中国人出身者の戦後」

遠藤正敬 「[コラム]『国民』なき国家——満洲国と日本人」

佐藤量 「[コラム]戦後日本のなかの引揚者——満洲の記憶と想起をめぐって」

南龍瑞 「[コラム]戦後中国東北地域の再編と各勢力の協和会対策」

本節は、満洲国期から戦後にかけての「人」にスポットを当て、主に日本人およ

び漢人の動向について考察した論考から成る。飯塚論文では、従来「新中国」と日本の友好の象徴的な存在であった留用日本人について、実際には苛酷な政治対立に巻き込まれ、命を落とした日本人がいたことを、石川正義という「民族幹事」の命運を軸に詳述する。張聖東論文では、満洲国軍の士官学校であった軍官学校に入学した中国人(漢人)兵士の戦後について、国民政府軍および共産党軍の存在に翻弄されながら、自らの置かれた状況に応じた人生の選択を迫られる姿が描かれる。

本節はコラムも充実しており、遠藤コラムは、太平洋戦争終結後70年・冷戦終結後30年が経過してもなお、国際社会における行動や民族意識を規定し続けている「国籍」という概念について、満洲国の日本人を鏡として問い直すものである。佐藤コラムは、満洲からの日本人引揚者という問題を通して、関連する史資料や関係者の記憶を継承・保存することの重要性を指摘し、歴史を記録(記憶)することの意味を問いかける。南龍瑞コラムは、満洲国の動員組織であった協和会の戦後を考察したものであり、従来ほとんど研究されていないテーマである。

本節を通読すれば、歴史という荒波の中で、人はいかに生きるべきかという極めて困難かつ苛酷な命題を考える契機を得られるだろう。課題としては、本節では考察の対象がほぼ日本人と漢人に限定されており、他の民族にとって満洲国ないしは戦後の東北が何を意味したのかにつ

いて明らかにできなかったことが挙げられる。満洲には、満洲国成立以前から戦後にかけて、白系ロシア人、ソビエト・ロシア人、ポーランド人、ドイツ人、ユダヤ人、モンゴル人、朝鮮人、ツングース系少数民族（ニブフ人・オロチョン人等）など多様な民族が居住していた。彼らは満洲国消滅から戦後の内戦期をいかに生きたのか。とくに、ツングース系少数民族については、とくに史料的制約が大きい。しかし、残存する史料が限られることが、彼らがそこに存在しなかった、あるいは歴史の荒波を受けなかったということを意味しない。残された課題はまだ大きい。

## II 戦後の経済と国際関係

第2節の構成は以下のとおりである。

大野太幹「長春華商の命運——満洲国期から国共内戦期にかけての糧棧の活動」

平田康治「ソ連による戦後満洲工業設備撤去——ロシア文書館新資料による再検討」

大野太幹・周軼倫「撫順炭鉱の労務管理制度——「満洲国」の経済遺産のその後」

松村史紀「[コラム] スターリンの密約（1950年）——戦後満洲をめぐる国際関係再考」

本節では、戦後の国際関係との関連から、満洲国期および戦後期の経済につい

て考察する。満洲国消滅後の国際関係と  
言えば、ソ連が最重要ファクターであり、各論考において程度の差はあるがソ連との関係について触れられている。大野論文では、満洲国成立以前から該地域の最有力華商として存在していた糧棧（穀物商人）につき、当時の長春（新京）において二大糧棧と称されていた裕昌源と益発合にスポットを当て、満洲国期から戦後にかけての糧食供給に果たした役割を詳述する。平田論文では、従来史料的に実証されていなかった満洲国の工業設備撤去につき、ロシア側のアーカイブ史料を用いて、ソ連による計画的・大々的な持ち去りがあったことを明らかにする。大野・周論文では、満洲国成立以前から戦後にかけての撫順炭鉱における労務管理をテーマとして、とくに労働力請負業者であった把头の存在と役割、そして戦後の共産党による把头排除・労務管理体制確立のプロセスについて詳述する。

松村コラムでは、スターリンが中華人民共和国との間で結んだ、満洲と新疆におけるソ連の影響力を確保するという「密約」について、当時の中国および満洲を取り巻く国際環境という側面から再考する。

本節に含まれる論考では、従来から知られてはいたものの実証が不十分であった歴史的事象につき、新たな史料や視点から再考察し、これまで明らかにされていなかった歴史事実を提示したことが大きな成果であったと考える。課題という

点では、テーマを経済に関わるものに限定したため、国際関係の大きな部分を占める外交につき、ほとんど触れられなかったことが挙げられる。第1節の課題とも関わるが、満洲国消滅後の国際関係という面では、満洲国にあった「外国」の公館（ドイツ・イタリア・スペイン・タイ・汪精衛政権など）、外国にあった満洲国の公館（ドイツ・イタリア・日本・タイ・汪精衛政権など）、また宗教外交という面では、ヴァチカン、東方正教会などがあつた。戦後にそれらはいかに処理され、また関係はいかに清算されたのか。形の上では、少なくとも国際法上は独立国として存在していた満洲国と、その消滅後の国際関係を考える上で、ぜひ明らかにしたいテーマである。

### Ⅲ 地域と文化

第3節の構成は以下のとおりである。

南龍瑞・郭鴻「満映から『東影』へ——政治優先時代のプロパガンダ映画」

梅村卓「『東北画報』からみた戦後東北地域」

崔学松「戦後満洲における中国国民統合と外来言語文化受容——朝鮮族社会を中心に」

梅村卓「[コラム] 戦後満洲のラジオと映画」

鄭成「[コラム] 大連」

本節の「地域と文化」は『満洲の戦後』

の特色の一つである。満洲に関する研究自体は少なくないものの、文化を一つのカテゴリーとして大きく取り上げた研究はあまり無いと言って良い。ただし、文化が包有する対象は非常に広く、当然のことながら全てを網羅することは出来ない。それは紙幅の上からの限界もあるが、専門とする研究者が少ないという事情も存在する。

例えば本節で取り上げた民族は朝鮮人のみで、Ⅰ、Ⅱで日本人や漢人を取り上げたことを含めても、満洲人、モンゴル人、ロシア人などの営みについては触れられていない。编者としては力不足の誇りを免れ得ないだろう。また、文化であれば、蕭軍ら「東北作家群」などの文学方面の論考があっても良かったのではないかと考えている。

以上のような課題は、本書が「満洲の戦後」に関して国内外の研究者の力を結集したものというよりは、戦後「満洲」史研究会の活動をベースとしたものであったことから生じた限界であろう。より多様な研究成果を取り入れ、議論を深めるためには、研究会の枠を越えた研究協力が必要である。後日『満洲の戦後』を書籍化する機会があれば、ぜひ挑戦してみたいと考えている。

本節の各論について若干触れておくと、南龍瑞・郭鴻論文は文化面ではメジャーな満洲映画協会の戦後を取り上げた論考である。戦後の映画製作の実態などに新たな知見が見られ、関係者へのインタビ

ューなどを使って詳細に明らかにされている。ただし、本書のテーマの1つである満映から東北電影制片廠への継承関係は、必ずしも明示的ではない。また戦後の部分は、共産党側の史料を使わざるを得ないため、公式党史の枠組みを超えるのが難しい面がある。満映の映画が満洲の住民に受け入れられなかった一方で、共産党の映画は喜んで見られていたというが、その評価に対しては疑問の余地があるろう。

梅村論文は共産党が発行した『東北画報』を用い、写真という戦後満洲についての新たな史料を発掘した点と、共産党の東北に対する表象のあり方を考察した点で意義がある。ただし本論文も、誌面や技術、設備の面で、満洲国期の雑誌と継承関係があったのかについては考察されていない。

崔論文は、戦後から1950年代の双百政策時期までという比較的長いタイムスパンで、朝鮮族(人)の中国政府に対する対応を考察している。共産党の漢族への同化政策については、今日のチベットや新疆ウイグルの問題ともリンクするものであり、興味深い内容である。ただ、「漢文派」と「朝文派」という二項対立的な独自の派閥区分の妥当性については疑問が残る。

また本節は、2編のコラムも収録している。梅村コラムは満洲国期から戦後への連続性を意識し、戦後の共産党のラジオと映画が、多くの満洲国の施設と人材を

もとにして運営されていたことを考察している。鄭コラムは、近代以降の満洲・東北において極めて重要な都市・大連について、ロシア時代、日本時代、現代中国時期へと、19世紀末から現在までの大連の歩みやその歴史記憶について考察している。

#### IV 地域社会と大衆動員

第4節の構成は、以下のとおりである。

角崎信也「土地改革と農業集団化——北満の文脈、1946-1953」

隋藝「国共内戦期、東北における中国共産党と基層民衆——都市の『反奸清算』運動を中心に」

泉谷陽子「『反細菌戦』と愛国衛生運動——黒竜江を中心に」

各論考とも戦後の大衆動員を考察の対象にしていることから、中国共産党の政策に焦点を当てている。中国共産党の大衆動員や最終的な勝利に関しては、すでに革命史観から距離をとった研究がなされて久しいが、共産党史の中でも東北地域での活動に焦点が当てられていることは従来の研究にはない特徴であろう。

本節の内容を総じて言えば、なぜ共産党が最終的に勝利したのかという非常に大きなテーマを課題として、共産党が戦後の満洲・東北地域を掌握していく過程が詳細に考察されている。それは1949年の共産党の勝利の重要な契機となってい

たのが、東北における国共内戦の勝利であったからである。

共産党の革命史観では、土地改革によって貧しい農民たちの支持を獲得したことが勝利の要因とされているが、角崎論文、隋論文ともにそれは明確に否定されている。土地改革による土地の細分化は、大規模経営が必要な東北には合っていなかったし、共産党による大衆運動は農民たちに恩恵を与えるよりも重い負担を負っていたという。近年の関内の共産党根拠地に対する研究でも、土地改革の神話は否定されており、共産党全体にある程度共通して言えることであろう。

しかし、そうであるなら、当然次に出てくる疑問は、なぜ共産党は民衆を動員し、勝利しえたのか、ということである。もちろん、本書は共産党史に焦点を当てた特集ではないため、この問いに対して回答を示してはいないが、不満に感じた読者が居たかもしれない。

この点について考えるためにも、共産党の根拠地となっていた北満についてだけでなく、長く国民党側が支配していた南満地域に対するより一層の分析が必要となる。南満は、北満よりもむしろ関内との共通点が多く、満洲・東北と一括りにすることには注意が必要である。最終的には敗者となった国民党であったが、それゆえにこそ、共産党の北満との比較検討が必要となるだろう。

ただ、共産党が東北や他の地域社会に浸透し、支配する過程においては、大衆動

員が重要な役割を果たしていたことは、共通見解になっていると言えるだろう。泉谷論文は、戦後初期の大衆運動である「愛国衛生運動」を取り上げ、朝鮮戦争でアメリカと対峙する危機を迎え、「細菌戦」に対する「愛国衛生運動」が東北を団結させる大衆運動として展開された過程や背景を明らかにしている。

とくに、アメリカが細菌兵器を使用したとする中国側の認識の背景に、731部隊による細菌兵器の実験・開発と、その記憶の継承があったという指摘は、満洲国からの継承関係を見る上で大変興味深い。とはいえ、筆者自身が認めているように、衛生史や中国共産党史ではなく、地域史としての視点を重視するのであれば、満洲国の医療施設や技術、留用された医者や看護婦との関係など、戦後の東北の特殊性について更に考察が必要となる。

### 3 おわりに

以上、各節の紹介部分で述べてきたように、満洲の戦後というテーマには、まだまだ多くの課題が残されている。個別の課題はすでに提起してきたので、ここでは総体としての課題について述べ、むすびの言葉としたい。

今回、編者として最も強く感じた点は、戦後の状況をより深く考察するためには、満洲国期の状況についての理解をより深めなければならず、さらに満洲国期のことをより深く理解するためには、満洲国成立以前の状況を知っていなければなら

ないという逆説的な現象であった。

とくに、本書で相対的に不足していると感じられる国民政府統治地域・統治時期の状況、国民政府軍と在地社会との関係、東北における国民政府による「動員」といった問題を明らかにするためには、満洲国成立前の状況を知らなければならぬだろう。また、すでに各論で提起された、なぜ共産党が勝利したのかという命題に対しても、満洲国期前後に存在した制度や社会状況などをより深く考察する

ことで、共産党が何を変革し、あるいは何を利用した結果であったのかという点について重要な手がかりが得られるであろう。

编者としては、今回の『満洲の戦後』の出版は、あくまで戦後満洲研究の端緒として位置づけている。今後、より多くの方々にご参加いただき、さらなる研究の深化が進むことを期待したい。

## 2019 年度春季大会報告要旨

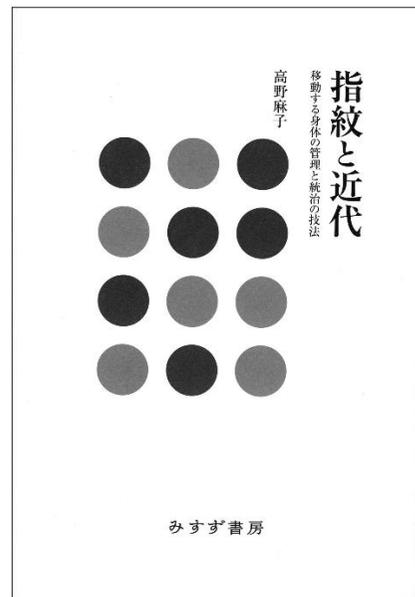
「満洲の記憶」研究会は、2019年7月13日に研究報告の場として、2019年度春季大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、第1部として高野麻子氏に研究報告「日本帝国における身体管理と知の創出——個人識別・遺伝学・医学の交差点」をしていただいた。続けて第2部として「満洲の記憶」研究会のメ

ンバーによる活動報告を行った。甲賀真広「『満洲の記憶』研究会と公主嶺」、大石茜「公主嶺小学校同窓会の変遷と特徴」、湯川真樹江「ある留用者夫人日記の紹介と分析」というタイトルで、公主嶺に関する調査・インタビューの成果や意義、さらに今後の課題について、参加者による多方面での議論を行った。

### 第1部

高野麻子（明治薬科大学専任講師）「日本帝国における身体管理と知の創出——個人識別・遺伝学・医学の交差点」

本報告では、「満洲国」で実施された指紋登録の実態を明らかにするとともに、指紋が個人識別だけでなく、遺伝学、人類学、医学的関心のもとで、人の管理にかかわっていたことを指摘した。報告の前半では、拙著『指紋と近代——移動する身体の管理と統治の技法』（みすず書房、2016）をもとに、指紋による個人識別の歴史的変遷と、「満洲国」での大規模な指紋登録、とりわけ都市部の労働者を対象に実施された指紋登録制度を取り上げた。



『指紋と近代——移動する身体の管理と統治の技法』（みすず書房、2016年）

「満洲国」では、犯罪者指紋と労働者指紋を管理するために 1939 年に指紋管理局を設置し、毎月 10 万枚の指紋原紙を管理していた。そこで、なぜ管理の手法に指紋が選ばれたのか、実際にどのように運用されていたのかについて概説した。

後半では、指紋管理局に保管されていた指紋原紙が個人識別だけでなく、人類学的研究の資料としても用いられていた事実、そこに軍医がかかわっていたことを指摘した。こうした指紋への幅広い関心は、「満洲国」だけではなく、当時の日本の医師（とくに法医学者）を中心に、朝鮮、台湾にも広がっていた。かれらは、多様な地域のデータを収集・比較するなか

で、人種の分類をはじめ「日本人」の範囲や定義づけを試みていた。

以上から、指紋による身体管理は、個人識別という個の管理から人種という集団の管理を貫くものであったことがわかる。本報告で提起した内容は、「満洲国」の独自の文脈を浮き彫りにするとともに、日本帝国の形成・維持を目的に、どのような身体管理の技法や知識が必要とされていたのかを明らかにするものである。さらに、ここでの問題関心は、身体管理が複雑化する現代社会において、依然としてなくなることのない差別や選別の実態を考察する視点にもつながると考えている。

## 第 2 部

甲賀真広（首都大学東京大学院生・日本学術振興会特別研究員 DC1）『満洲の記憶』研究会と公主嶺

大石茜（筑波大学大学院生）「公主嶺小学校同窓会の変遷と特徴」

湯川真樹江（香港中文大学歴史系訪問学者）「ある留用者夫人日記の紹介と分析」

「満洲の記憶」研究会の甲賀真広、大石茜、湯川真樹江は、2019 年度春季大会の場にて、近年の研究会の活動の一環、特に公主嶺という地域を中心に展開した史資料収集やインタビュー、現地調査、それらを利用した一部の研究成果について報告

した。本要旨では、各報告の内容を割愛して、研究会と公主嶺との出会いを中心に紹介する。

研究会がこのように公主嶺という地域に関する多くの調査を展開できた背景には、土屋洸子氏との出会いがある。研究会メンバーの大石茜は、満洲引揚者の竹内テル子氏の紹介により公主嶺小学校同窓会事務局の幹事を務める土屋洸子氏と知り合った。2017 年 1 月、大石は土屋氏のご自宅を訪問し、満洲での経験についてお話をうかがった。

はじめは大石の個人的な研究活動であったが、土屋氏は公主嶺の歴史について

非常に詳しくあったため、研究会として土屋氏に引き続きインタビューをさせていただくこととなった。これまで10回にわたりご自宅でインタビューを実施している。さらに土屋氏のご厚意により、公主嶺小学校同窓会や37回生同期会に参加させていただき、また様々な公主嶺関連史資料をご提供いただいた。

その史資料のなかには、土屋氏個人や家族のモノ、公主嶺関連団体の資料などが含まれている。例えば、池田雪江日記（土屋氏の母親）、家族写真、回想録、各種関連団体の会報、公主嶺関連資料集、公主嶺小学校同窓会写真アルバム、書簡、ハガキ、地図などが挙げられる。さらに、同窓会への参加を通して細谷和子氏とも知り合うことができ、細谷氏からも貴重

な関連史資料を研究会にご寄贈いただいた。

公主嶺は大連や哈爾濱、長春（旧新京）、瀋陽（旧奉天）のような大都市ではなく、小さな地方都市である。こうした様々な史資料を収集できたことによって、公主嶺という一地域の歴史を複眼的に検討することが可能となった。それは、日本人の満洲生活や戦後の満洲記憶などの理解にもつながるだろう。

今後、研究会ではこれらの史資料の整理やインタビューの整理を進めると同時に、それらを利用した研究を継続的に進める予定である。最後にこの場をお借りして、長きにわたり研究会の活動をご支援、ご協力いただいた土屋洗子氏に心から感謝の意を表したい。

## おしらせ

### 論文集刊行についてご報告

「満洲の記憶」研究会では、この度論文集として、佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、2020年4月）を刊行することとなりました。以下、その概要や目的について紹介させていただきます。

本論文集では、満洲引揚者の戦後経験と記憶表象に注目し、引揚者の歴史を戦後日本社会の中に位置づけ直すことを試みました。注目するのは、満洲経験者が書き残し続けた会報です。会報を通して、戦後の長い時間をかけて書き手の世代交代も経ながら蓄積されてきた満洲経験者の語りの変遷を知ることができ、集団それぞれの物語や記憶が構築されていく過程を読み取ることが可能になると考えています。

そして、戦後日本における満洲の記憶のあり方を問うということは、戦後日本がいかに加害の歴史や植民地経験を忘却してきたかを改めて問い直すことであり、帝国の崩壊に伴う社会再編のあり方を再考することとなります。これは今日

にも連綿と続く「国民」と「他者」をめぐる包摂／排除に関する現代的問いであるともいえます。



佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2020年4月刊行 / A5判 368頁 / 本体 5,000円 + 税 ISBN : 978-4-497-22004-2

## 論文集『戦後日本の満洲記憶』目次

### 序章 〔佐藤量〕

### 第Ⅰ部 闘う記憶

戦後日本における国策会社の表象とその変遷——1950～60年代の恩給請願運動を事例に〔大野絢也〕

満洲興農合作社同人会の活動からみる戦前の表象と語りの特徴——恩給請願運動に着目して〔湯川真樹江〕

満洲国軍出身日本人の恩給請願運動と満洲国・満洲国軍像〔飯倉江里衣〕

### 第Ⅱ部 葛藤する記憶

青少年義勇軍の記憶——会報を通じた継承と変容〔大石茜〕

ふるさとの語り方——大連引揚者二世の編纂物にみる満洲の記憶〔佐藤仁史〕

語られる「安東史」——1950～1970年代初期における『ありなれ』を中心に〔菅野智博〕

【コラム】間島中学校出身日本人の訪中と訪韓〔尹国花〕

【コラム】満蒙開拓団「集団自決」の語りと〈沈黙〉——久保田諫さんとの出会い〔本島和人〕

### 第Ⅲ部 周縁の記憶

女学生の満洲観——大連弥生高等女学校同窓会誌『弥生会々報』の分析から〔佐藤量〕

冷戦体制下における大同学院同窓会——日本と台湾の場合〔林志宏〕

戦後日本社会における中国帰国者をめぐる記憶とその変容——中国帰国者の会と鈴木則子を中心に〔森巧〕

【コラム】ある自分史にみる満洲の記憶と地域史研究の役割〔安岡健一〕

【コラム】ある牧師の国際移動と教会ネットワーク——アメリカ・満洲・日本〔甲賀真広〕

【コラム】メディア関係者がみた満洲〔安藤恭子〕

### 問い合わせ先

東方書店 【中国・本の情報館】 <https://www.toho-shoten.co.jp>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-3

営業電話 03-3937-0300/FAX03-3937-0955

メールアドレス [tokyo@toho-shoten.co.jp](mailto:tokyo@toho-shoten.co.jp)

## 資料提供のお願い

「満洲の記憶」研究会では、満洲に関する資料を収集しております。「寄贈資料目録」に示したように、これまでに書籍や会誌、写真、ハガキ、書簡など多数の資料を寄贈・貸与していただきました。これらの資料は満洲の記憶を継承する上で極めて貴重な資料であると考えております。

ご提供いただきました資料は本研究会が整理・管理し、学術研究において活用いたします。資料の公開方法は、資料目録を作成して本ニューズレターに掲載させるという形式を採ります。提供資料に

含まれる個人情報等には深甚な配慮をいたします。

また、お手持ちの資料には、貴重なもの、思い入れの強い品でお手元に置いておかれたいものなどもおありのことと思います。資料のご提供ではなくとも、本研究会の編集委員メンバーによって複製・撮影等をさせていただくという方法もごございます。そのような希望がありましたら、ご相談いただければと存じます。ぜひ情報を本研究会までお寄せくださいますよう、ご協力お願いいたします。

## カンパのお願い

「満洲の記憶」研究会では、継続して皆様からのカンパを募っております。本研究会は若手研究者・大学院生が中心となって運営しているため、これまで編集委員の寄付によって活動を続けてまいりました。

しかし、活動範囲が海外および日本全国に拡がり、予想以上に多くの資料が集まったことにより、資料調査や整理・電子化などに使用する資金が慢性的に不足する状況となっております。そのため研究活動の資金使用のみに限定した口座を開設し、研究会の活動に御賛同いただける方から、御支援を賜りたく存じます。カンパは1口1,000円で、文末に記載し

ている銀行口座へお振込いただけたら幸いです。

なお、御支援をいただいた方には、ニューズレター内にてお名前を掲載し、御支援いただいたことを皆様に紹介させていただく予定です（お名前の掲載を希望されない方は事前に御連絡ください。そのように対応いたします）。また、カンパしてくださった方は、必ず本研究会宛にメールまたはお手紙で御連絡ください。

研究会としても誠実かつ積極的に活動をしてまいりますので、御支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

「満洲の記憶」研究会銀行口座

銀行：三井住友銀行

支店：国立支店（店番号：666）

種類：普通預金

口座番号：8088124

口座名：菅野智博（カンノ トモヒロ）

### 会員募集及び情報配信のお知らせ

本研究会は随時会員を募集しています。年会費は無料となっております。会員には、ニューズレター及びイベント情報の配信を行います。入会希望者は次の連絡先まで御連絡ください。

ブログ：<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

Facebook：「満洲の記憶」研究会

[https://www.facebook.com/groups/35955933](https://www.facebook.com/groups/359559330877470/)

[0877470/](https://www.facebook.com/groups/359559330877470/)

## 《满洲记忆》（“满洲记忆”研究会通讯）第6期

## 中文目录

- 追忆片片——满洲遣返日侨的采访记录 ..... 口述人：古海建一  
编辑·解题：大野绚也、佐藤仁史、井田光祝
- 延吉遣返的经历——从战败到回到日本 ..... 执笔：东乡量子  
编辑：朴敬玉
- 游牧的杂草 ..... 执笔：甲贺绥一、甲贺绫  
解题：甲贺真广  
编辑：甲贺真广、森巧、梅村卓、大野太干
- 一位少女的满洲生活——细谷和子女士资料介绍 ..... 大石茜
- 寄赠资料目录
- 2018年度“满洲记忆”研究会的活动记录
- 2018年度“满洲记忆”研究会秋季大会报告提要
- 2019年度“满洲记忆”研究会春季大会报告提要
- 会务公告

Memories of Manchuria (Newsletter of the Society for “Memories of Manchuria”)  
No. 6

Contents

What Remains for Reminiscence, Interview with a Repatriate from Manchuria .....	FURUMI Kenichi, OHNO Junya, SATO Yoshifumi, IDA Mitsunori
Repatriating Experiences from Yanji, From the End of WWII to Returning to Japan .....	TOGO Kazuko, PIAO Jingyu
Nomadic weeds .....	KOGA Yasukazu, KOGA Aya, KOGA Masahiro, MORI Takumi, UMEMURA Taku, OHNO Taikan
A Japanese Girl’s Life in Manchuria, Introducing the Documents of Hosoya Kazuko .....	OHISHI Akane
List of Donated Materials	
Chronology of the Society for “Memories of Manchuria” Activities	
Summary Report of the Autumn 2018 Meeting	
Summary Report of the Spring 2019 Meeting	
Notice	

## 編集後記

編集作業の関係上大幅に遅れてしまいましたが、『満洲の記憶』第6号をお届けします。本号は、インタビュー記録1編と引揚者の回想録1編、資料紹介2編で構成されています。本号ではニューズレターの初めての試みとして、古海建一氏のインタビュー記録を問答形式で掲載しました。研究会では発足時より多くのインタビューをおこなってきました。これらのインタビューデータを今後どのように整理・公開するかは研究会としてもさらに議論を重ねていきたいと思えます。また、甲賀綏一、甲賀あや両氏による「遊牧の雑草」は、アメリカと満洲に渡ったある牧師一家の歴史を綴った貴重な手記であり、満洲研究に限らず移民研究やキリスト教史研究にとっても貴重な資料です。

研究会は2013年7月の設立から7年近くが経過しました。この間の活動の1つの集大成として、論文集『戦後日本の満洲記憶』（佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編、東方書店、2020年3月）を刊行することとなりました。これもまた、研究会の活動を各方面から支えてくれた皆様のおかげです。大変遺憾ではありますが、お世話になった方々の中には他界された方も少なくありません。今後も「満洲の記憶」研究会では、史資料の整理・保存・利用、成果の発信を継続し、様々な記憶を「バトンタッチ」することで、研究会の活動をサポートしていただいた皆様に恩返ししていきたいと考えています。（菅野智博）

## 『満洲の記憶』 第6号

発行日：2020年3月31日

編集：「満洲の記憶」研究会編集委員会  
第6号編集委員：

尹国花	梅村卓
大石茜	大野太幹
大野絢也	郭嘉輝
菅野智博	甲賀真広
佐藤仁史	佐藤量
施昱丞	朴敬玉
森 巧	湯川真樹江

発行：「満洲の記憶」研究会

〒186-8601 東京都国立市中2-1

一橋大学大学院社会学研究科

佐藤仁史研究室 気付

Tel・Fax：0420-580-8885

◇本誌は年刊オンラインジャーナルで、毎年9月に刊行されます。本会学年暦は、毎年8月1日から次年7月31日です。

◇本誌は一橋大学機関リポジトリにおいて配付しています。

<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095>

◇「満洲の記憶」研究会へのアクセス

・研究会 ブログ：

<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

・研究会 Facebook：

<https://www.facebook.com/groups/359559330877470/>